

2011年02月28日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（1）】 はじめに

ほんの少し前迄、フィンランドは「遠い国」「寒い国」「サンタクロースの国」でしかなかった。ところが、ベルリンの壁が崩壊し、ソ連の呪縛から解放されてから、短期間にフィンランドは「教育大国」「福祉大国」「通信大国」に変貌した。

かつて、第二次大戦後の焼け野原から、世界第二位の経済大国になった日本は「奇跡の国」と呼ばれた。今やフィンランドが「奇跡の国」である。この両国を比べてみよう。日本の人口は1億2千万だが、フィンランドの人口は僅か530万人だ。面積はほぼ同じで、両国とも天然資源に恵まれていない。戦後の日本はゼロからのスタートだった。フィンランドは、第二次大戦で戦勝国ソ連と戦った為、日本、ドイツ、イタリアと並んで敗戦国に列せられた。そしてソ連に対して莫大な賠償責任を負った。よって、フィンランドはマイナスからの出発であった。日本は戦後まもなく朝鮮戦争特需という幸運に恵まれたが、フィンランドに幸運は訪れなかった。フィンランドは、日本に比べてさえ「無い無い尽くし」からの再興だった。

私は1970年代、商社マンとして、スウェーデンの首府ストックホルムに駐在し、週末はよく隣国フィンランドへの船旅を楽しんだ。その頃フィンランドはソ連の傘下であり、日本から敬遠されていた。一方フィンランド人は日本人が好きだった。フィンランドが1917年にロシアから独立できた一因は、日露戦争で日本がロシアを破ったからと言われる。ヘルシンキ市内でタクシーに乗ると、『ホテルに泊まらず、我家に泊まらないか』とよく言われた。

日本と大きく異なるのは国家の歴史である。日本は島国であることが幸いして、国家誕生以来、一貫して民族の独立を維持することができた。一方フィンランドは不幸にして、民族が国家を持てたのは、ここ100年たらずのことである。13世紀、最初に同地を支配したのはスウェーデン人であり、その統治は600余年続いた。次に支配者になったロシア人は100余年を統治した。その気の遠くなるような長い年月を、フィンランド人は支配者に同化されることなく、民族の誇りと独自の文化を守りぬいた。

そんなフィンランドに魅せられた私は、同国がユーロに加盟したのを機に移住して、現地法人を設立し、フィンランド人と共に働き、共に苦闘した。そして日本レストランも経営することになって、旅行者やビジネスマンでは見ることのできなかつた、裸のフィンランドを見ることができた。この物語を通して皆様には「奇跡のフィンランド」の源を探りながら、文化、歴史、経済、そして何よりもフィンランド人の赤裸々な生き様を垣間見て欲しいと願っている。

(長井 一俊)



長井一俊氏

慶応義塾大学法学部政治学科卒。米国留学後、船による半年間世界一周の旅を経験。ガデリウス（株）ストックホルム本社に勤務。帰国後企画会社（株）JPAを設立し世界初の商業用ロボット（ミスター・ランダム）、清酒着賞、ノートPC用キャリングケース（ダイナバック）等数々のヒット商品を企画・開発。バブル経済崩壊を機にフィンランドに会社の拠点を移し、電子部品、皮革等の輸出入を行う。趣味の日本料理を生かして、世界最北の寿司店を開業。

2011年03月28日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（2）】 日本脱出

「ベルリンの壁崩壊」によって、ソ連の傘下から離れたフィンランドは、携帯電話メーカー「ノキア社」に牽引されて、国際社会の表舞台に登場した。一方、日本はバブルがはじけた後の「失われた10年」のまっただ中であつた。企業経営者達は一様に自分たちだけは生き延びたいと、下向きの螺旋トンネルの壁に必死にしがみついていた。私もまさにその中の一人であつた。

そんなある日、古い友人であるフィンランドのトウミネン教授から『我が国は通貨のマルカを放棄して、ユーロを導入する事を決めた。今や明治維新の様相だ。ビジネス・チャンスはいっぱいある。貴君の仕事を東京から、私の大学のあるポリ市に移してはどうか』との誘いの電話が来た。トウミネン教授は昭和50年代、留学生として来日し、その後日本ノキア、韓国ノキアの設立に尽力し、現在、大学で電子工学の教鞭をとる貴重な日本通の一人である。

フィンランドは通信分野、特に携帯電話に関しては、革新的ソフトと優れた組立技術を有している。しかし、人口の少ないこの国では製造に要する多くの部品や素材は外国から輸入せざるを得ない。もし私が、日本の商社に先駆けてフィンランドに事業所を持って、世界の覇者であるノキアに対し、日本の電子部品や製造設備を売り込んだら…と想像すると胸が躍った。しかし同年に創立20周年を迎えようとする会社を外国に移転する決心は中々つかなかつた。

そんな時、トウミネン教授から2002年に発行されようとするユーロ紙幣の原寸大コピーが郵送されてきた。デザインや色彩は美しかったが、何か妙な感じを覚えた。翌月、出張先の米国で、ドル紙幣を見た時、その妙な感じの原因が分かつた。ドル紙幣は金額が変わっても、紙幣の大きさは一定なのに、ユーロ紙幣は金額が大きくなると紙幣のサイズも大きくなる。最高額の5百ユーロ紙幣はかなり大きい。それまで使っている財布でははみ出してしまふ。「大きい財布を作ったらユーロ全土で売れる」と言う企画が湧き上がった。

私はかつて、東芝が日本初のノート・パソコン、ダイナ・ブックを発売した時、そのキャリング・ケースが必要になると予想して“ダイナ・バッグ”なる名前の商標登録を出願し、皮革製ケースを製造してその売り込みに成功した。以来、皮革会社や縫製会社と親しい関係を持っていた。スピードを要したこの企画は、フィンランドに転居しようとする私の背を強く押した。私は会社を出来る限り縮小して東京に残し、単身でフィンランドに移住することを決めた。

2001年3月7日、私を乗せたフィン・エアーが、サント・ペテルブルグの上空を通過して間もなく、延々と広がる森の先に、おびただしい数の湖が見えてきた。フィンランドだ。機体はヘルシンキ・バンター空港に向かって、

ゆっくり高度を下げて行った。

(長井 一俊)



新ユーロ札の規格に合わせて製作・販売した財布

2011年04月25日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（3）】 寒くて暖かい国

3月初旬のフィンランドは、まだ冬のさ中だった。この国の人を揶揄する…「フィンランド人が無口なのは、寒気を体内に入れたい為だ」という言葉が、空港を出てタクシーを待っている私には、にわかに冗談とは思えなくなってきた。周りの人とは違って帽子を被っていない私は、タクシーがすぐに来てくれないと、脳内の血液が凍ってしまうのではないかと、という恐怖に襲われた。幸い、黒のメルセデスがすぐにやってきて、若い運転手が私の大きな旅行バッグを軽々とトランクに入れてから、後部座席のドアを開けようとした。私はそれを断わり、いつものように運転手の隣の席に乗り込んだ。子供の頃、乗り物酔いがひどく、以来、乗車の際はいつも前列に座る習慣がついている。見晴らしは良いし、運転手とも親しくなれる。運転手はその地方の貴重な情報源だ。

運転手は、私の行き先をサロと聞いて、急に笑顔になった。サロ市までは直線で90キロ。最上の長距離客である。『ノキアですね』『その通りです。よく分かりますね』『日本人のビジネスマンはノキア行きて、決まっているんですよ』確かに、日本の通信業界では「ノキア詣で」という言葉が生まれるほど、ノキアとの関係構築に力を入れている。私はトウミネン教授から、「ノキアの幹部を紹介するから、ポリ市に来る途中でサロに寄って、ノキア本社を訪ねると良い」という言葉をもらっていた。日本人の仕事仲間から、「いきなりノキアの幹部と会えるなんて、すごい事ですよ」と言われていたので、長旅の疲れを押して、その日のうちにノキア社を参拝することに決めていた。

それにしても、私は疲れていた。日本出発の前、仕事の整理で一週間ほど、ほとんど寝ていなかったし、飛行機内でも全く眠れなかった。電車やバスではすぐ居眠りをするくせに、飛行機では眠れない。レールの繋ぎ目や路面の凹凸から生じる、眠気を誘う心地よいリズムが飛行機には無いからだ。私は運転手に『眠れないでまいったよ。時差になれるまで当分眠れそうもない』と愚痴をこぼした。すると運転手は携帯電話でどこかに連絡を入れた。暫くして、車は高速道路を降り、森を抜けて小さな町に入り、教会に併設されている病院の前で止まった。すぐに、白衣の医師と看護婦がやって来て、車の窓越しに小さな紙袋を手渡してくれた。そして、タクシーは元の高速道路に戻った。紙袋を開けてみると2週間分の精神安定剤が入っていた。『請求書が無いよ。支払いはどうすればいいんだ。長期移住者なので旅行保険には入っていないんだ』『只のものに請求書も保険もありません』『私は外国人で、まだ税金も納めていないんだよ』『この国に入ったからには、あなたはもうフィンランド人です』

タクシーを降りた時、私にとってフィンランドは暖かい国に変わっていた。

(長井 一俊)



カレリア地方の樹氷風景（筆者撮影）

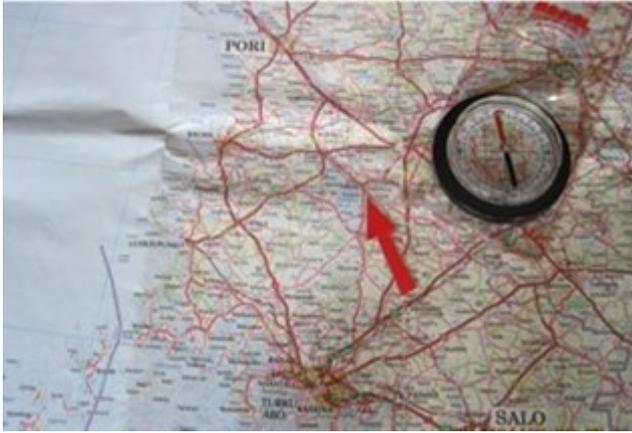
2011年05月23日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（4）】 北極おろし

降り出したばかりというのに、雪ははや、センターラインを消そうとしていた。前日、ノキア詣でを無事に済ませて、サロのホテルに一泊した。タクシーの運転手に手配してもらった精神安定剤が効いたのか、良く眠れて、爽快な朝を迎えた。青空の下、空気は澄み、時折聞こえる自動車の音を除けば、無音の世界だ。ポリまでは北北西へ180キロ。タクシーを使うには遠すぎるし、バスを乗り継ぐには、荷物が多過ぎた。そこで、レンタ・カーを選んだ。

私は狗年生まれ。鼻が利く。方向感覚には自信があった。サロの町を出て、地図に従って北に向かうと、すぐに森に入った。森は国土の86%を占め、国中が富士の裾野に広がる青木が原のようなものだ。出発して40分、アウラの町を通過した頃から風が出て、北国独特の黒雲が空を覆った。エンジン音に混ざって聞こえていた、「ピュー」という風の音が「ビュー」に変わった。霰のような粉雪は横殴りになった。この国の一般道は雪解け水が側溝に落ち易いように馬の背状で、路肩近くを走ると側溝に滑り落ちる心配がある。そこで、車はセンター側を走行する。その頼りのセンターラインが消えようとしているのだ。風の音に意味など在于るはずもないが、『フィンランドの自然を甘くみるな』と叱りつけるような「ゴーゴー」という音に変わった。これは地吹雪、どこまで激しくなるか分からない。もし、ガソリンが切れたら。エンジンが止まったら。携帯電話はポリ市で落ち着いてから買おうと決めていた。甘かった。フィンランドの3分の1は北極圏なのだ。走っている地点の北緯61度は、東京から見れば、北海道、カラフト、カムチャッカを超えて、あの植村直己が遭難したアラスカのマッキンレー山にあたるのだ。私は、フィンランドに何度も来たが、ほとんどは首都ヘルシンキで快適な夏を過ごただけだった。そういえば、ナポレオンはロシアの厳寒に追い返され、以後没落の道を辿った。そのロシアが、第二次大戦でフィンランドを攻めたがこの地吹雪に拒まれて、西進を諦めたという歴史がある。それほど冬の厳しい地に、私はご機嫌でレンタ・カーを借りて、軽装で北に向かっているのだ。自分の浅はかさを後悔しながらハンドルにしがみつき、前照灯を上向きにして、必死で前に進んだ。気持ちが滅入らないようにと、ラジオをつけてみると、フィンランドの音楽が聞こえてきた。欧米のヒップホップとは違う、どこか東欧風のメロディーが流れ、気持ちがなごんできた。この地吹雪は私への洗札なのだ。洗札とは葬る為ではなく誕生を祝うものだ、と思えてきて、地吹雪を鑑賞する余裕が生まれてきた。…阪神に住む人ならこの猛烈な風を「六甲おろし」ならぬ「北極おろし」と命名するに違いなかるう…。やがて車は、この国最長の大河「コケマキ河」にさし

かかった。さすれば、私の新天地ポリはすぐ向こう岸にある。(長井 一俊)



Salo から Pori へ

2011年06月20日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（5）】 突然の春

「苦あれば楽あり」は北欧にも通じていた。北極おろしの洗礼を受けて、やっとの思いでポリに辿り着いた私を、法外な幸運が待っていた。到着したホテル「ランタカルタノ」では、トウミネン教授の計らいで、ホテルのオーナーのキモさんが新聞記者と大男の通訳を用意して待っていてくれた。キモさんはホテルの他、建築、不動産、食品会社等を経営し、『パパ』と敬愛される、この町のドンである。ランタカルタノはコケマキ河を望み、白樺に囲まれた美しいホテルで、ポリの人たちの多くが、このホテルの素敵な庭とダイニングで結婚披露宴を挙げる。キモさんは祝辞の代わりに得意のバイオリンで新郎新婦を祝うのがしきたりになっている。パパと言う敬称は、ここから来ていた。英語が苦手なキモさんの横で、通訳をしてくれた大男の名はベリペッカ・ケトラ。北欧で最も人気のあるスポーツ、「アイス・ホッケー」のフィンランド初のプロ選手で、この国で彼を知らぬ者はいない。長野オリンピックでは、監督としてナショナルチームを率いて日本にやって来た。この日同席した新聞記者は、私を大物ビジネスマンと勘違いして、翌朝の地元紙に大きく私の記事を載せた。

私が住むことになったこのポリは、市制453年を誇る由緒ある西北地方最大の町で、港があり、飛行場があり、隣国ロシアの古都「サンクトペテルスブルグ」からくる横断列車の終着地でもある。市内の人口は8万程だが、周囲の町村を併せた商圏人口は30万を超すとされている。この国最大のビール会社「カルフー(熊)」があり、競馬場があり、郊外には北欧第一の砂浜「ウーテリ海岸」もあって、ポリは一流の観光地である。それ故か、他の町に比べて酒場の数が異常に多く、活気と華やぎに満ち、左利きの私にはぴったりの地だ。

新聞のお蔭で、地元企業から毎晩のように接待を受け、キモさんの紹介で副市長や役所の幹部達とも親しくなった。隣接市にある世界第三位の精銅会社からも重役が挨拶にやってきた。日本にいたら決して起こるはずのないことが次々と起こって、ポリに到着してからの2か月があっというまに過ぎた。この間にキモさんの斡旋で、オフィス兼、自宅が見つかった。建坪330平米の平屋で、敷地は1450平米もある大きな屋敷だ。ちなみに家賃は1月20万円。東京ならいったい幾ら払えばよかろう。そして、我家には先住民が暮らしていた。白樺の根元に大白兎1匹、モミの木の下に6羽の子連れの子雉夫婦、リンゴの木の上には大きな尻尾のリスが3匹。

5月7日、それまで吹いていた北風が突然南風になり、コケマキ河に張っていた氷も、街路ぎわに山と積まれていた雪塊も一度に溶け出して、町中は水浸しになった。ところが、人々の顔は笑いに満ち溢れていた。待ちに待った北

欧の春がやってきたのだ。

(長井 一俊)



雪解けのコケマキ河ーポリ市庁舎を望む (筆者撮影)

2011年07月19日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（6）】 美人秘書

北欧の萌える春は、タンポポとの戦いで始まる。早く摘まねば、芝生や他の草花はタンポポに覆われて、隣人から「だらしない」とそしられ、不動産価値も下落する。この鬼タンポポを摘みながら、ふと庭先を見ると、その日まで広告しか入っていなかった我家のポストから、封筒が溢れ出ている。差出人も、投函地も様々だ。何事かと、急いで開封してみると、どの封筒にも履歴書が入っていた。手紙の内容から、数日前、私が会社設立の登記手続きをしたことが「近くポリ市に国内史上8番目の日本法人が出現」と言う記事になって、全国紙に掲載されていた事を知った。

企画していた「ユーロ紙幣用財布」の製作が順調に進み、会社を設立する事になったのだ。しかし、すぐに社員を雇用すること等、毛頭考えてはいなかった。私はその日の午前中に「会社設立許可が下りてから、ご連絡いたします」と差出人全員にメールを入れた。

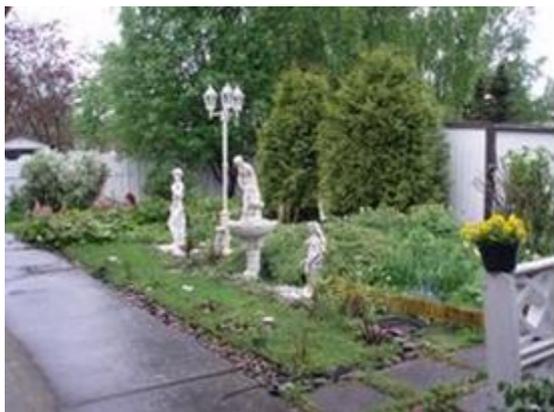
午後、オフィスのチャイムが鳴った。ドアを開けてみると、「私こそがビジネス・ウーマンです」と言いたげな、ピシッとした黒スーツの女性が、大きな封筒を抱いて立っていた。面接を受けに来たと言う。私は、『まだ会社は出来ていません』と断ると、『履歴書だけでも見て下さい』と吸い込まれそうな大きな瞳を一杯に開いて、私に迫ってきた。美人だ。私はオフィスに通してしまった。

履歴書を見ると、前年までノキア社のポリ支店・市店長秘書をしていたという、堂々たるキャリアの持ち主である。ノキアの組織替えでポリ支店がサロ本社に統合され、支店長も本社に栄転されたが、3人の幼子を持つ彼女はポリにとどまった、と言う。美しい英語と簡潔な説明で、彼女が有能な秘書であることはすぐに分かった。しかし、3人の子持ちでは仕事に打ち込める訳が無い、と私は踏んだ。

『いつ始まるか分からない職場を、待っている訳には行かないでしょう？』『現役時代の手取りと変わらない失業保険をもらっていますので、待つことは出来ます』『出勤したら、3人の子供はどうなりますか？ほったらかす訳にもいかないでしょう？』『近所の人達がボランティアで喜んで面倒を看てくれますから、問題はありません』『幼子は良く病気をしますから、医療費もかかるでしょう。それに教育費だって？』『医療費はタダ。教育費も大学院を出るまでタダです』

私はロンドン経由で入手している日本の新聞に「生活保護手当をもらっているのに、夏が来てもエアコンは入れられません」と書かれた記事を思い出して

恥ずかしさで、自分の頭が段々下がって行くのを感じた。 (長井 一俊)



ポリのオフィス兼自宅の庭 (筆者撮影)

2011年08月15日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（7）】 ジプシーのキャデラック

春の日の昼下がり、私のオフィスはいつになく緊張感が漂っていた。

「会社ができる前に、雇用を約束する」などは、車を買う前にガソリンを注文する様なものだ。そんな愚を犯すべきではない。秘書として入社を希望する3人の子持ちの美女に、私は懸命に逆転を試みていた。

『医療費や教育費はともかく、子供は大変な金食い虫ですよ。三人もいたら暮らし向きも、楽では無いでしょう？うちはノキア社のような高給は到底払えませんからね』と、率直な気持ちをぶつけてみた。すると彼女は、『貴方は街でジプシーがキャデラックを乗り回しているのを見た事はありませんか？』と意外な問い掛けをしてきた。

そういえば確かに、落ち着いたポリの町には不似合いな、コバルト色のキャデラックのリムジンから、ジプシーの子供達がゾロゾロと降りてくるのを見たことがある。

『そのジプシーがどうかしたのですか、貴女に？』『あの車に乗っている子供達の父親は、職業に就いてはいないそうです。子供手当で豪華な生活をしているのです。手当の額が子供の数に従って、累進的に上がるからです』『そんな事がよく許されますね。国は早晩、破産しますよ。貴女の国の政治家達は何をやっているんですか？』私は敢えて「貴女の国」と言ってみた。

『ある議員が、“子供手当が移民達に悪用されている”と国会で発言しました』『それは当然な発言でしょう。そして、どうなりましたか？』『貴殿の様な金持に、弱者のささやかな幸せを妬む資格は無い、と多くの議員から逆に非難され、それがニュースになって、次の選挙では落選しました』

私は言葉を失いかけたが、それでも必死に食い下がった。『それは大変な美談ですね。しかし金持ちの議員さん達は別として、貴女達一般市民はキャデラックに乗るジプシーをどう思っているのですか？』私は、偽善的な答えは許さないぞ、とばかり彼女を睨みつけた。『あのキャデラックは、高福祉がきちんと維持されている事を証明する、良い広告塔だと思います。お蔭で、私達は欲しい数の子供達を安心して産めるのです』・・・この国は少子化しない・・・さすれば、将来の年金源も確保されているという事か・・・

『合格、貴女は合格です』と言う言葉しか、私からは湧いてこなかった。私は、落とす自信の無いままに、絶対落とさねばならぬ、約束手形を振出してしまった。彼女は勝者の笑みを残して、足早にオフィスを出て行った。

数秒後、重厚なエンジンの初動音が聞こえて、オフィスの窓越しに、ダイムラーの大きな黒のワンボックス・カーが、颯爽と走り去る光景が見えた。

(長井 一俊)



手が行き届かなかったオフィスの裏庭が
タンポポに制圧された光景（筆者撮影）

2011年09月12日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（8）】 言葉の砦

北欧は白夜の季節を迎え、我が町ポリの住人は、道に張り出したパブの椅子に座って、地ビールのカルパーを煽りながら、寒く長い冬の沈黙を取り戻すかのように、早口の会話を深夜まで楽しんでいる。私は、南の島パラオに移住した友人から「700程の現地語を憶えれば、あとは身振り手振りで意思は通じる」と書かれた手紙をもらったことがある。そこで私はフィンランドに転居する前に、英・芬（フィン）辞典からよく使われそうな700の日常語を選んで暗記した。ところが、フィンランドに到着して5か月が経ったというのに、私の耳にはそれらの言葉がいっこうに聞こえてこない。「どうしたことか？」とノキア社に10年間勤務し、フィンランド女性を嫁にしたアメリカ人技師にその理由を問うてみた。すると、『辞書に出ているのは原形で、原形はあまり使われようがない。俺はフィンランド語をとくにギブアップした。女房や子供とも英語でしか話せないんだ。うちの会社には外人技師が沢山いるけれど、誰一人フィンランド語は話せないよ』との答えが戻ってきた。後日、私はレストランのオーナー・シェフになり、数人の中国人留学生をアルバイトとして雇うことになるが、彼らの一人が私に『ポリ工専には50人の中国人が勉強していますが、一人を除いて、全員フィンランド語をギブアップしました』と話してくれた。どうやら、フィンランド語は語尾変化が複雑で、それが『ギブアップ』の理由らしい事が判ってきた。私は、「フィンランド語では、動詞の語尾は何通りに変化するのですか？」と現地人に聞きまくったが、誰一人として明快な答えを出してくれなかった。

意を決して私は、ポリ大学の比較言語学の教授を訪ねて、同じ質問を試してみた。先生から『フィンランド語では動詞だけではなく、形容詞、副詞、名詞、それに固有名詞も語尾が変化します。14回語尾が変化する語彙もあります』との答えを頂戴した。と言うことは、文章の基本であるSVOC（主語、動詞目的語、補語）はヒョットとすると14の4乗の組み合わせすらあるということか。それでは、「全ての文章を丸暗記しなさい」という事に他ならないではないか。そんな馬鹿な！まるで、「ポリ」の語源が熊から身を守る「砦」を意味するように、「フィンランド語」は外国人を排斥する為の「言葉の砦」ではないか？

隣の丸テーブルに、可愛いオヘソを出した若い娘達がやってきて、いっこうに沈まない太陽の淡い光を浴びながら、金色に輝く地ビールを一気に飲み干してから、ヒバリのようにフィンランド語を話し始めた。

いつの日か私も、彼らと現地語で会話を楽しもう、と猛然とファイトが湧い

てきた。

(長井 一俊)



白夜の下、夏の草花 (撮影：A.トウミネン氏)

2011年10月11日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（9）】 言語ショック

夏の終わりの寂しさは、北欧ではひとしおである。一月前、ポリの娘たちはタンクトップにミニ・パンツ、笑顔で旅立っていったのに、8月中旬、涼し過ぎる秋風から身を守るように、長袖シャツで腕を隠し、それぞれの夏の思い出を胸にしまい、うつむきかげんでポリの街に戻ってくる。

この上なく快適な夏のポリから離れる理由もない私は、卒業以来、経験をしたことのない長い夏休みを、庭に住む先住民達に餌付けをしながら、心行くまで満喫した。

この町唯一のソコス百貨店の本屋に行って、英国人の書いたCD付「フィンランド語」を買いこんで、リンゴの大木に懸架したハンモックに揺られながらフィンランド語に挑んでみた。その本は「フィンランド語は決して難しい言葉ではありません。変わっているだけなのです」から始まっていた。やさしければ書かれるはずもないフレーズが、困難な先行きを暗示していた。

かなりの猛勉強にもかかわらず、いわし雲がたなびく晩夏になっても、フィンランド語を組み立てる脳細胞は、発芽の兆しさえも見せなかった。フィンランド語はスペル通りのローマ字読みで、私の発音はかなり良いらしい。それが災いしてか、相手は容赦ない早口で返答する。スーパーでレジ待ちのお年寄りに話しかけても、スケート・ボードで遊ぶ少年に声を掛けても、戻って来る言葉は宇宙人のそれではない。

八月の末日に、近所の大工さんが私の事務所の内装工事を始めることになっていた。ところが、約束の正午になっても現れない。真面目なフィンランド人は決して時間を遅えることはない。どうしたことかと思っていると、私の携帯に彼から電話が入った。よほど急いでいるらしく、『ヘサスタ』と一言切って切ってしまった。ヘサスタとは、どういう意味なのであろうか。辞書であれこれあたって、全く分からない。私は現地の友人に電話で、状況を説明してから、その言葉の意味を問うた。彼は『言葉の説明は後日するが、・・・大工さんは2時間程でそちらに着きますよ』と言ってくれた。その言葉通り、大工さんはすまなそうな顔で午後2時丁度にやって来た。

翌週、その友人がやってきて、ヘサスタの意味を教えてくれた。『最初のへはヘルシンキという意味です。次のサはここに居ますという位置情報、スタはfromの意味を含む接尾語で、方向性を表します。行間（文字間？）から察すると“今、私は外国からの帰途でヘルシンキから電話をしています。次の便でポリに戻りますからお待ち下さい”と大工さんは貴男に伝えようとしたのです』

私は、ショックで当分「フィンランド語」の本を開く気になれなかった。

(長井 一俊)



フィンランド晩夏のいわし雲 (筆者撮影)

2011年11月07日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（10）】 曜日で回る社会

秋の日はつるべ落とし。北欧にこそピッタリな句だ。日照時間は急激に短縮し、秋雨が暗さを助長する。フィンランドが日本に次いで自殺者が多いという統計があるが、さもありませんと思える時期だ。幸い私の事務所は、3人の子持ちの美人秘書殿の入社以来、来客数が激増し、笑い声が絶えることが無い。

私が最初に彼女に与えた仕事は、「近い将来、顧客に成り得る」と思われる企業の、購買責任者への電話によるアポ取りであった。アポ取りはゼロからイチを産む、企業にとって重要な仕事である。見知らぬ客に、見知らぬ商品を売るためのアポ取りを、軽々とやってのける秘書などには居ない。どうした事か、私が作った見込み客リストに、アポの日付がどんどんと埋まり、しかも先方から我社にやって来る。その訳はしばらくして分かった。彼女はノキア社という、大企業の秘書をしていた経験から、電話の相手を最初から呑んでかかっていたのだ。相手はいつの間にか彼女のペースにはまり、彼女が指定する場所に、時間通りにやってくるのである。お蔭で、私が最初に企画したユーロ紙幣用の財布シリーズ、発明されたばかりの青色発光ダイオード、最新の電子顕微鏡等の販売ルートが次々に開かれていった。深まる秋に反比例して、私の心は希望で明るさを増していった。

完璧に仕事をこなしてきた秘書殿が、思いがけずミスを犯した。私がフィンランド第二の都市、トゥルク市の港から船で隣国のスウェーデンに向おうとした10月20日金曜日の事である。週の初めに秘書殿に、予約してもらったはずの船室が取れていない。窓口で詳しく調べてもらったところ、翌週の10月27日（金）に予約されていた。そういえば思い当るふしがある。私は10月20日と言ったのに、秘書殿はカレンダーを見ながら『次の金曜日』と言って電話予約を入れたのだ。それを受けた船会社は、月日を確認せず、次の週の金曜日に船室を用意したのである。幸い、キャンセル客が出て、大事には至らなかった。

翌週の金曜日、週末を迎えウキウキしながら帰宅しようとする秘書殿をつかまえ、『日本では曜日ではなく、月日で予約する。そうすればそんなミスは生まれない』と諭した。初めて犯した失敗を知って、顔を曇らせた秘書殿は『これからは月日を使います』と素直に謝った。私は『貴女だけではない。フィンランド人皆がそうだ。習慣の問題だから、日頃の注意が肝要です』と優しく言ってあげた。それを聞いて彼女は笑顔を取り戻し、事務室の扉を閉じながら、『それでは次の月曜日』と言って去っていった。（・・・ダメダコリヤ）

（長井 一俊）



フィンランド-スウェーデンを結ぶ豪華客船（筆者撮影）

2011年12月05日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（11）】 古いトゲが抜けた

「これで終わりにしよう」と何度思ったことか。知人から聞いて、禁じられている事と知っていながら、止めることが出来ない。近所の人に通報されて警察が来たら「外人だから、文字が読めません」「私有地の中のことですから」

「既に私の家族です」等と様々な言い訳を考えていた。

フィンランドでは、野生動物に餌を上げることが、「自立を妨げ、生態系を壊す」として、ほとんどの自治体で禁止している。しかし毎朝、庭に住むリスがキッチンの扉を大きなシッポでドンドンと叩き、雉が扉をツンツンと突いたりして、私にパンの耳を催促する。リスのつぶらな瞳や正直そうな雉の真ん丸な目と視線が合ってしまうと、無視など出来るものではない。

北欧では会社の帰りに男同志で一杯やることはご法度だ。「飲んだり遊んだりはおっぱらホーム・パーティーで」と決められている。私の仕事が始まってからは、我家でも頻繁にホーム・パーティーが開かれるようになった。私は寿司を握り、天ぷらを揚げ、豚カツを振る舞う。中でも私の作る一口カツは評判が良い。市販のパン粉は粒子が小さすぎて、ふっくらと仕上がらない。そこでパン粉は自分で作る。その為、沢山のパンの耳が常時残っている。ただ捨てるのはもったいない。毎日それを、庭に住む家族にあげていたのだ。

そんな十月中旬のある朝、雉にツンツンと催促されてキッチンのドアを開くと、鉛色の空からは、真っ白い羽毛のような初雪がフワリフワリと舞い降り、ドア先には父雉を先頭に6羽の雉が列を成していた。4羽の子供達も、親より頭一つ背が低く成長していた。パンの耳を食べ終わった後、父雉だけがドア先から立ち去らず、私の方をじっと見上げた。数秒後、父雉は突然身を沈め、尾羽を軸に時計回りに回転し始めた。回転の推進力は胴の下に生える短い羽の羽ばたきから生み出されているように見えた。すごい勢いで回転を続け、積り始めた初雪と一緒に小さな木の葉を空中に巻き上げた。フィギュアスケートの選手がプログラムの最後に披露する高速スピンのように似ていた。何秒回転が続いたであろうか、仰天した私にはとても長く感じられた。雉は回転を止めると私に背を向けて、すっと立ち上がった。そして次の瞬間、雉は尾羽を中心に身体全部の羽を一杯に広げた。孔雀には及ばぬものの、美しく大きな真円を描いた。羽を閉じると、家族が待つモミの木の方にゆっくり去って行った。以後、雉の家族は私の前に2度と姿を見せなかった。多分、私に恩返しを見せた後、暖かい南の地に移動したのだろう。

私が子供の時に桃太郎の本を読むたびに持った、小さな棘のような違和感、「犬や猿と一緒に鬼が島に、あまり身近には居ない雉が、仲間選ばれたのは

何故か？」から、解放された思いがした。



雉の羽ばたき（筆者撮影）

2012年01月30日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（12）】 異邦人のクリスマス

フィンランドはサンタの生地、クリスマスの本場である。若者は恋人と、家族はみずいらずで、クリスマス・イブを過ごす。単身赴任の異邦人が、これほど孤独を感じる時は他にない。例年なら年末を日本で過ごす私だが、翌春はいよいよユーロ貨幣の流通が始まり、私がデザインした財布シリーズの発売日が迫っていたので、日本に帰国する余裕は無かった。

イヴの前日にかかって来た一本の電話が、私をその孤独から救ってくれた。外人クラブからのクリスマス・パーティーへの誘いであった。ポリの町にはスウェーデン・クラブとロシアン・クラブの2つの外人クラブがある。よく行くパブで顔馴染みになったロシアのご婦人が「料理か飲み物を一品持って参加しませんか?」と言ってきたのだ。開催場所はメンバーの中で一番の資産家の館だと言う。断わる理由は無。持参する料理だが、寒い冬に冷めた料理は出したいくない。思案の挙句、その邸宅を訪ねてみた。通された大きなリビングの一隅には、カウンターを隔てて客の様子を覗いながら料理が出来る、格好のキッチンがあった。頻りにパーティーが行われるだけあって、大きな調理器具や沢山の食器が揃っていた。ここなら揚げたての天ぷらを振る舞うことが出来る。

イヴの日は朝市に行き、漁民から水揚げしたばかりの甘海老と帆立貝を、農民からは採りたての野菜を仕入れた。午後はデパートに行って、和紙に似た薄紙を買った。平素は閑散としているが、この日ばかりはギフトやケーキを買う客で混雑し、全てのレジに長蛇の列が出来ていた。私は一番短い列に並んだが一向に前に進まない。レジを見ると、老婦人がキャッシャーの娘に楽しげに話しかけている。娘は嫌な顔を見せず、その話の相手をしているのだ。驚いた事に後ろの客たちは何の声も上げず、静かに自分の番を待っている。この国の人達の大人しさ、辛抱強さをまざまざと見せつけられた。(そうか、この国はスウェーデンから600年、ロシアからは120年も占領されていたのだ。一人暮らしのおばあさんが、レジで数分間の無駄話をするくらいで、怒り出すような人達ではないのだ)

私は数時間後のパーティーに想いを馳せながらレジ待ちをすることにした。(天ぷらは、沢山の具材を一度に味わってもらえる「掻き揚げ」にする。前日見た、大きめの白い皿を借り、その上に薄紙を敷く。そして先秋、庭で集めた紅葉と银杏の葉を、薄紙と皿の間に忍ばせる。さくさくの掻き揚げ天ぷらを食べた後、赤と黄色の落葉が皿から浮き上がる。客達は日本の美に賞賛の声を上げる…)『アンテクシー (御免なさい)』とレジの娘から声を掛けられた。私の番に成っていた。以後、私はレジ待ちの列を、長さではなく、おばあさんの

有無で決めることにした。



伝統の暖色照明が美しい北欧の冬の夜景（筆者撮影）

2012年02月27日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（13）】 大晦日の花火

大晦日の深夜、ポリの中心を東西に流れるコケマキ河の畔に、多くの市民が集い、恒例の花火大会が開かれた。新年を迎えるカウント・ダウンが始まる頃には、気温は零下10度を大きく下回り、炸裂する無数の暖色系の花火が、ブルーに厚く結氷した川面に映し出された。フィナーレでは、河の両岸から薄水色の光の筋が走り、河の中央でぶつかり一本の光の帯ができた。数秒後、その帯から一斉に光の飛沫が放出され、川面に落下した。日本ではナイアガラと呼ばれる仕掛け花火であるが、ポリではその美しさが倍加する。長大な光の滝が鏡のような氷面に反射し、あたかも川底から滝が吹き上がって、川面で上下の滝が衝突するかのようだ。そこからチリチリと音を上げながら噴射された白煙が、冷たい北風に乗って、観衆の鼻孔に淡い硫黄臭とぬくもりを届けた。

南河岸に建てられた市庁舎の時計台の2つの針が、天空を指して重なった時人々は『ノラ（ゼロ）』と大声を上げて、誰彼となく抱き合い、新年の到来を喜び合った。

極寒の地に、人間が生き抜いた証を、大自然に見せつけているかに見えた。

ポリのご婦人の多くはフード付のダウンコートに身を包み、男たちは耳当てのついた皮革の帽子を深々と被っていたが、その群衆の中に、ミンクやチンチラの豪華な毛皮のコートをまとった一団があった。先日、私をクリスマスに招待してくれたロシアのご婦人方である。私の作った「かき揚げ天ぷら」と「紅葉と銀杏の演出」が思惑通り上手く行って『こんなに美味しいものは初めて』『レストランを開いたら』などと誉めそやされた。花火大会の後、私はロシアンクラブの面々に誘われて、河の中州にあるレストランで夜明けまでパーティーを楽しんだ。ロシア人は日本人に似て演説好きで、多くの人が立ち上がって自説を述べた。かなりの量のウオッカを飲んで、良い気分になっていた私に、突然、スピーチをしろとの声が掛った。気が利いた話題が見つからず、酒の勢いもあって、口から出たのは、「この国では無制限の累進課税のお蔭で、社長も平社員も可処分所得の額に大差はないのに、どうして、貴女達だけは毛皮のコートが買えるのですか。きっと食費を節約してでも、衣服に金を使うのでしょう。日本なら、『ロシアの着倒れ』と呼ばれてしまいますよ」と、ロシアのご婦人方への皮肉であった。

すると、私の対面で食事をしていたこの日の幹事に、ピッタリ寄り添うように座っていた明るいブロンドの少女が私に言った。「それでは貴男は、お食事もとらずに飲んでばかりいるから、きっと日本では『飲み倒れ』と呼ばれているでしょうね。レストランもよいけれど、貴男はパブ（居酒屋）を開いた方が

良さそうよ」と言われてしまった。——この時はまだ、この少女の予言が現実になろうとは、夢想だにしていなかった。



大晦日の花火（筆者撮影）

2012年03月26日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（14）】 故事にはまる

北欧の2月の早朝は、庭も道路も雪に没し、全ての音が雪に吸収されて、白黒のサイレント映画を見ているようだ。生き物の存在を示すのは、庭を駆け回った兎の足跡だけ。

ところが、通勤時間が迫ると、地響きと共におびただしい数の除雪車が隊列を成してやってきて、自宅前の道路の雪を掬い上げて、象の鼻のようなパイプで、雪を側溝に降り落とす。除雪車が去った後には、自動車の往来に支障が出ない程のアスファルトの帯が顔を出す。

正月元旦から始まった、マルカからユーロへの移行（5.95マルカが1ユーロに）はスムーズに行われ、日常の買い物で混乱を来たすことはなかった。ただ、自動車や不動産など高額商品の売買は、売手も買手も電算機で旧マルカに換算しながら取引をすることが、その後も長く続いた。それを見て「人の脳は、少額の通貨価値の変更に対しては即座に順応できても、高額の変化に対する順応性に乏しい」事を私は発見して、私が中学生の時から書き続けている、「僕の発見・発明手帳」にその一行を加えた。

さて、私の企画したユーロ紙幣用・財布シリーズは、百貨店やブティックの店頭で順調に売られ、クレジットカード会社や航空会社からも「ギフトとして使いたい」との引き合いが舞い込んだ。最初の1カ月で手持ち在庫は半減し、2月は皮革の手当や、縫製加工の発注で忙しかった。どこからも競合製品の話は出て来ない。私の頭の中では、「次はドイツとフランスに売り込み、その次はイタリアとスペイン...」「一枚の牛革から、いくつの札入と財布が作れて、その利益はいくらになる...」と、限りなく夢が膨れ上がっていった。

好事魔多し。二巡目の納品が終わった3月初め、注文がピタリと止まった。フィンランド語の新聞が読めなかった私には、その原因がすぐには分からなかったが、デパートのバイヤーからの電話等で徐々にその訳が明らかになった。「外人旅行者とタクシーの運転手が喧嘩。原因は500ユーロ紙幣に対するつり銭」「レストランでは朝のつり銭で困っている」「キオスクもお手上げ」...。まもなくして、多くの店が「高額紙幣御断わり」の張り紙を出すようになった。たちまち、高額ユーロ紙幣はヨーロッパの町から姿を消して、私の大きな財布は無用の長物となった。

幸いにして、返品してくる店は無かったので、大きな製品在庫を抱えずに済んだ。私はありのままを、皮革メーカーと縫製業者に知らせて、生産を中止させた。その間、メインの電子部品の売上は順調で、会社の存続に問題はなかったが、私の心にポツカリと大きな穴が開いてしまった。

私は文字通り、取らぬ狸の皮算用をしていたのだ。



ポリ空港で活躍する大型除雪車（筆者撮影）

2012年04月23日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（15）】 アドニス＝福寿草！



雪間のアドニス（筆者撮影）

北欧も4月に入ると、急に春めいてくる。前夜の雪は朝方には雨に変わり、庭の雪も解け始めた。珍しく早出してきた我が秘書殿が、庭先を指さしながら、「アドニス」と思い切り明るい声で叫んだ。雪間から点々と金色を帯びた黄色い小さな花が顔を覗かせていた。

私は長靴を履いて庭に下り、かがみこんでその花を間近に見ると、小ぶりではあるが、まごうことなく福寿草である。日本では元日草とも呼ばれ、春一番に咲く草花だ。私はその時まで、福寿草の洋名がアドニスであることを不覚にも知らなかった。アドニスと言えば私にとっては、白ワインの名称であり、ギリシャ神話に出てくる美少年の名前でしかなかった。日本でも北欧でも、年の最初に咲く花は「アドニス」であるという共通点を見つけて、日本が急に近づいたような、小さな感動を覚えた。同時に、ギリシャ神話への疑問の一つが解けてきた。「美の女神アフロディテとペルセフォネが美少年アドニスを巡って、激しい争奪戦を繰り広げた。絶対神ゼウスがこの争いを調停するのだが、後にアドニスは藪で猪と遭遇し、その角により刺殺されてしまう。アドニスの胸から流れ出た血は大地に吸われ、そこからはアネモネが、アフロディテから流された悲しみの涙からはバラが咲き出でた」と詠われている。

太古の昔、日欧どちらからか、長い年月をかけて風か鳥がアドニスの種子を運んだに違いない。雪下で育つから天敵が少ない。この条件は、北欧も日本も変わらない。待ちに待った春の到来を告げるアドニスは、当然、女性たちに愛され、時にはその花を巡って争奪戦も起こっただろう。ゼウスの神はアネモネやバラの花を創造して、女性達の花を巡っての争いに終止符を打ったのだ。

驚いたことに、植物図鑑を見ると、アドニスもアネモネも同じキンポウゲ（金鳳花）科に属している。ギリシャ神話も捨てたものではない。福寿草の黄色が金色を帯びていることも納得がいく。それまでは、ダサイ名前だと思っていた福寿草が、なにやら福を呼ぶ良い名前に思えて来た。ユーロ向け財布のビジネスが頓挫して、落ち込んでいた私に、アドニス＝福寿草が何か福をもたらしてくれるような予感がした。

この日届いた郵便物の中に、美しい一通の封筒が入っていた。差出人はフィンランド西海岸地区建築協会となっている。翌月ポリで開催される「建築展」への招待状だった。その招待状に加えて1葉の便

箋が添えられていた。「貴殿の作るテン普拉やトンカツは大変美味しいと多くのロシア女性から聞いています。この会場には各地から腕自慢のシェフたちがやってきて、模擬店を開きます。貴殿も日本食を販売する模擬店を出してはいかがでしょうか？」と言う、ランタカルタノのオーナー、キモさんからの手紙であった。キモさんはホテルのオーナーであると同時に、ポリ最大手の建築会社を経営しているので、今回のイベントの実行委員をやっていた。恩人のキモさんから誘われたのでは、断わるわけには行かない。おだてに乗って、木に登ってみようか！そんな気がしてきた。

2012年05月21日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（16）】 模擬店デビュー



子供のためのミニ・ハウス（筆者撮影）

北欧の五月は、白樺が格別に美しい。長い冬の間、白雪に染まったかのような、真っ白な幹。枝先を飾る、萌える黄緑色の葉。その葉の裏側は、銀色の産毛に覆われていて、久かたぶりに吹く南風に揺られ、青空をキャンバスに、黄緑と銀色のせせらぎがキラキラと描き出される。

今でこそフィンランドでは、携帯電話など通信機器が花形産業であるが、長い歴史を通して見れば、白樺や赤松等の木材が産業の中心で、そこから派生する住宅、家具、製紙等のビジネスが高度な福祉国家を支えてきた。

「建築展」で日本料理の模擬店を出すことを決めた私は、この展示会を、関連業者達の集会であろうと軽く考えていた。開催の半月前、現場会場で行われた説明会に出席して、私はその思い違いに気付いた。会場は高校の体育館程度と想像していたが、国際イベントが開催できるほどの巨大ドームだった。参加する他店舗を、「縁日の屋台」程と考えていたが、全国チェーンを展開するレストランが大型トラックで機材を搬入し、テラス付の実物大のレストランを建設することが判った。そして予想していなかった、保健所による資格審査、メニューの提出、サンプルの細菌検査等が義務付けられていた。幸い、ホテル・ランタカルタノのオーナーであるキモさんが、私の模擬店舗をホテルからの一時出店として登録し、テーブルや椅子、冷蔵庫や調理器具等、必用備品の全てを提供してくれた。メニューには生ものは避けて、天ぷらと一口トンカツに絞ったので、保健所による細菌検査も無事合格した。

一方、建築展の主役である展示物は、建設用機械器具や内外装資材、そして住宅や別荘のモデル・ハウスから、子供用ミニハウスまでと広範囲であった。その為、来場客の多くは家族連れであるという。そういえば、ポリ郊外の一戸建住宅の多くの裏庭には、可愛らしい子供用ミニ・ログハウスが建てられている。その多くは、子供が幼稚園に入る頃、両親が手作りしたものだ。このミニハウスは、後に別荘や自宅を自力で建築するための恰好な練習台となる。父親が丸太をチェーン・ソウで切り、母親はウィンチを操って丸太を吊り上げる。両親のこの雄姿を見て、子供達の心に親への尊敬心が湧き、「早く大人になって、自分たちも同じように自力で家を作ろう」と夢見る。土地も木材も安いフィンランドだからこそ出来ることなのだが、この良き親子関係の連鎖が、この国の教育の根底にある、と私はうらやまし

く感じている。

3日間の日程で開かれた建築展の初日は、「ポリにこんなに沢山の人が住んでいたのか！」と、びっくりさせられるほどの来場客があった。正午前には、どこの模擬店の前にも長い列が出来た。揚げたてを食べさせたいと思っていた私は、作り置きをしていない為、大量の客をさばく事は到底できなかった。辛抱強いフィンランド人も諦めて、他店に流れて行った。昼食時間が過ぎると、客足は止まった。他の模擬店は、レストランから喫茶店やビヤ・ホールに転身し、客をつなぎ留めていた。私は閉館時間の5時まで、敗北感に打ちひしがれつつも、「明日は負けないぞ」と、懸命に対抗策を考え続けた。

2012年06月18日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（17）】 逆転の試み



白樺林、春の訪れ（筆者撮影）

『商売は仕掛けで決まる』が私の口癖である。弱者が当たり前のことをしていたのでは、ものなど売れる道理は無い。

春の訪れを知らせる「建築展」は参加企業にとって、一年の勝負を占う大事なイベントであった。脇役のレストランでさえ、新しいメニューを披露し、顧客の反応を試す格好な機会ととらえていた。それなのに私だけは、バザーでカレー・ライスを提供する父兄の気分で参加していたのだから、勝てるはずなど無かった。残された二日間は、日本男児の沽券に掛けて、巻き返せねばならぬ。

翌朝までに残された時間は僅かだが、仕掛けとまではいかずとも、思いついた事だけはやってみよう。私は、首都ヘルシンキに一軒だけある日本食料品（兼雑貨）店に電話を入れた。幸い、店の主人が私の我儘を聞いてくれた。極めて少数の異邦人同士だから、願いが通じたのであろう。

フィンランドの面積は日本とほぼ同じだが、郵便システムはよく出来ていて、市内なら即日、遠隔地でも翌日に配達される。各町の郵便局の一つが、バス・ターミナルに隣接していて、定期長距離バスに郵便物を載せれば、バスの運転手が乗客同様、郵便荷物の面倒も看ってくれる、という寸法である。店主が閉店後にヘルシンキのバス停郵便局まで、商品を届けてくれたのだ。お蔭で翌朝には、ポリのバス停で、注文した女性用の「ユカタと帯と下駄」の2セットが入手できた。北欧の5月にユカタは早過ぎると思ったが、キモノでは、足袋、草履、帯の結び方など、問題が多すぎた。大事なものは誰が着るかである。私はバス停から、ロシアンクラブの世話人に電話を入れて、『見栄えのする娘を二人、アルバイトに雇うことは出来ないか?』と頼み込んだ。

「バイト代は相場の倍」「和服が着られる」という条件が良かったのか、開場時間の午前10時までに、甲乙付け難い二人の美少女が私の小間に駆けつけてくれた。

この日も昼食前、模擬店の前に長い列ができた。二人の娘たちは初めてのユカタと下駄に、ぎこちない足取りながらも笑顔で、私が徹夜で作った「整理券」を一人一人に手渡してくれた。整理券の表には毛筆で「御礼」と手書されている。近年欧米では漢字が先進的デザインとして人気が高いからだ。裏面には、秘書殿から教わった現地語で「5時までにご来店くだされば、20%値引きします」とワープロで

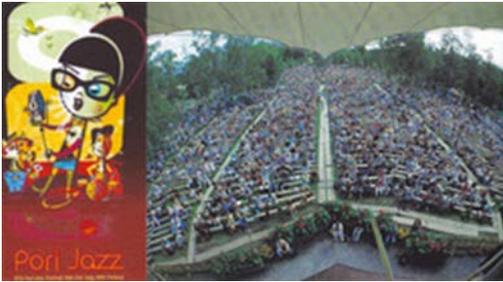
コピーされている。正札から、値切ったり値引いたりする習慣を持たない生真面目なフィンランド人に、このやりかたは禁じ手ではないかと躊躇もしたが、「外人だから許してもらおう」と思い切った。

この作戦は吉と出て、閉店まで客足の途切れることは無かった。必死で天ぷらと豚カツを揚げる私に多くの客は、『キートス（ありがとう）』『おいしかった』『お寿司も食べてみたい』と言って帰っていった。

疲れているはずなのに、私は幸せで胸が一杯だった。

2012年07月17日

【世界最北の日本レストランーフィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（18）】 「ポリジャズ」祭



「ポリジャズ」のポスターと会場風景（筆者撮影）

枕草子の巻頭に「春は曙、夏は夜。秋は夕暮、冬はつとめて（早朝）。」とある。生活の大半を占める昼は、袖にされてしまった。しかし、もし清少納言がこの地を訪ねていたら、「昼は北欧の夏が良い」旨をどこかで詠み加えたに違いない。蒸し暑い京都の夏と比べると、北欧の夏は限りなく清涼で、その上、真昼でも陽光の入射角度が小さいため、地上から陰影は消えず、風景は白けることがない。

日本には、仙台の「七夕」、弘前の「ねぶた」など、大きな夏祭りがあるが、我がポリの町にもこれらに負けない「ポリジャズ」と呼ばれる盛大な祭がある。7月の中旬、会期は10日間、来客数はポリの人口を遥かに超える。ほぼ半世紀前、この町が生んだミュージシャン、ウルキ・カンガスが創設した音楽祭だが、今ではニューヨークやニュー・オルリンズから一流のジャズ・メンが参加し、観客はヨーロッパ全土からやってくる。この年の目玉はポール・サイモン、シャカ・カーン、エルヴィス・コストロだが、ジャズ界の重鎮テッド・カーソンが、今年もニューヨークからやってきて、トランペットを聞かせてくれる。創設以来の連続出演であるから、彼の年は優に70を超えているはずだ。彼も、ポリの夏に魅せられてしまった一人である。

この祭りの時期、ポリはもちろん、近郊の町や村の宿泊施設はすべて満室になる。「ジャズは嫌い、喧噪もいや」と言う住人は、ポリジャズ事務局に委託して、自宅を旅行客に貸出し、その賃料でパリや南仏でバカンスを楽しむ。

その事務局から6月の初めに「建築展に出された貴方の日本料理を、ポリジャズでも出してくれませんか？」との、模擬店の出店依頼が届いた。私はこの手紙を見て、建築展での成功を再確認すると同時に、私も「ポリの人」に成れた、と言う喜びを感じた。しかし、3日間の建築展と、朝の10時から夜中まで、10日間ぶっ通しで開かれるポリジャズとでは、店舗運営の難しさは桁違いだ。しかも、建築展で助けてくれたホテル・ランタカルタノも、この時期は大忙しで、支援の期待などするべくもなかった。

参加の可否を答えあぐねていた6月半ば、事務局員が『ポリジャズの創設者で、いまでも実行委員長を続けているウルキ・カンガスが、日本料理を是非出して欲しい』という口上書を届けにきた。この国の歴代大統領は、ポリに時々やってくるが、歓迎の晩餐会では、大統領の左にポリ市長が、右にはウルキ・カンガスが座ると決まっている。その人から頼まれてしまったのでは、断わる訳には行かない。ど

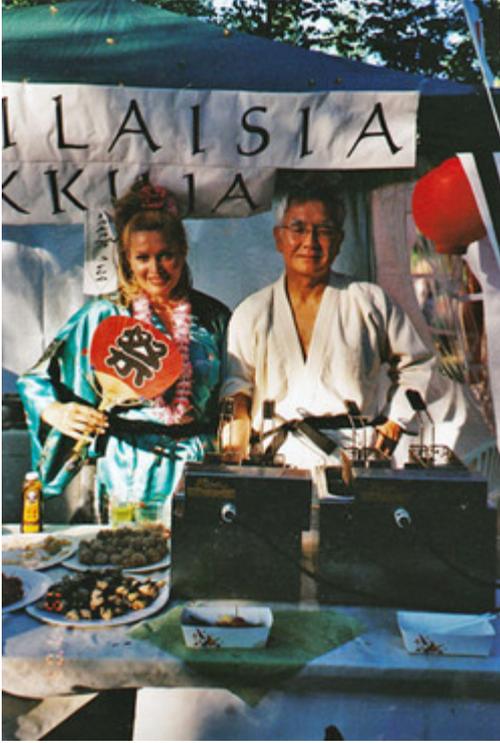
うしたら良いか分からぬままに、『それでは全力を尽くします』と答えてしまった。

統計によると、パトカー及び救急車の年間出動回数は、人口当たり、この静かなポリの町が首都ヘルシンキを抜いてダントツに高い。その原因は全てこの祭りに由来する。そんな大変な祭りに、料理人として参加することになってしまったが、厨房設備はもちろん、椅子・テーブル、配膳用具すら持っていない。

人もカモメも、眠りを忘れたかのように、白夜のポリを楽しんでいると言うのに、私だけは心配で、よく眠れない日が続いた。

2012年08月13日

【世界最北の日本レストランーフィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（19）】
「仕事＝段取り」



元ミス・ポリも和服で応援（右が筆者）

『無理・・・無理だ。不可能な事は・・・不可能だ』と独り言をつぶやきながら、ポリジャズに模擬店を出す様子を繰り返し想像してみた。「1日の平均来場者は5万人。その半数が昼か夜の食事を模擬店で摂ったら、2万5千食。模擬店の数を50とすれば、1店舗当たり1日500食！！一般の家庭に10人の客が来て、食事をするとなったら・・・私の女房ならパニックだ。・・・途方も無い数だ。しかも、それが10日間続く・・・」

私は意を決して、ポリジャズ事務局に出店辞退のメールを送った。

翌日、『ラーキオ』と名乗る恰幅の良い初老の男が私の事務所にやってきた。名刺にはポリ・レストラン協会会長とある。彼はたどたどしい英語で『出店辞退の理由はなんですか？』と聞いてきた。私は『多くの客に対処する調理設備を持っていないから』と答えた。すると彼は私に、『お見せしたいものがあるので、ついて来て下さい』と言って、私を車に乗せて、ポリの町はずれにある大きな倉庫に案内した。ラーキオは『私はポリ市内に13のレストランを営業しています。その予備設備がここに入っています。どれでも使って下さい』と言うのだ。必要と考えていた全ての設備や器具がそこに並んでいた。

そして彼は私に『日本料理の模擬店が出ると、ポリジャズはヨーロッパの祭りから、世界の祭りになるのです』と言った。

私は胸が熱くなり、辞退を撤回する約束をラーキオにした。

次なる問題は人だ。私一人ではどうにもならない。すると、トウミネン教授が、『大学生の長女をレジに、長男を雑用係に使ってくれ』と言ってくれた。ロシアンクラブのメンバーの一人が、『主人（アイス・ホッケーの現役スター選手ファンデル）の母が、ラトビアから毎年ポリジャズを見にやってきます。彼女はレストランのオーナー・シェフです。彼女を使ってみては』と申し出てくれた。そしてキモさんの二男で食品加工会社の経営者が、『二人のベテラン職員を助に出す』と言ってくれた。これで人は揃った。

次はメニューだ。油の温度管理が難しい天ぷらは残念だがはずし、一口豚カツ、串揚げ、鳥のツクネ等で勝負することにした。

肝心なのは、しっかりした段取りを立てることである。「仕事は段取り」が私の半世紀に亘る仕事人生のモットーである。仕事の8割は段取りで決まる。残りの2割は、想定外の事が起きた時の対処法にある。即ち、仕事は予想通りに進めば、仕事＝段取りとなる。開会までの10日間、私はその段取りに没頭した。

建築展で私は、白衣を着て調理したが、ポリジャズでは日本を演出する為、学生時代に着た柔道着を着て調理することにした。

後は、体力勝負だ。日本から送られてきた新聞に、松竹新喜劇の役者、藤山寛美の13回忌法要の記事が載っていた。「彼は稀代の浪費家であったが、作ってしまった多額の借金の返済の為、20年間、1日たりとも休まずに舞台に立った」と言うエピソードが記されていた。20年といえば7千数百日。それに比べれば「10日の仕事など、ものの数ではない」と勇気が湧いてきた。

2012年09月10日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（20）】 失言



雪下の餌を探すトナカイ（筆者撮影）

ポリジャズ祭の10日間は、深夜の12時に店を閉め、後かたづけをして帰宅すると夜中の2時を回っていた。翌朝は5時に起きて、生鮮市場に食材を仕入れに行かなければならなかった。「辛い」「苦しい」を通り越して、朦朧とした毎日が続いた。お役人や出演中のジャズ・メン達も模擬店に立ち寄ってくれたそうだが、どう自分が対応したかも思い出せない。

それでも、事は段取り通りに運んで、大きな失敗は無かったらしい。乗り切れた最大の功労者はフェンドルのお母様で、さすがはプロ、膨大な量の肉や野菜を素晴らしいスピードで下ごしらえをしてくれた。かつて、ソ連の圧政下のラトビアという小国で、女手一つ、苦労してレストランを開業した女性の強さを垣間見た気がした。そしてもう一つ、私を支えてくれたのは、『日本料理をありがとう。とても美味しかった』と言う、お客たちからの声援だった。祭りが終わった次の3、4日、体は死んだように眠り続けたが、耳の奥では客たちの褒め言葉が繰り返し響いて、脳内は甘い香りで満たされていた。「ポリで日本レストランを開いたら？」と思うようになったのはこの時からである。

ポリの町に静けさが戻ってきた頃、日本から大事なお客がやってきた。最大の取引先の社長ご夫妻が、パリ見物の後、ロンドンに行く予定を変更して、フィンランドを訪ねてくれたのだ。ヘルシンキ・パーンタ空港に出迎えた私は、『どちらにご案内しましょうか？』と問うと、奥様が『オーロラが見たいわ』と言った。私は、『御免なさい。オーロラは冬だけです』と答えるしかなかった。社長は『家内は常識が無いもので……。ただ、折角北極の近くに来たのだから、真夏の雪を見てみたい』と言われた。日本でも夏に、乗鞍や白馬岳で雪溪を見ることが出来る。フィンランドで真夏の残雪を期待するのは当然だ。私達はヘルシンキで一泊してから、翌朝の飛行機で北極圏にあるサンタの町、ロバニエミに向かった。空港から、レンタカーで更に北上すること2時間。一面の残雪の中、カモシカの群れを見ることが出来た。雄大な雪景色に、社長ご夫妻はすっかり満足してくれた。

帰途の車中で、社長が『貴方は死んだ後、何に生まれ変わると思われますか？』と、思いもよらぬ質問をしてきた。私はとっさに、科学雑誌で読んだ「南極海の鯨」についての記事を思い出し、『鯨が生きて

いかれるのは、南極の海に天文学的数のアミと呼ばれる小さな魚が生息しているからだそうです。人が地球で生まれ変われるとしたら、確率的には、南極海のアミになるのではないのでしょうか』と答えた。すると社長はむっとして、以後ほとんどしゃべらなくなってしまった。

10日程後、帰国された奥様から、礼状がきた。その中に「主人は敬虔な仏教徒で、朝夕仏前で経を読んでいる人です。生前に善行を積み、きっと又、心正しい人間に生まれ変わると信じていたのです」とあった。

以後、その会社からの注文はピタリと止まってしまった。

2012年10月08日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（21）】 潮目



皆がお目当てのヘルク・タッティ（筆者撮影）

過ぎゆく夏の寂しさを慰めるかのように、北欧では初秋、天気予報にキノコ情報が加わる。日本での桜情報に似ている。食用になるキノコは多種あるが、ポピュラーなのはシャンピニオン（松露）、通にはたまらないスプリー（黒トランペットダケ）、そしてお目当てはヘルク・タッティ（直訳すれば“美味しいキノコ”）だ。イタリアではポルチーニと呼ばれる高級食材で、噂では、「レストランに1本持参すれば、豪華なディナーが只で食べられる」そうだ。

フィンランドの森の多くは国有林で、誰でも自由に入る事が出来る。キノコ情報を見ながら、家族や友人たちと週末に、サンドウィッチやフライド・チキンをバスケットに、ビールやウオッカをクーラーに入れて森に入る。各家、各人がそれぞれに、秘密の穴場を持っている。

ただし、旅行者は土地の人と同行することをお薦めする。森で迷ったら大変なことになるからだ。フィンランド一国をゴルフ場に例えれば、人の住む町村は、ところどころに散在するバンカーほどでしかない。行けども行けども森が続き、町村に突き当たらないこともある。

又、「所変われば品変わる」の故事通り、日本で得たキノコの知識は役に立たない。似て非なるキノコが無数にある。私は日本の図鑑から学んで、自信を持って食べたキノコで、眩暈と唇の痙攣に襲われた事がある。酒の肴として少量食べただけだったので、大事には至らなかったが、以来私は、パブで知り合った自称「ミスター・キノコ」に同行することにしている。彼は、「雨が沢山降った週の金曜日がねらい目だ」と言う。土日に沢山の人がキノコ狩りに来るからだ。

キノコ狩りでは、根っこから引き抜かず、持参したナイフで、根元を残してカットするのが掟になっている。根っこさえ残せば、翌年もその周囲からキノコが自生すると言われている。

ある金曜日、私は社長の特権を利用して事務所を抜け出し、ミスター・キノコと森に入った。

予想は当たって、山盛りのヘルク・タッティを籠に詰めて、夕暮れに上機嫌で事務所に戻った。秘書殿が私の机に置いてくれた得意先からの注文書に、見慣れぬメモが添付されていた。そこには「今後、

貴社から納入される部品が原因で、もし弊社の製品にトラブルが発生した場合、部品代金の返還の他に、それによって発生した弊社の損害の全額を貴社に請求させていただきます」と書かれていた。

この年、日本の大手メーカーが納入した電池の不具合で、米国製の携帯パソコンが発火する事件が起きた。米国メーカーは、その日本企業に、電池の代金だけではなく、事件によって生じた被害総額に匹敵する巨額な賠償請求を突き付けた。世界中の同業者が注目する中、しばらくしてその日本企業は賠償金の支払に応じた。そのニュースを聞いて、欧州企業は「さすがはサムライ日本」と称賛した。

「サムライ日本」は聞こえは良いが、中小企業には無理な話だ。電子業界では、大手しか生きてはいけない時代になった事を意味している。専門知識と素早い対応で進めてきた私のやりかただけでは、もう通用しないのだ。業界と私の人生における潮目が、はっきりと変わったことを思い知らされた。

しかし、幸いにして、大きなショックは受けなかった。私の隣の裏には、小さくはあるが、真新しいボートが桟橋で、私を待っている映像が映っていた。そのボートの甲板には、「日本レストラン歓迎、ポリ市民一同」の旗が翻っていた。

2012年11月05日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（22）】 チェンジ

「言い出したら辞めたことのないアナタに、いまさら反対などはいたしません」と言う、すごいメールが戻って来た。日本レストランをポリで始めることの賛否を、東京で留守番をしている家内に、一応、問うてみたのだ。

次に秘書殿に伺ってみた。すると、ためらいもなく、『社長が副業で何をしようと勝手ですが、私は貿易会社の社長秘書として雇われておりますので、私にはかまわないで下さい』と、これまた冷たい返事だった。相談すべき最たる人はキモさんであったが、もし否定されてしまったら、それでおしまいだ。そこで、キモさんの三男で、建築会社を任されているアンティ君に酒の席で話してみた。少し間を置いて、『今の会社を放り出して、レストランのおやじに成ったら、ポリの皆が貴方に抱いている“先端技術を扱う企業の社長さん”という尊敬心は、失われるでしょう。それでも良ければ、おやりなさい』との返事が返ってきた。いろいろ返事を期待していたので、がっかりすると同時に、北欧には職業に貴賤はなく、ましてやヒエラルキー（階級意識）とは無縁の地と思っていた私は、久しい恋人に裏切られたように落込んでしまった。

翌日のランチタイムに、トウミネン教授がヒョッコリと事務所にやってきて、『アンティ君からレストランの話聞いたよ。面白いじゃないか。私も一口載せてくれよ。寿司は欧米で大ブームだ。きっと成功するよ。それから、私の方にもニュースがあるんだ。我がポリ大学がタンペレ（国内3番目に大きい都市）大学の傘下に組み込まれる話が出て来てね。これを機に、トルク（国内2番目に大きい都市）大学に移ろうと考えている。私の生涯の研究課題だった携帯通信機の分野では、ビデオ、テレビ、パソコンなどの多くの機能を取り込んだ「お利口携帯（スマート・フォン）」が、近い将来開発出来る目途がたった。まずは一段落だよ。そこで私は、これから劇的に成長する余地がある、バイオ・メディカルの研究に、方向転換しようと思っているんだ。私も変わる。貴方も大いに変わってくれ』と私にエールを送ってくれたのだ。

人間とは現金なものだ。しょんぼりしていた私は急に元気になって、「レストランの開き方」が書かれた英文の本を探しに、ポリ市営の中央図書館にまっしぐら。司書に検索してもらおうと、『英文のものはポリ大学の図書館にありますね』との答えが返ってきた。フィンランドの多くの自治体では、学校と一般図書館がネットでつながっているのだ。

「レストラン開業の心得」と言う英文の本が、既にポリ大学図書館の受付に用意されていた。目次を目を通すと、その本の内容は、ロンドンでレストランを開業した人の苦労話で、私にはあまり役に立ちそうもなかった。がっかりして立ちすくむ私の肩を、ポンと叩く男がいた。金属学の准教授で、フィンランド人の母とカナダ人の父をもち、フィンランド語と英語の両方を完璧に話す、稀有なバイリンガルだ。彼はいつも私に、『科学は鉛を金に変えようとする人間の努力から始まった。ところが、今どきの学生ときたら、ビジネスかエレクトロニクスのコースしか選ばない。私の授業はいつも閑古鳥が鳴いているんだよ』と愚痴をこぼす。よっぽど暇らしく、彼は年中図書館で本を読みふけている。その為か、彼は森羅万象に通じ、『生き字引』と呼ばれている。私は彼に、レストラン開業の話をしてみた。すると、

彼は鞆から取り出したパソコンをピアノのように操りながら『・・・無い・・・無い・・・無い』とくりかえした。そして彼は、私をじっと見つめながら言った。『ポリは北緯 61 度 30 分に位置している。これ以北で大きな町といたら、アイスランドのレイキャビック、アラスカのフェアバンクス、ロシアのムルマンスク。そこに日本人の経営するレストランは無い。さすれば君が開く店は、世界最北の日本レストランとなる』



ポリ大学（現タンペレ大学ポリ校）（筆者撮影）

2012年12月03日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（23）】 ハードル



突風に折れ曲がった隣家の銀杏（筆者撮影）

自然は時として残酷である。この年の北欧の秋は、後からやって来た冬に、一夜のうちに蹂躪されてしまった。前夜のミズレ混じりの突風に、銀杏の枝は折れ曲がり、色づいたばかりの黄葉は地面に叩き付けられた。私は黄色い絨毯の上を車で、郊外にある起業支援センターに向かった。

私が開こうとしているのは“世界最北の日本レストラン”だ、と知った以上は、後戻りする訳には行かない。オンリーワンとかベストワンになるのは、やさしい事ではない。4人で遊ぶ麻雀ですら、トップを取るのに苦労する。ましてや、“世界”の冠がかぶせられたチャンスは、滅多に訪れるものではない。

その事を教えてくれたポリ大学の准教授は私に『起業は市政も歓迎するところだ。市の下部組織に起業支援センターがある。私が所長に電話をしておくから、明日にでも訪ねるが良い』と言ってくれたのだ。

センターの入り口で、笑顔で迎えてくれた所長は若年の美女だった。北欧には学閥は無いにしても、美形閥がある事に間違いはない。それを知らなかった30年程前、私は大きな失敗をした。当時私は隣国のスウェーデンに住んでいて、日本から来た10名の記者団に通訳を頼まれたことがある。記者団と私は外務省に外務大臣を訪ねた。私達一行は、約束の時間より数分前に会見場に到着した。会見場の隅に設置されたコーヒー・サーバーの脇で、うら若い美人が立っていた。私は彼女に、11名分のコーヒーを注文した。温かいコーヒーは飛び切り上物であった。ところが、約束の時間になっても、外務大臣は現れなかった。替りにコーヒーを入れてくれたその美女が演壇に立ち、自己紹介を始めた。『私はこの国の外務大臣を拝命されている・・・』

私は脳震盪状態で、しばらく通訳が出来なかった。

その時の失敗を思い出しながら私は、所長の大きな机の前に座った。所長は私のカップにコーヒーを注ぎながら、『この国では、ビジネスマンから、いきなりオーナー・シェフに成る人はいません。ハードルがとても高いのです』と切り出した。

『困難であることは承知の上で、どうすれば良いかを聞きに参りました』

『貴方が所持されているビジネス・ビザではレストランの開業は出来ません。レストラン・オーナーズ・ビザに変更する必要があります』

『ビザの変更はどうすれば良いのですか。その為に、日本まで帰国するのは勘弁してほしいのですが』

『飲食店開業の可否を決めるのは各自治体の保健所です。従ってビザの書き換えは、自治体の中央警察が行います。ですから、日本に帰国する必要はありません』

『それは有難いですね。私は市の行政に顔が利くので、意外と簡単に行くのでは……』

『ビザの問題はさておき、ポリで飲食店を営むのは大変なことですよ。ポリ・ジャズ祭の影響で、この町には飲食店が沢山ありますから、夏はともかく、冬はどこも開店休業状態です』

『私には良いアイデアがあるのです。夕食時まではレストラン、その後はパブにするのです。ポリの人はみんな呑平ですから、冬でもけっこう客を呼べると思います』

『あなた、“パブ”って簡単に言いますが、お酒の取り扱いには免許が必要です』

『今日ここに来た私の主な目的は、その酒の免許をどうすれば取れるのか、を知るためです』

『……先ず、公営の料理学校に2年通い、そのうち一年はバーテンダー・コースを選んでください』

『2年も通学するのですか！』

『それだけではありません。卒業後に「酒類取扱い資格」の国家試験を受ける必要があります。合格した後、さらに、お酒を出す飲食店かホテルのバーで3年間の実習が必要です』

『ひゃー！！ それでは、お医者様になるより大変ではないですか』

『だから言ったでしょう。ハードルが高いって』

私は又、脳震盪状態に陥り、しばらく言葉が出なくなった。

2013年01月07日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（24）】 ヴァーサの勝負



美しい石畳の町 ヴァーサ（筆者撮影）

やさしい言葉で、レストランの開店を励ましてくれるものと思っていたら、『2年間の通学』『国家試験』『3年間の実習』といった厳しい条件を、起業支援センターの美人所長から突き付けられてしまった。数か月間温めていた夢が砕け散ってしまい、いささか平静を欠いてしまった私は、『東京という名の大都市で、寿司屋やサパー・クラブを経営したこともありますし、アルコールについても田舎町のソムリエに負けるとは思いません』と、捨て台詞を残して席を立ってしまった。その帰路、ふと疑問がよぎって、私はポリの中心街にある中華料理屋を訪ね、オーナーに聞いてみた。

『貴男は、どうやってこの店を開いたのですか？』

『ヘルシンキ・オリンピックが開かれた1952年に、華僑（一世だけに冠された敬称）の祖父がこの店を開き、華人である父や私は順に相続しただけですから、開店の仕方などは……』 私は、その隣に最近オープンしたケバブ（トルコ料理）店を訪ねて同じ質問をした。

『私はただの店長で、開店に関しては全てヘルシンキの本部が……』

まだ午後3時と言うのに、北欧の冬は私の憂鬱を助長するかのようになり、暗くなり始めた。「この年に成っても、私はいまだに甘いのだ」と自己嫌悪にかられ、生まれて初めて、鬱病になったかと思える程に落ち込んでしまった。

すぐ後に開かれた、ロシアン・クラブでのクリスマス・パーティでも、勧められるままにウオッカを呷ってしまい、頼まれたスピーチもパスするほどだった。

ひどい二日酔いの翌朝、地球の裏側から驚愕のニュースが伝わった。「スマトラ沖の巨大地震に伴い津波が発生して、途方も無い数の行方不明者が出た。その中には多数の北欧の観光客も含まれている」

日を追う毎に、被害規模は拡大し、死者の数も増えて行った。

北欧は極寒の地だが、地震も無ければ台風も無い。隣国のスウェーデンは永世中立国であった為、世界大戦でもほとんど死者を出さなかった。よって北欧人は、一度にこれほど多くの死者が出る惨事に遭

遇してはいなかった。

この日を境に、ポリの町の雰囲気が大きく変わった。人々は街で知人に会うと、きつく抱擁を交わし、お互いの無事を喜び合った。

人は死生観を持つと、やさしくなるようだ。

その事を象徴するかのような、一本の電話がかかってきた。起業支援センターの氷の女所長からだ。

『先日、保健所長と会い、貴方の話をしました。貴方はポリジャズにも出店され、日本ではレストランを長く経営されたと聞きました。そこで、実習期間を免除する事にしました』

『2年間の通学の方はどうなんですか』

『プロの方に、2年間の通学は求めません』

『国家試験に合格さえすれば、パブも兼業できるわけですね？』

『その通りです。国家試験はABCの三種類があります。パブではウオッカのようなアルコール度の高いお酒も提供することになりますから、最も難易度が高い「国家試験A」に合格する必要があります』

『英語で試験を受けることが出来る、と聞いていますが？』

『首都のヘルシンキと、スウェーデン人が多く住むヴァーサ市では、スウェーデン語か英語でも受験できます。内容は同じですから、難易度に差はありません。次回のテストはヴァーサ市で2月末に行われます。是非合格して、ポリの町に日本レストランをオープンして下さい』

5年間の仕置きが、一瞬にして消滅したのだ。あとは国家試験Aに合格すれば良い。電話の向こう側の美人所長を思い切り抱きしめたかった。

半世紀前に、スウェーデン人に連れられて、私が初めてフィンランドを訪ねた町は、偶然にも、ヴァーサの町だった。

「ヴァーサが私の人生を決める地だ」 私の心はすでに、ポリより遥か北に位置する、石畳の美しいヴァーサの町の上空を旋回していた。

2013年02月04日

【世界最北の日本レストランーフィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（25）】 賭け事



国営ロト（筆者撮影）

楽しみにしていた大晦日の花火大会や年始の祝賀行事も中止して、北欧の人々は喪に服したまま新年を迎えた。依然として行方不明者の数は多く、テレビで見たすさまじい津波の光景を思い出して、「真っ黒な泥海の底で魚の餌になってしまったのか、それとも、ジャングルに放置されて腐乱してしまったのだろうか」「死者の魂は果たして、遠い祖国の北欧まで戻って来られようか」と、人々は最悪のシナリオを考えずにはいられなかった。

一方私は、不埒な物言いだが、誰からもお座敷が掛からぬ分、受験勉強に没頭することが出来た。2年間の料理学校への通学や、3年間の実習も免除されて、国家試験にさえ合格すれば、レストラン・パブを開店できることになったのだから、猛勉強をしないわけにはいかない。もし、ヴァーサ市での試験に落ちれば、次のチャンスは半年先になる。この歳になると、半年間は貴重だ。合否の定かでない試験に、かけがえのないその時間を費やす訳には行かない。後にも先にもヴァーサが、一本勝負の舞台だ。

私の受験勉強は、すぐに多くの人の知る処となり、キモさんの三男のアンティ君が、「ナガイは試験に合格するか否か」の賭けを友人知人に呼びかけていた。ハズレた人達が、合格又は残念パーティの経費を負担すると言うものだった。

生真面目な北欧人は意外にも賭け事が好きだった。それには訳がある。所得に対する厳しい累進課税制度の下、北欧で大金を手にするには、公営ギャンブルで勝つ術しかない。国は、ギャンブルの売上予想総額から税金分を先取りしているから、賞金を得た人からの徴税はない。

なかならずく人気のあるのはロトくじだ。ロト券売り場は至る所にあり、キヨスクでも買える。フィンランドの成人の約7割が、常習的にロト券を購入していると言う統計さえある。人気の理由は、一口1ユーロと買いやすく、毎週新規に発売されているうえ、一等賞金が百万ユーロ（約1億2千万円）と巨額なことだ。よく考えてみると、これは上手い国家戦略だ。高額な税収により、「高福祉」「所得格差の解消」「老後の安心」を国民に担保し、アメリカン・ドリームの代わりに、毎週ロトくじで、ジャンボな夢を与えている。

私の受験勉強は、ポリ市立料理学校の校長を訪ねて、過去の試験問題集を取得することから始まった。

校長の好意で、英文の過去の問題集はすぐにヘルシンキから送られて来た。フィンランドは教育先進国だから、さぞやじっくりと考えさせられる、少数の問題が出題されるだろう、と予想していたが、「回答時間は45分です」の文章から始まる問題用紙には、○×式の70題がビッシリと印刷されていた。1題当たり39秒で解かねばならない。試しに1頁をやってみると、半日掛かってしまった。初めて接する業界用語や、当時の私には馴染みの薄い、食物アレルギーの問題が沢山出題されていたからだ。段々、分かって来るのだが、シェフになれる大事な資質の中に、多種類の料理を一度に短時間で調理する「機敏性」があり、試験問題の多さは、その適性を判定していたのだ。合格には、正解率が75%を越えねばならないと言う。

しばらくして、アンティ君から電話がかかってきた。『賭けは中止だ。誰一人として“ナガイは合格する”の方に賭けないんだよ』

私の耳奥で再び、起業支援センターの美人所長が『だから言ったでしょう。ハードルは高いって♪♪』と、したり顔で言う声が鳴り響いた。

甘かった……。私は又しても、愕然たる思いに打ちのめされた。

2013年03月04日

【世界最北の日本レストランーフィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（26）】 四当五落



代用立ち机（筆者撮影）

私の受験を競馬に例えるなら、私自身は賭けの対象にもされなかったスーパー駄馬だ。無理からぬ事だ。歳をとると、体力以上に学習能力が落ちる。2年間、専門校に通った若者を相手に、酒ばかり飲んでいる初老の私が、勝てる訳は無い。ましてや、「寒さ+高福祉=アルコール中毒」と言う、私が作った方程式がピタリと当てはまる北欧諸国では、アル中対策の一つとして、パブの数を減らそうとしている。その為、A級試験は年々難しくなって、合格率は毎年低下している。

私に残された時間は、既に50日を割っていた。私が勝つためには尋常の努力では間に合わない。昔、試験と言えば四当五落と言われた。四時間しか寝ずに勉強した者は受かり、五時間も寝てしまった者は落ちる、と言うのだ。私はこの言葉を思いだして、実行に移した。当然、睡魔との戦いになる。文明開化の頃、日本の明日を託された学生達は、睡魔に負けないようにと、天板が胸の高さほどの立ち机で勉強したと言う。私はキッチン・テーブルの上に本箱を乗せて、その代用とした。この歳になって、何でこんな辛い目に会わねばならないのか？と自分の運命を呪いながらの日々が続いた。戦いを支えたのは、「誰一人私の馬券を買わなかった皆の鼻を明かしてやりたい。特にあの生意気な美人所長の」と言う、スーパー駄馬の一念だった。

ポリの町から、ヴァーサ市での試験に挑戦するのは、私を含めて男3人、女2人だった。ラーキオ元レストラン協会会長がワゴン車で、私達5人を送迎してくれることになった。小雪の舞う2月末日、往きの車内は大騒ぎだった。私以外は皆、自信満々で、4人で楽しそうに想定問答を大声で出し合っていた。この4人からも私は完全に無視されていた。時たま運転中のラーキオが隣に座る私に、『彼等だって

受かるかどうか?』と小声で私を慰めてくれた。

試験はヴァーサ市立料理専門学校で行われ、この日の受験者は25人だった。

答案用紙が配られると、『ウオー』と言うどよめきが起こった。冒頭に「回答時間は45分です」と例年通り書かれていたが、最初の10題は筆記問題だったからだ。質問の内容を読んで、『ゲー』と、私は2度目のうめき声を挙げた。「貴方は2年間の通学で何を習いましたか?大事と思われる事を10挙げて下さい」

「そんなこと俺が知る訳ネーだろう!!」頭の中は文字通り真っ白になった。立ち上がって帰ろうとする私を、もう一人の私が懸命に抑えた。私は5分間、目を閉じて、冷静になることにのみ集中した。

目を開いて試験用紙全体を眺めると、質問総数は例年通り70題であった。合格ラインがいつも通り、正解率75%に設定されていれば、53題に正解せねばならない。残りは40分、私は筆記問題を無視して、残された60の○×問題に集中した。作戦通り、問題をざっと読み流して、精通しているキーワードの下に、ピツピツと赤線を引いた。数えてみると丁度半分の30題だった。何とかそれらは解くことが出来たが、残された時間は5分程しか無かった。手付かずの30題は、内容を全く読まずに適当に○×を書き入れた。丁半博打だから、半分は当たる確率がある。回答した30題が全て正解し、運に託した問題の半分の15題が当たっていたとしたら、正解は45題となるが、目標の53題には遠くおよばない。どうしても筆記問題で点を稼がねばならなかった。この時私の脳内で、不思議な事が起こった。数年前に、仕事でよく行った大手電機メーカーの社員食堂の光景が思い浮かんだのだ。料理に興味を持っていた私は、調理場を覗いた事が何度かあった。壁の上部には「清潔」「マナー」「安全」「均一」・・・と、調理師達が半紙に書いた沢山の標語が貼られていた。「よし、これで行こう」と私はそれらに値する英単語を書き連ねた。最後に思い出した「機敏」と言う文字を書き入れた時、試験終了のベルが鳴った。受験生は口々に、『筆記問題に時間を取られて、○×問題を沢山やり残してしまった』と嘆いていた。真面目な北欧人は、試験問題を頭から順番に解いて行く習性があるのだ。

試験結果は2時間後に発表された。合格者は私を含む2人だけだった。ちなみに、私の答案用紙には、「53 / 70 正解率76% 合格」と書かれてあった。あと1問でも外していたら不合格だった。

ラーキオは『快挙だ!』と叫んで、私を思い切り高く抱き上げてくれた。

ポリへの帰路、車中は葬式のように静まりかえっていた。悲しみをこらえるのは難しい事だが、喜びを押し殺すのはもっと難しい事だ、とこの時初めて知った。

2013年04月01日

【世界最北の日本レストランーフィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（27）】 極楽トンボ



合格祝い（筆者撮影）

試験場のヴァーサからの帰路、雪は本降りになった。嬉しさを押し殺している私の心を察してくれたのか、雪道になれたラーキオはスピードを落とすことなく、飛ばしてくれた。車が履いていた、雪面をしっかりと掴むスノータイヤは、今では携帯電話メーカーとなったノキア社製で、世界一の雪上タイヤとして国際市場を席卷していた。車は4人の落第生を各自宅前で落としてから、我が事務所兼自宅に向かった。家の前の道に、見たことも無いほどの長い車の列が出来ていた。

ラーキオが私の「一発合格」をアンティー君に携帯電話で知らせた結果、賭けに外れた友人知人が、豪雪にも拘わらず、一人一品の料理や飲み物を持って、私の帰りを待っていてくれたのだ。

食堂での祝の宴が始まると、私がヘルシンキから過去問集を取り寄せたことや、4時間しか寝ないで勉強したこと等、つゆほども知らない参会者は、口をそろえて「世紀の大穴」「ヴァーサの奇跡」「貴男は天才」と称賛してくれた。それらの賛辞をくすぐったい気持ちで聞き流していたが、可愛い女兒を連れた母親が『日本人は噂の通り優秀だったのね。私の娘は日本人に嫁がせたい』とか、スピーチをしたことなど無かった、最年長のロシアのご婦人が起立して『ロシアが誇ったバルチック艦隊が東郷元帥に負けたのがやっと納得できました』などと言う褒め言葉をもらうにつれて、「生まれて初めてお国の為になれた！」と、私も段々乗せられてしまった。

宴半ば、ポリのドン、私の恩人のキモさん（写真中央）が、ポリ市立交響楽団の第一バイオリニスト、ルーマニア出身の「ティテル」（写真右）と地元プロの人気アコーディオン奏者「ベッセ」（写真後方）を引き連れてやってきた。キモさんは、経営するホテル・ランタカルタノでの結婚式で、バイオリンを弾いて新郎新婦をお祝いする事を常としているので、腕前はプロ並みである。三人の演奏でパーティーは大いに盛り上がった。

そろそろお開きにしようと考えていた時、食堂のドアが開き、シルバー・ピンクのロングダウンを纏った若い女性が、肩に積もった雪を払いながら入って来た。昨日までの我が仇、起業支援センターの美人所長だった。恨む気持ちは薄れていたが、やはり彼女は私には鬼門、私の頬は一瞬こわばった。遅れ

てやってきた言い訳をしながら、美しく尖った鼻を上に向けて、彼女はスピーチを始めた。『ユーロ経済圏が結成されて、各国は互いに人々の持つ資格を認めあうようになりました。ミスター・ナガイが本日取ったA級資格は、フランスでもイタリアでも通用して、シェフやソムリエ、そして店のオーナーにもなる事ができるのです……』

勝利の美酒も効いてきて、この後、開店までに津波の如くやってくる艱難辛苦を、夢想だにしていなかった私は、「ポリの店が一段落したら、パリにもう一つパブを開くのも悪くはないな」と、脳内のスクリーンでは、モンマルトルの丘の上を、私と言う名の極楽トンボが、店舗立地を探しながら、ゆっくりと旋回する光景が映し出されていた。

2013年04月30日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（28）】 夢と現実の狭間



庭先の雪解け（筆者撮影）

事は始める前が楽しい。真っ白なキャンパスの上に、近未来を、自由に描くことが出来るからだ。折しも、庭先の雪があちらこちらで解け始め、集まって出来た可愛い小川が私の庭を飾った。待ちに待った北欧の春がやって来たのだ。

北欧には白樺や楓などの落葉樹が多く、針葉樹にしても松やモミの木がほとんどで、杉は少ない。よって人々は花粉症に悩まされることは無い。私は北欧を、夏は「避暑地」、春は「避花粉地」と呼んでいる。

私の住むポリは地方都市だ、とあらためて感じさせられる事が起きた。場所すら決まっていないうのに、日本レストラン開店の噂はポリの街を駆け廻って、嬉しい話が次々と舞い込んだ。ポリで3番目に大きい外人クラブである「フランス会」が、『定例会場として使いたい』。市立料理学校からは『学生の研修店になってはくれませんか？手当は要りません。交通費は学校側が払います。店が繁盛するように、見栄えのする女子学生2名を半年交代で送り込みましょう』。そして、私がよく行く中華料理屋で働く、“ココ”と呼ばれる看板娘が事務所にやってきて、『お店が開いたら働かせて下さいませ』と言ってきた。竹久夢二の絵から抜け出て来たような美少女で、私がそれまで持っていた「ヤカマシイ中国人」のイメージを根底から払拭してくれた娘だ。一緒にやってきた小柄な中国娘“チャイ”は、『皿洗いが得意なので、キッチンで働かせて下さい。私が居れば、食器洗浄機は不要です』と豪語する。いかにも働きそうで、私は直に脳内で“独楽鼠のチャイ”と呼んだ。これでたちまち、4人の若いスタッフが揃ってしまった。

さて、その肝心の店だが、キモさんから建築業と一緒に不動産業も任されているアンティー君が、売りに出ている十指に余るレストランを案内してくれた。規制が年々厳しくなって、新規にレストラン（特にパブ）の開店許可を取得するのは、「至難の業」とされていたからだ。

北欧人は物を売るとき、掛け値はしない。値引きをしないので、値切る人もいない。価格交渉が苦手な私には、ピッタリな土地柄だ。案内された店は、どれも納得の行く売価が付けられていたが、気に入った店は一軒として無かった。大き過ぎるとか、小さ過ぎるとかを云々する前に、私のイメージとはか

け離れていたのだ。店の中央に豪華なシャンデリアが吊るされていたり、重厚な壁画が店を囲んでいた
り、捨てるには惜しいロココ調の猫足のテーブルと椅子で統一されていたり、アンティークの食器を満
載する大きな食器棚が並べられていたりで、どう手を尽くそうが、私が改装をイメージする、「京風・モ
ダン和調の軽やかな店」にはほど遠かった。

何軒も何軒も回った後、最後に案内された店は、かなりシンプルな内装の店で、売価も驚くほど低か
った。「この店なら、何とかなるかな」とアンティー君に話しかけた時、店の主人を名乗る、オズの魔法
使いの様なおばあさんが出て来た。売りに出す理由を尋ねると、『従業員が膝を悪くして、重いものが持
てなくなりました。新人を入れる余力もないので、売りに出すことにしました。ただし、条件がありま
す。給料は安くてもよいから、私とその従業員を使って下さい』と言うのだ。その話の最中、奥から赤
毛で堅肥りしたヒグマの様な中年女性が足を引きずりながら出てきた。体格のわりに足が細い。これ
では、膝を悪くするのも当然だ。若い4人の従業員の手筈がついているのに、一緒にオズのおばあさんと
ヒグマのおばさんを使い熟す器量は私にはない。すがりつくようなおばあさんの目を、振りほどくよう
にして、店を後にした。

現実には厳しい！真っ白だった私のキャンバスは、日に日に灰色に染まっていった。

2013年05月27日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（29）】 険しい山



帰宅したリス（筆者撮影）

我家の庭から雪が消えて、本格的な春を迎えようとする5月初旬の朝、ドンドンと言う戸を叩く音がキッチンから聞こえて来た。まさか！と思ってドアを開けてみると、昨秋から姿を消していたリスの家族が縦一列を成し、後ろ足で立っていた。先頭の父リスが大きな尻尾でドアを叩いたのだ。羽を持たないリスが南の国に避寒していた訳はないのだから、木の実の豊かな森の奥で冬を過ごしていたに違いない。小さかった2匹の子リスは成長して、4匹がほとんど同じ大きさになっていた。

彼等は、北海道に住む蝦夷リスと同種と言われ、日本リスより体が一回り大きく、平均寿命はほぼ6年と言われている。我家から姿を消していた半年間を、人間時間に換算すると、7年程になる。その長い期間、道標などあるはずもない森の中で、我家へ帰る道を正確に記憶し、かつ私がパンの耳をあげていたことを忘れていなかったのだ。私は今年から動物や鳥たちに餌をあげるのを止めようと考えていたが、「野生動物に餌をあげてはいけない」などと言う、人間がかってに作った条例など「糞食らえ！」と思えてきて、前日に買ったパンを小さく千切って、思い切り空高くほうり投げた。

臆病だけを武器として生き残ってきたリスの行動を、何処からか見守っていたかのように、その日の午後にはカモメが、翌日には大兎と雉の家族が戻ってきた。我家はリセットされて、私は責任ある家長に戻った。

店探しを始めて2ヶ月が経ってしまったが、ようやく、私が希望するレストラン店舗など北欧には無いということに気が付いた。多くの家庭では、落ち着いた照明のもと、清潔な壁に囲まれて、すっきりとした北欧家具と共にくらししている。ほとんどが共稼ぎで、仕事の後に飲食店には立ち寄らず、家族揃って夕食を摂る。レストランに行くのは、客があつたり、祝の時に限られている。すなわち、レストランは非日常的場所なのだ。だからそこには家庭とは異なる、優雅なロココ調や豪華なバロック調の空間を求めるのだ。私の理想とする店舗を見つけるには、レストラン以外の店舗を探さねばならない事が判ってきた。数日前に見た、町の一等地で売りに出されていた小奇麗なブティックがそれだ。しかし、一般の店舗をレストランに改築するには、キッチン、客用の洗面所、クローク、空調等を国や市が決めた

細則に合わせて改築せねばならない。

景気に浮き沈みがあり、政治に右傾・左傾化があるように、風紀にも軟化・硬化の波がある。観光地であり、ビールの街でもあるポリには、多くの風俗業が繁栄してきたが、2年前起こった9.11同時多発テロや前年起きたスマトラ沖地震以来、風俗営業への当局の取り締まりが厳しくなり、ライブショーを見せる酒場やダンスの出来る酒場が次々に閉店に追い込まれている。そんな折、「昼はレストラン、夜はパブなどという、欲張りな店舗のオープンが、このご時世、新規に許可される訳が無い」と、友人の誰かが言う。既存レストランの買い取りもダメ、新規オープンも困難。私は手詰まり状態に陥っていた。

雉の家族が戻って来た日、トウミネン教授も久方ぶりにやってきた。彼はチョット困った顔をしながら話し出した。『うちの息子がね、危ない趣味に夢中なんだよ。登山、それもロック・クライミングなんだ。』『何故それが判ったのですか？』『ここをチャンスと自白したんだ。』『チャンスってなんですか？』『実はね、先日行われた大学入試センター試験で、全国2位になってね。どこの大学の医学部でも入れるようになったんだ』と、誇らしげに言った。自慢などしたことが無かったトウミネン教授も、子供の快挙については黙っていられなかったようだ。両親が一流の教授だから、子供が最優秀でも不思議はない。私はたまたま日本から高度計付き腕時計を持って来たのを思い出して、息子へのお祝いとして教授に手渡した。

それにしても、せっかく将来が開けたというのに、世の中で最も危険なスポーツの一つと言われるロック・クライミングを趣味に選ぶとは！

登山家は山が険しい故に、山に登る。それなら私も、先日見たあの素敵なブティックを買い取って、日本料理屋に改装する「険しい山に登ろう」と決心した。

2013年06月24日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（30）】 開店への闘い



森林際の移動製材所（筆者撮影）

北欧は晩春になってさえ、厳しい「寒の戻り」に襲われることがある。せっかく育てた野菜や果実は突然の降雪で全滅してしまう。北欧人にとって農耕は危険な営みであり、生存するには狩猟や魚釣、時には海賊を生業としなければならなかった歴史が理解できる。

そんな季節外れの大雪の日に、目指すブティックの買い取り交渉が、取引銀行の会議室で行われた。一日も早いレストランの開店を願っていた私は、1セントの値引きも、電球1つの交換も要求せずに、仲介業者が作成した契約書にサインして、額面通りの小切手をオーナーに手渡した。そして、友人から送られてきた日本酒と3つのお猪口をバッグから取り出して、3人での乾杯を演出した。緊張は一度にほぐれて、話題は私のおはこである“酒が主、食は従”の日本食文化論に移って行った。以後、元オーナーと仲介業者と私の間には、長く友人の輪が保たれた。

北欧に於ける商売の書き入れ時は夏に限られている。特に我がポリの町ではポリ・ジャズが開催される7月を逃せば、商売はあがったりだ。残された時間は僅しかない。しかし、「秀吉は墨俣城を三日で造った」という。高々小さなレストラン一つの開設に、何ヶ月もかけてはられない。

契約を結んだその日の夕方には、キモさんの口利きで内装、水道、電気の専門家が施工現場に集まった。私は日本で店舗開設を何回か経験しているし、内装デザインを兼業した時代もある。私は自信を持って、自作の内装設計図と工程表を披露した。すると始めから予期せぬ事を内装屋から指摘された。『このビルはよく管理され、美しい外観が維持されていますが、ビル自体は古く、オーナーは何度も変わっています。施工中の事故を回避するためには、壁や天井裏の配線や配管の位置を正確に知っておく必要があります。その為にはまず、X線探査をやらねばなりません』『しかたがありません。大至急手配してください。他に見落としがありますか？』

すると水道屋が『貴男の工程表には床工事が書かれていませんね？』『こんなに美しい床ですから、張替は必要無いでしょう』『そうは行きません。新しく設置される客用トイレの下水管は一般用より50ミリ太くなくてははいけません。店内に段差を生じさせない為には、店全体の床を50ミリ以上高くする必要があります。又、それにより生じた道路との段差を解消するためには、店の間口の一部を割いて、店内

にスロープのついた廊下を造る必要があります』

床の全面工事は大変だ。X線探査を加えれば、予算を遥かにオーバーしてしまう。

しょうがない。私はある秘策を提案した。二年前の事務所開設工事の際に知ったのだが、フィンランドの大工さんは木材を「湯水のように」浪費する。短い部材も、長尺の木材から切り出し、残りは使用せずに廃棄してしまう。木材の豊かな国だからこそ起きる現象だ。そこでもし、必要なサイズの部材を、必要な数だけ製材所に注文すれば、材料費は半分になり、工期も大幅に短縮するはずだ。これにより、オーバーした予算は改善できる。森林の入り口に、コンピュータ制御の大型機械を持ち込み、格安に木材を製造する移動製材業者を私は知っていた。

私の提案に内装屋は『ログ・ハウスの輸出業者も貴男と同じ考えでやっていますから、私もその考えに従いましょう』と快諾してくれた。私は元気を取り戻し、『さあ後は実行のみ。皆さん頑張って、一刻も早く仕上げて下さい』と声を掛けた。

すると、それまで黙っていた電気屋が、『そうは行きません。あなたの図面には空調工事の大事な部分が抜けています。レストラン仕様の大型空調設備や配管は、この設計図通りで良いのですが、排気を裏窓からは直には流せません。階上に住む人達からのクレームを避ける為には、裏窓への大口径の排気管を、7階の屋上まで延長せねばなりません』『排気管は1メートル当たりいくら掛りますか？樹脂製を選べば、余り高くは無いはずですが』『排気管は、それほど高くは無いのですが……』『何か問題があるのですか？』と私は詰め寄った。『……大口径の排気管は見場が悪いので、このビルの外装と同じレンガを探して来て、排気管を包むように7階まで積み上げなければ、市からの建築許可は下りないでしょう。アンティークのレンガは安くはないかも……』

“新規レストランの開店は大変だ！”と皆が言った訳が、やっと私にも判ってきた。

2013年07月22日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（31）】 闘いは続く



白夜の湖（筆者撮影）

北欧の初夏は白夜の季節。西の空を、沈むことの無い夕陽が、森と湖をかすめるように左から右に移動する。この美しさを文字で伝えるのは、モナリザの微笑を文章で著すほどに難しい。写真で伝えようにも、陽光を撮影するのは、カメラを痛める危険が伴う。順光で白夜の景色を写しても、ただ全体が薄暗く映るだけだ。太陽光の弱い、夕暮れの一瞬を狙うしかない。忙しい私には、そのシャッター・チャンスが訪れる事はなかった。

ところが、開店に向けて仕事に没頭していた私を、『週末ぐらいはお休みなさい』と言って、トウミネン教授が彼の湖畔の別荘に招いてくれた。別荘は湖の東岸に位置し、天候にも恵まれ、私が思い描いていた構図通りの風景が、夕陽をバックに現れた。震える手で私は何度もシャッターを切った。

レストランの開店工事は、業者の要求を全て甘受したため、見積もりを遥かにオーバーしたものの、大過なく進められた。必要とされた関係所管への多くの書類も何とか完成し、無事受領された。日本では、小さなレストランの開業に際して、書類審査さえ通過すれば、保健所からの形ばかりの点検が入る程度だが、北欧では大いに違っていた。

まず消防署員がやってきて、『現在の裏口を消防法の規定にのっとって、開口部の大きな非常口に改造して下さい』次に保健所員がやってきて、『店とキッチンを明瞭に区分するために、開閉扉を設置して下さい』これに対して私は、『日本から取り寄せた暖簾での仕切りを認めて下さい』と主張した。結局、暖簾の丈を長くする事で折り合いがついた。次にやって来た建築局員から、非常口の上部に作った明かり取りの窓を『3重ガラスに変えて下さい』と厳命された。数年前から一般住宅も含めて、「新築の際は窓を3重にして、断熱効率を高めよ」との条例が定められていたのだ。全てお金と時間がかかることばかりだった。その後も、保健所員は何度もやってきて、『従業員の更衣室の面積を広げなさい』『トイレのドアの開閉方向を左右逆にしなさい』『掃除用具を入れる為の小部屋を設置しなさい』等々指導が入り、その都度、図面も修正せねばならなかった。そして警察署員からは、さらなる難題が突きつけられた。『貴男の申請書類によると、レストランの開店時間は午前11時。夜の9時からパブとして、深夜2時まで

営業すると言う事ですが、酒類取扱 A 級免許を持っているのは貴男一人だけです。これでは貴男自身が、1 日 8 時間の労働基準を大幅に破る事になります。もう 1 名、貴男と同じ免許を持つ人を雇用せねば、開店許可はおろせません』 これは大問題だ。ビールの本場、ポリの町で、酒の免許を遊ばせている人が居るとは到底思えない。ここまで来て、全てが無に帰してしまうのか？

私はすぎる思いで、元レストラン協会会長のラーキオに相談してみると、『長年ご夫婦で経営されていたパブが、つい先日閉店しました。ご夫君が心不全で急逝されたからです。ことによるとご夫人が貴男と同じ A 級免許を持っているかもしれません』と、貴重な情報を与えてくれた。私はすぐその足で、そのご夫人を訪ねてみると、『私の免許が日本の方のお役に立てるのなら、私にとっても大変嬉しい事です。私の祖父は“日露戦争で日本が勝利したお蔭で、フィンランドは大いに勇気づけられて、ロシアから独立することが出来ました”と、よく言っていました』 日頃、無神論者の私も、涙の出るような嬉しい答えをもらって、このときばかりは心の中で、神様と東郷平八郎と乃木希典に深々とおじぎをした。

それから 1 週間後、内装や配電工事も終わって、真新しいテーブルや椅子が搬入された。“ついに出来た。世界最北の日本レストランが！”

私は関係者へのお礼と、メニューの試食会を兼ねて、完成パーティを催した。私は心底嬉しかったし、皆も心から喜んでくれた。

大きなジョッキで地ビールのカルファーを飲み干している時、まさか翌朝に、更なる大問題が持ち込まれようとは、夢にも予想していなかった。

2013年08月19日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（32）】 絶望の淵から



リトル東京がポリの目抜き通りに（筆者撮影）

朝はまだ7時というのにオフィスの電話が鳴った。早朝の電話は不吉である。

前夜の店舗完成パーティでいささか飲み過ぎていた私は、こうようにして電話に出ると、市役所の聞き慣れない部署からで、『お伝えしたい事がございます。出来るだけ早くご来所下さい』と言うものだった。夏期、北欧人の多くはフレックス制度を利用して、早朝に仕事を始め、午後2時か3時には帰宅し、長い夏の午後を満喫するのだ。

早速、市役所に出向いてみると、受付嬢が2階の小部屋に案内してくれた。部屋に招かれると、ろくな事は無い。私も現役時代、部下を叱る時は必ず部屋に呼びつけたものだ。

フィンランドの役人は民間人に対して、滅多に名刺を出すことは無い。よって、彼の役職は定かには判らなかったが、端正な風貌からして、かなりの地位の人であることに間違いなかった。この国では、美男美女は出世が早いのだ。彼は薄っぺらな綴りをめくりながら、すぐに本題をきりだした。『貴男がオープンしようとしているレストランのビルに住む77世帯が、自治会を組織しています。会の規約には、“ビル内における店舗の業態が、大きく変わる時には、自治会全員の同意が必要とされる”と書かれています。以前ブティックであった店舗をレストラン・パブに変更するためには、この規約をクリアせねばなりませんね』 『77世帯全部の同意を取り付けろと言う事ですか？』と私は問い直した。『そのようです。そう書かれています』

全世界帯から同意してもらおうと言う事は、選挙に例えるなら、100%の投票率を得て、かつ全員から賛成票をもらうことである。そんなことは出来る訳がない。私は猛烈に腹が立って、『自治会のこと何で役所が首を突っ込むのですか？』と不穏な質問をしてしまった。すると、『私の部署は、市民からの相談に、できるだけ対応する使命を負っています。貴男が外国人であるので、私から貴男に伝達したほうが、丸く納まるのではないかと自治会の人たちは考えたのでしょうか』 私は反論に窮してしまった。

登り着いたと思った山頂から、いきなり谷底に突き落とされてしまったのだ。もう這い上がる力は残っていない。「絶望」とは、この時のために用意された言葉だ。

私は家に戻って、夢であれと念じながら、真っ昼間にもかかわらず地元のウオッカ、コスケンコルバをストレートで呷った。

酒は喜怒哀楽を助長する。怒りを通りこして哀しみがこみ上げて来た。乗り越えても、乗り越えても次の罨が待ち受けている。この国で、私が成功することは不可能だ。全てを清算して、日本に帰ろう。打たれ続けても、何とか耐えてきたボクサーが、最後のカウンターパンチを浴びて、ヒザから崩れ落ちた時のようだった。

酔った勢いを借りて私は、来欧以来、全ての面で援助してくれたキモさんにお詫びと帰国の決心を告げようと、ホテル・ランタカルタノを尋ねた。

意外にもキモさんは笑顔で、『私が自治会長に会って、来週中に説明会を開くように頼みましょう。貴男はその説明会を、“ご近所の人達に只で宣伝が出来る良い機会”と捉えて下さい。出席出来ない人には、委任状を隣人に託すようにも計らいましょう。それ以外にも私が出来ることは何でもしますから、希望を捨てないで下さい』と、諭してくれた。

キモさんの助言は心から嬉しかったが、それでも、100%の同意は不可能としか思えなかった。もし私がビルの住人で、一階に居酒屋が出来るとしたら、いくら呑平とはいえ、反対票を入れるだろう。

翌朝、私のもとに西海岸最大の新聞社「サタクナンカンサ」から、取材の要請が舞い込んだ。記者会見はその日の午後、新装なった私のレストラン・パブで行なわれた。記者の他に、カメラマンと通訳がついた本格的な取材であった。

そしてその記事は、フィンランド人が一番読むといわれる日曜日の朝刊の1面全紙を飾った。太字の見出しは「リトル東京がポリの目抜き通りに」と言う衝撃的なものだった。内容も、「日本レストランの開店により、ポリは国際都市の仲間入りする」と、すこぶる好意的に書かれていた。

この日、深夜まで私の携帯もオフィスの電話も鳴り止むことは無かった。新聞社から、この取材を仕組んだ人物の名を明かしてはもらえなかったが、前日会ったキモさんの笑顔が繰り返し思い出され、うれ

し涙が止まらなかった。

100%も、可能かもしれない！ 希望が生まれてきた。しかし、世の中にはヘソ曲がりがいる。説明会は私の一世一代の舞台となった。

2013年09月17日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語 (33)】 封印を解く



展示したリトの一枚（筆者撮影）

「結果は準備で決まる」が、私の座右の銘である。準備を万端にしても、不慮の事故で失敗に帰することはあるが、準備不足で成功するためしは無い。

ビルに住む 77 世帯から 100% の賛成票を勝ち取るには、相当に準備を整える必要がある。しかし、その時間が無い。勝つ以外に先に進む道はないのだから、何かの術で不足を補わなければならない。勝つ常法は、先ず敵を知ることだ。私はビルの管理会社を訪ねて、その問いをぶつけてみた。すると、『あのビルは市内でも一等地にあるので、家賃は高めに設定されています。その結果、住人達は W で年金をもらっている老夫婦か、通勤に時間を掛けたくないエリート・サラリーマン等です』という答えが返って来た。

フィンランドのお年寄りには日本最良だ。「日露戦争で日本がロシアを破り、勇気づけられたフィンランド人はロシアからの独立を勝ち取った」という歴史のご利益が未だに残っている。問題はエリート・サラリーマンの心をどう掴むかだ。男とは限らない。北欧ではエリートの半分以上が女性である。考えた末、レストラン・パブを宣伝するのではなく、日本文化のアピールに的を絞ることにした。地方都市よりは、ロンドンやパリではない。日本文化に直接接した人は皆無に等しい。私は東京の家族に電話して、説明会に使用する小道具を大至急送ってもらうことにした。

説明会の前日、集会場を下見させてもらい、音響装置を整え、日本から届いたばかりの四半世紀封印していたリトグラフ（石版画）を壁に貼った。

翌日、早めにやって来た老人達は壁に掛けられたリトをなめるようにして見てくれた。リトグラフの原画はどれも、25年前に隣国のスウェーデンで酒席の余興に万年筆で描いたものだ。気に入ってくれたストックホルムの画商がそれら全てを買い上げてくれて、リトグラフにおこして販売したのだ。

数年後、縁有って人間国宝、仏師・松久朋琳（1901～1987）と米国旅行をご一緒させて頂いたことがある。帰国後、京都のご自宅に招かれた折、私は愚かにもリトの一枚を見てもらった。先生は一瞥して、『しょせん貴殿は縁無き衆生（信仰心の無い俗人）』と言って、暗に、私には仏を描く資質が無い事を諭してくれた。私は大いに恥じ入って、絵筆を折り、人様に絵を見せることを封印した。

しかし今、私はのっぴきならない状況に直面している。苦し紛れに「旅の恥はかき捨て」という大嫌いな故事を利用することを決意した。達人には無価値と見抜かれてしまったが、私のリトがかつて北欧で完売されたことも事実である、と自分に言い聞かせて、四半世紀前に誓った封印を解く事にしたのだ。

北欧の老人達が唯一知っている日本の歌は、戦前世界中で人気になった“♪サクラー サクラー♪”なのだ。カルチャー・ショックを起こさせないように、先ずチャイコフスキーの協奏曲「桜」、次に平井康三郎のピアノ幻想曲「桜」、その後は宮城道雄の箏曲、「桜」変奏曲を流した。老人達は懐かしげに曲に聞き入り、涙さえ流してくれる人もいた。

そして、店への採用が決まっている上海娘“ココ”を皆に紹介した。げに女性は化け物である。長く肩にたらし髪を、後ろに高く結い上げ、唇に紅をさし、眉に墨を長めに引き、日本から届いた紺色の浴衣を着せると、竹久夢二の描く美少女から、妖艶な博多人形のモデルに変身した。若いサラリーマンからはため息が漏れ、エリートOLからは羨望の眼がココに浴びせられた。幸いにして、時は初夏。OL達の服装はTシャツがほとんどだった。私は、簡単に結べる細めの平帯を使って、残り3枚の色とりどりの浴衣をOL達に試着させた。私が着付けの手伝いをしている時、頭の良いココは憶えたばかりの日本文化をエリート男性達に上手に語りかけてくれた。誰一人ココを中国人と見抜く者はいなかった。

会の終わりに、自治会長が片手に委任状の束を持って、皆の前に立った。そして、レストラン・パブ開店の賛否を皆に問いかけた。会場の隅々から“Kyllä(イエス)”の声がわき起こり、全員が起立して賛成の拍手を送ってくれた。

しかし、結論は自治会長が握る委任状の中にある。会長はその束をペラペラとめくった。当然、反対票があった・・・はずだ。

会長は委任状を机に置き、ポケットから自治会規則を取り出して、『最終章に、緊急事態に際しては、“過半数の賛成を以て、決定権限は会長に一任される”と書かれております。先日の新聞に、ポリに日本レストランが開店する、と載っています。この国最大の恒例イベント、ポリ・ジャズの開催はもうすぐです。それまでに店はオープンされなければなりません。これは、緊急事態です。ここに出席する皆様は自治会員の7割に及びます。よって、私は過半数の賛成を得たものとして、会長権限により“日本レストランの開店を許可します”』と宣言した。

一瞬、壁に貼られた仏様達が、笑みを浮かべた様に私には見えた。

2013年10月15日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（34）】 大きな政府



ポリ市官庁街夜景（筆者撮影）

「名は体を表す」は命名の理想である。最後の難関であった自治会からの同意書を取り付ける事が出来たので、完成した分厚い書類の表紙に店名を記入して保健所に届出をすれば、いよいよ「世界最北の日本料理店」が誕生する。店の体を上手く表現する名が付けられたら、集客力はアップするはずだ。欧米に於ける既存の日本料理店の名前を調べてみると、「富士」「桜」「侍」「歌舞伎」と言ったたぐいの名が依然として多い。私はそんなカビ臭い名前は付けたくなかった。私の店は欧米でブームとなっている寿司を主体に、日本食を売るレストランであり、夕食時間が過ぎれば、パブに変身して酒好きの客を集めようとしている。

考えた挙げ句の果てに付けた名前が、“パブ・レストラン・スシ”だった。妙だとそしられるのは判っていたが、これ以上に「体を表す」店名が思いつかなかった。

翌朝保健所に行くと、既に顔なじみになっていた受付嬢が、『遂にやりましたね！』と言って、笑顔で書類を受け付けてくれた。役所の多くの人達が、居酒屋開店の難しさを知っていて、私の挑戦に興味を持っていたのだ。

私は開店日を1週間後の日曜日と定めて、雇用が決まっている4人の娘達の研修と、当面の食材の仕入れに専念した。それまでは、目の前のハードルを乗り越えるのが精一杯で、物事を深く考える余裕など無かった。ここにきてやっと「何故、たかだか一軒の居酒屋をオープンするのに、無理に無理を重ねなければならなかったのか？」と自問する余裕が出来た。誰もが意地悪をした訳ではない。人種差別が有った訳でもない。むしろ日本人であったことは、良い方向に働いた。制度的に日本と違う点は、居酒屋の開店に国家免許が必要だった事だが、それ以外では、建築局、保健所、消防署、警察署など、行政の関与は同じであった。

考えは、「行政府の大きさが違う」という点に行き着いた。北欧流の良質な社会福祉を国民に施す為には、その分、社会の後ろに大きな官僚機構が存在するはずだ。沢山の役人がいるから、一居酒屋の開店に際して、細部までチェックを入れ、細則に従って指導するのであろう。

私は、無沙汰のお詫びと、開店の報告を兼ねて、ポリ市の副市長を訪ねて、その質問を試みた。答えはやはり私の予想通りだった。副市長は『ポリ市の役人は、住民の 12%を占めています』と明確に答えてくれた。ちなみに、私の住む東京郊外の市では、アウトソーシングが進み、役人の数は人口のほぼ 1%迄下がっている。ポリ市には 12 倍の役人が居るということだ。

役人の数が多いだけ、規則は細かい点にまでおよび、進捗状況もキチンとチェックさるのだ。これが社会のあるべき本来の姿なのかも知れない。しかし企業家にはなんとつらい仕組みだろうか。

開店に到るまでの経緯を振り返ると、「不可能と言われた酒類取扱 A 級免許を得た事」「州最大の新聞が一面全紙で開店記事を掲載した事」「もう一人必要になった、A 級免許者が即座に現れた事」「100%の賛同を必要とする自治会から、短時間に合意が得られた事」等、望外の幸運に恵まれたことが思い出された。どれをとっても宝くじの一等に当たったようなものだ。もし一人一人の生涯に与えられた「幸運の絶対量」が一定であったとしたら、この一件で私は全ての運を使い果たしてしまったかも知れない。

開店を翌日にひかえ、初めて「大きな政府の下で、小さなレストランを経営する」事に、かすかな不安を覚えた。

2013年11月11日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（35）】 マンション



これが北欧のマンション

開店の直前に感じたかすかな不安は、型を変えて現実のものになった。

新聞で大きく掲載された「ポりに日本レストラン」の記事には、開店日は明示されていなかった。一週間前に店の入口のドアに開店日時を示す小さな貼紙をただけで、宣伝広告は一切しなかったため、初日の入りはたいしたものではないと踏んでいた。

ところが、開店1時間前の朝10時には行列が出来始めていた。後に知らされたのだが、地元の複数の中小新聞が、ドアに張られた紙片を見て、ニュースとして掲載していたのだ。開店の11時には、店頭からは最後尾が見えない程の長い列が出来てしまった。

監督官庁の指導に従って、設計変更を繰り返した為、バーのカウンター席を含めても、収容能力は30席に減少していた。開店当日、レストラン・サイドは二人のフィンランド娘と、助人のロシア女性二人が受け持った。一方キッチン・サイドでは、揚物と盛付けは上海娘ココに、食器の用意と皿洗いを独楽鼠のチャイに割り振って、私はもっぱら寿司握りに専念した。握れる寿司の数は、時間内に炊けるしゃりと、仕込んだネタの量で決まってしまう。思い切り頑張った結果、しゃりもネタも開店3時間後の午後2時には切れてしまった。

昼食はファースト・フードと決めているアメリカ人とは違い、ヨーロッパ人は昼もスローフードを楽しむ。しかし、心優しい多くの客は、外で待っている人たちの為に、早めに昼食を切り上げてくれた。その為、短時間に客はほぼ4回転して、用意された120人分の食材は予定よりずっと早く払底してしまったのだ。よって、長い列を作っていた客達を追い返すハメになってしまった。当分はこの調子が続くであろうと予想された為、整理券は焼け石に水で、配布することも出来なかった。

この日、最後に滑り込んだ男性客が、よほどしびれをきらしていたのだろうか、おとなしいはずのフ

インランド人なのに、『目薬の容器にビールを注ぐようなものだ。マンション以外ではこれほど沢山の客は収容できっこない』と叫ぶ声が、キッチンにまで聞こえてきた。

欧米で、私達日本人が絶対に言ってはいけない禁句がある。『私はマンションに住んでいます』という言葉だ。例え、超高層ビルの最上階に位置する6LDKに住んでいたとしてもだ。いくら豪華で広くても、それはあくまでも、集合住宅の一部（a part）にすぎないのだ。私は北欧にきて数回、元はマンションと呼ばれる館を訪ねたことがある。今でこそ郷土館やホテルとして使われているが、かつてはどこも領主様のお屋敷で、敷地内には小川が流れ、教会があった。館内には大きな舞踏会場があって、冠婚葬祭時に遠方から招かれた王家の人々が宿泊出来る、数十の部屋が用意されていた。豪邸が多いアメリカでも、マンションと言う言葉は滅多に耳にしない。ネヴァーランドと呼ばれる巨大遊園地を邸内に持っていたマイケル・ジャクソンが急逝した時、テレビ・レポーターが『私は今、彼のマンション前から・・・』と、報道された時に聞いたくらいのものだ。

混乱に近い店の状況はほぼ1週間続いた。この期間に来た客は、「おもてなし」は受けられず、長い待ち時間と慌ただしい雰囲気、ガッカリしてしまったに違いなかった。従業員達も、昼食すらとれず、疲れ切ってしまった。同日にオープンするつもりだった夜のパブは、その日の片付けと翌日の準備に追われ、当分開くことが出来なかった。

私の経験からすると、レストランは、静々と始め、従業員には徐々に仕事に慣れてもらい、次第に客数を増やしていくのが、望ましい姿なのだ。今回の、いきなりの盛況は、売上の的には大満足だが、理想からは大きくそれてしまっていた。この反動は遠からずやって来るに違いないと予想され、周囲の人達からの喝采とは裏腹に、開店の疲れと不安から、私は心身ともに困憊してしまった。

「小さく産んで、大きく育てよ」とはよく言ったものだ。

2013年12月09日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（36）】
来るもの、去るもの。



クーキーのお母さん



クーキーの赤ちゃん



クーキーのお父さん

庭のリンゴの木の下で何かが動いた。

無我夢中で働いた開店最初の6日間が過ぎ、初めての休日を迎えた朝の事だ。近づいてみると、本でしか見た事のない全身が針で覆われている3匹の小動物が列を成していた。山嵐なのか針鼠なのかは判らなかったが、つぶらな瞳が愛苦しい。特に赤ん坊と見える一匹には、“世にこれほど可愛い生物がいたのか！”と感嘆させられた。

私は急いでキッチンから見つけてきた、バナナとパンの耳を小さく千切ってそっと投げ与えてみた。はじめのうちは警戒していたが、おずおずと赤ん坊がバナナを、親達はパンの耳を食べ始めた。兎、リス、キジに次いで4番目の我が家の住（獣）人となった瞬間だ。親はクークーと、赤ん坊はキーキーと鳴くので、彼らをクーキー一家と名付けた。

後にしばしば見るシーンだが、隣家の犬や猫が近寄って、面白げに戯れる。すると、クーキー達は体全体をテニスボールのように丸めてしまう。昔、忍者の一派が使った鎖の先に付けられた棘鉄球と化すのだ。手出しをした犬や猫が悲鳴を揚げて逃げ帰る様は何度見てもおかしい。こんなに可愛い珍獣達が動物園ではなく、自分の庭にいるのを見ると、「北欧に来て良かった」と改めて感じる。彼らは私のペットではない。ペットは所有物だが、彼らは自立した尊厳を持っている。その分、いっそう愛おしく感じ

られるのだ。

この夕、私は開店の為に尽力してくれた大工さん、電気屋さん、水道工事屋さんたちを集めて、自宅でささやかな飲み会を催した。ところが一番来て欲しかった、影の功労者の“メリミエス”（船乗り）がいつまで待っても来なかった。

店の工事は度重なる設計変更で、当初計画した材料費の最少化はもろくも崩れてしまい、時間を急ぐあまり、材料の購入は現場任せになった。よって、湯水のように使われた木材の余りが大量に出続けた。普通、見習い職人が街外れの産廃処理場へ運び出すのだが、あいにくとベテランばかりだったので、臨時作業員を別個に雇わなくてはならなかった。北欧では、労働者の賃金はいわゆるジョブ・メニュー方式で、人が嫌がる仕事、危険を伴う作業、週末や祭日の労働には、より高い賃金が支払われるシステムになっている。危険が伴う工事現場、清掃作業、週末労働と重なれば、驚く程高い賃金を支払わねばならない。その事情を熟知していた、元レストラン協会会長のラーキオが、私の処にメリミエスを連れてきたのだ。彼は強度のアル中で、風体はまるでホームレスだ。ただ、海の色に染まったかのようなブルーの瞳と筋の通った鼻が、育ちの良さを物語っていた。彼は年金をもらえる年齢になったある日、最後の航海を終えてポリの自宅に戻ってみると、わずかな家財と離婚届用紙を残して、奥様は娘達を連れて家を出てしまっていたのだ。以来、彼は酒浸りの人生を送っている。

ラーキオは私に『彼の送り迎えと、トラックの運転は私の社員にさせる。メリミエスは無口だが英語は話せるし、単純作業なら出来るから、彼に清掃作業をさせてくれ。賃金は僅かで良いが、時々ウオッカをプレゼントして欲しい』と言った。

メリミエスは、ウオッカの携帯容器をズボンの後ろポケットに入れて、朝から夜迄、黙々と端材をトラックに積み、処分場で荷下ろしをしてくれた。お陰で他の職人達は予想以上のスピードで仕事をこなす事が出来た。私は一度、彼の家を訪ねた事がある。市から無償で与えられた、小さなキッチンの付いたリビングとベッドルームだけの、いわゆる2Kに住んでいた。彼は肘掛け椅子に座って、プーラン（小型チーズパン）をかじりながらウオッカを飲んでいて、私の頼みに応じて、アラビア海の嵐、エーゲ海の風、インド洋に沈む夕日・・・数々の海の光景を語ってくれた。私はいい友達に遭えたと思った。

この日の飲み会の後、私はウオッカを持って彼を訪ねてみた。彼の家扉は開け放たれ、数人の男達が慌ただしく出入りしていた。家の中にいたラーキオが私に『メリミエスは数時間前、ドア・ノブに紐を結んで、首を吊って死んだ。きっと、貴君の開店の手伝いが終わると、彼には生きる目的が無くなってしまったのだろう』と話してくれた。

「人生は、出逢いと別れの繰り返し」と先達は言う。新しい家族が出来た日に友人が去り、この言葉の正しさを実感した。

2014年01月14日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（37）】 形見の椅子



白樺に黒御影の墓地 （筆者撮影）

葬儀は文化・文明の原点であり、ピラミッドの例を挙げるまでもなく、墓はその証である。私は開店直後の店を空けるわけにもいかず、メリミエスの葬式には参列できなかったが、2週間後に行われた埋葬式には参加できた。北欧では普通、埋葬は葬式の2週間後に行われる。乾燥・寒冷地の為、死体の腐乱が遅いが故に出来ることだが、主たる理由はバイブルに言う「復活」を期待した歴史のなごりにある。

よってキリスト教の埋葬は、回帰先の肉体を保存するために土葬とされ、火葬は異端とされた。しかし、世の建物の多くはスクラップ&ビルドされるが、墓だけはビルドばかりでスクラップされない。当然、広さに限界のある墓地は、土葬を続けることが難しくなってきた。そのためか近年、「復活は霊なるものの回帰を意味し、死せる身体は不要」との解釈の変更が進み、火葬が急速に増えている。最新の統計によれば、埋葬方式は国全体の44%、首都ヘルシンキでは77%が火葬によって行われている。その流れを受けて、火葬専用の墓地が各地で急増している。

北欧では墓標の多くが、日本で「黒御影」と呼ばれる滑らかで風化しにくい黒色の鉱石で造られる。「御影」の名は神戸市の御影町に由来するが、鉱物学的には、成分の差により花崗岩とか閃緑岩等に分類される。墓石と「御影」がよくマッチしているため、日本では御影石の名が定着した。近年、日本での産出量が減っているため、その多くを北欧から輸入している。北欧産黒御影はファイングレーと言う商品名が付けられ、日本では最高級墓石として高価格で取引されている。

当然、産地である北欧からドイツにかけて、墓の多くに黒御影が使われている。そこで、墓地は黒々としている。北ドイツに、「なぜ雪の色は白いの？」という古い民話が残っている。「昔々、雪は透明だった。色が欲しかった雪は、先ず黒くなりたいと願って、墓地に行って黒色を分けて欲しいと頼んだが、断られてしまった。雪は寒さを運んでくるので、皆から憎まれていたのだ。紫のすみれ草からも、黄色の菜の花からも色をもらえなかった。同情した、松雪草（学名不明）だけが、自分の白を分けてくれた。白を得た雪は、冬になると全ての草花を枯らしてしまうが、松雪草だけは枯らさなかった」と言うお話

だ。この話から、黒御影は昔から墓石に使われている事が分かる。

墓地の多くは教会に所属するが、公営の共同墓地もある。家族から見放されたメリミエスはこの共同墓地での埋葬となった。参加者はラーキオと私、それに仲間だった船乗り達の計8人だけだった。

埋葬の後、私達はメリミエスの生前の自宅に行き、形見分けを行った。形見と言っても価値のある物は全て、奥方と娘達が持って行ってしまったので、残っているものと言えばウオッカの空き瓶と海外の港で買った、ガラクタ同様の民芸品だけであった。ラーキオは皆に『一品でもよいから、もらってくれないか』と問うた。私は迷わず、彼が気持ち良さそうに座っていた肘掛け椅子をもらうことにした。(その時は、よもやこの形見が後年私を救ってくれる椅子になろうとは、思ってもみなかった)

男ばかりで集まることは北欧では滅多にない。仕事が終わると、家族の元に直行するのがこの国の掟なのだ。形見分けが終わって、葬儀は全て終了したものとして、私達はメリミエスを思い出しながらラーキオが用意したウオッカを飲み、男達だけの語らいの時間を過ごした。

話は自然と、メリミエスの自殺の一因である離婚に行き着いた。私は常々持っていた疑問をぶつけてみた。日本での離婚の理由は、「すれ違いばかりの生活で・・・」とか「会話が少な過ぎたから・・・」「主人は仕事ばかりで・・・」等々が多い。ところが、北欧では夫婦で語り合う時間はたっぷりある。しかも、フィンランド人は世界で最も我慢強い国民、男性は世界で最もおとなしい人と言われている。

にもかかわらず、北欧の離婚率は日本より遥かに高い。確かな統計は無いが、感じとしてはおそらく、離婚率は100%を超えているであろう。もちろん、添い遂げるカップルも多くいるが、一人(特に女性)が複数回、離婚・結婚を繰り返すからだ。私は何人かの子供達に『お父さんはどこに住んでいるの?』と聞いたことがある。返って来た答えは、『今のパパはこの町に住んでいます。前のパパは隣町、そして私の本当のパパはヘルシンキに居ます。』

どうして離婚率がそんなに高いのか?その理由はいったい何なのか?私が形見の椅子に座りながら聞いていた、滅多に聞く事のできない、男達の本音の話が佳境に入ろうとしていた。

2014年02月10日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（38）】 北欧離婚事情



ブルーベリーの森（筆者撮影）

終の住み処となったメリミエスの公営住宅の裏庭は、低い垣根を隔てて、すぐに深い森が広がっている。そこでは、地面を這うようにして育ったブルーベリーの小木が、紫の実をつけ始めていた。収穫期の晩夏は2ヶ月ほど先で、その頃には辺り一面がブルーベリーに覆われる。腰をかがめながらの採取は重労働なので、フィリピンから女性の団体を招き、ブルーベリーを大量に集荷して、日本に輸出する企業も現れた。



実り始めたブルーベリー（筆者撮影）

午後9時を回ろうとしているのに、北欧の初夏は一向に暗くならない。居間に集まった男たちは時間の経つのも忘れて、離婚談義に花を咲かせていた。

『航海から帰ると、家では厳しい身体検査がいつも待っていたんだ。女房はすぐに鞆を空けて、クンクンだ。妖しい臭いでもしたら、大騒ぎ』

『そうだろう。だから俺は、土産は香水と決めていたんだ。“いろいろ試したけど今回はこれに決めた”と女房に言えばいいんだよ』

なるほど。どこの空港内のデューティーフリー・エリアでも、やたらと香水売り場が多い謎が、やっと解けた。

『それほど慎重だった君が、どうして追い出されたんだい？』

『香港から帰った時、セーターに長い黒髪が一本付着していたことがあったんだ。それが、不仲の始まりで…』

『俺の場合はね、女房にブルー水晶のイヤリングを買って帰った事があった。喜んでもらえると思ったら大違い。“アナタ、これは誰への土産なの。私の瞳はグリーンでしょ。ブルーは私には似合わないの”と言って、ゴミ箱に投げ捨てられた。以後、帰国の度にギクシャクしちゃって…』

かつてアメリカの新聞に、「日本の首相はエリザベス・テラーの亭主より長持ちしない」と、頻繁に変わる日本の宰相を揶揄する記事が載った。私はエリザベス・テラーが「紫の瞳」を売りにしていた事を思い出して、瞳の色に合わせてプレゼントせねばならない白人亭主に、改めて同情の念を抱いた。

『裁判所もひどいよな。男女平等っていうのに、浮気は男の専売特許だと思っ込んでるんだ』

たしかに、この通念はおかしいと私も思う。世の中に、上り坂と下り坂の数が同じように、男女間の浮気の総数も同じはずだ。女の方がバレないように、巧妙にやっているということなのか。

『それにね、子供は母親に育てられるのが自然だって、はなから信じているんだ。だから、85%の確率で親権は母親に渡ってしまう。せいぜい男が訟えるのは、月に何回子供に会わせてもらえるのか、って言う程度だよ。しかも養育費の振込が遅れたら、会う事だって危うくなる』

『一番ひどいのは、子供は慣れた環境で育った方が良いと決めつけて、男が家を明け渡すのが当然、と思っている事だ。文句を言ったら、離婚の主たる原因が貴男の浮気に有るのだから、家をとられてもしょうがありませんよ、だって』

船乗り皆が離婚するわけではないが、類は友を呼んだのか、ここに集った船乗り達は全員がバツイチだった。

『男も女もあまり考えずに結婚し、よく考えた末に離婚するというが、特に女はそうだね』

『全くだ。女は盲人として結婚し、経済学者として離婚するという事だよ』

『それにしても、やり口がひどいよ。女房は“浮気はしょうがないにしても、私に嘘をつくのだけは止めて下さい”と口癖のように言うんだ。ある晩俺は酔っぱらっていて、“若い頃一度だけ、仲間の誘いについて乗ってしまい…、魔が差したんだよ、あの時は”と言ってしまったんだ。すると、“とうとう、白状したわね！そんな不潔な人と、これ以上一緒に暮らすのはご免です。今すぐに離婚しましょう！”と、なっちゃったんだ』

どうやら、この4人とも似たり寄ったりの罫にはまって離婚したようだ。“俺が悪かった。離婚だけは勘弁してくれ”と言っても、もうその時は手遅れらしい。渡りに船が待っているのだ。北欧では離婚が成立すれば、女性も翌日から結婚出来る。血液学や遺伝子工学が進歩して、「どちらの子供だか分からないから、女性の結婚は6ヶ月据え置き」と言う法律は、とうの昔に効力を失っている。

身ぐるみ剥がされた男は、肩身も狭くなって、職を辞してどこかの町へ去って行くケースが多い。

一方、離婚太りした女性は誰はばかることなく、新しい夫を連れて町を闊歩する。北欧の女性は、何度でも結婚・離婚を繰り返せるが、男性はスーパースターでもない限り、そんなことは出来ない。実際、私は5回以上離婚したフィンランド女性を数人知っている。その誰もが子連れで、別嬪だ。一方、3度以上結婚をしたという北欧の男性に、私はまだ会ったことがない。

最後に私は彼らに『貴男達が望んだ離婚ではなかったのなら、家族との別れはさぞ辛かったでしょうね。奥様は最後に何と一言してくれましたか?』と質問すると、皆から同じ答えが返って来た。

『家の鍵は置いて行って下さい!』

2014年03月10日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（39）】 二つの大きな贈り物



魚粉製造工程の一部（筆者撮影）

古くから使われる「胸突き八丁」という言葉は元来、富士山の頂上まで八丁を残す頃、空気が薄くなり、登山者はまるで胸を突かれたような苦しさに襲われる様子を表したらしい。言外に「ここまで来たからには、倒れるまで前に進まねば」という必死の思いがうかがわれる。開店して1ヶ月、私はまさにこの言葉通りの日々を続けていた。開店2週目からは夜中の10時から1時迄をウオッカ、生ビール、カクテル、そして日本酒を出すパブを始めていた。その為、私の一日の仕事は、朝の6時に河岸に行つての鮮魚の仕入れから始まって、パブの掃除を終える夜中の2時過ぎまで続いた。



出来上がった養殖用魚粉（筆者撮影）

何とか頑張れたのは、スタッフの献身的な協力と、周囲からの熱い激励があったからだ。料理学校から派遣されて来た2名の実習生、

クリスティーナとシルビアは、選りすぐられたと言われるだけあって、甲乙のつけがたい美少女で、上海娘ココを加えた3人はこの上ない看板となった。お陰で、満席が連日続いた。裏方を任された独楽鼠のチャイは、キッチンで黙々と皿洗いや料理の盛りつけをしてくれた。店には、ロシアンクラブのご夫

人達がシフトでも組んだかのように、入れ替わり客としてきてくれて、昼食のピーク時には配膳の手伝いもしてくれた。

そして大いに助けられたのは客のマナーであった。子供の頃から躾けられたのか、だれもがテーブル・マットの上だけで食事をしてくれて、テーブルをよごす人はいなかった。又、食べ残しをする人は皆無で、レストランサイドからは一切の生ゴミが出なかった。

しかも嬉しいことに、キッチン・サイドからも生ゴミはほとんど生じなかったのだ。なぜなら、河岸で仕入れる魚のほとんどは、ハラワタ、頭、尾と骨が除かれていたのだ。北欧では大半の魚がいわゆる「三枚おろし」か「サク」の状態に流通される。雪による冬の交通便の悪さを乗り切るために、腐りやすいハラワタが先ず除かれるのだ。そして、北欧における生鮮の販売は、量り売りが主流で、客は『私共では頭や尻尾、骨も食べませんから、目方を量る前に取り除いて下さい』と店員に要求する。店頭で捌くのは大変だから、自ずと流通以前に、それらを除去する工夫がなされた。それが、多くの北欧の漁港で見られるフィッシュミール・プラント（養漁用飼料工場）だ。

そこでは、水揚げされたばかりの魚がコンベアーに載せられて、いくつもの工程を通過して見事に解体される。新鮮でカルシウム満点の魚の残滓は、先ず蒸気装置で熱せられる。次に乾燥装置により水分が除去され、最後に圧搾空気により粉碎されて、フィッシュミールと言われる良質な養漁用魚粉となる。世界中で魚の養殖が盛んになった現在、これらの魚粉は海外に大量に輸出されて、外貨を大いに稼いでいる。まさに一石二鳥のこのシステムは1970年代後半から日本各地の漁協にも輸出された。

開店2ヶ月目を迎えようとした日の朝、河岸から戻って見ると、店頭に大きな包みが届いていた。スタッフの助けを借りて開梱してみると、中から2つの大きな丸テーブルが出て来た。送り状に「貴男の店の前に置いて下さい。売り上げに貢献するはずですよ」と書かれた小さなメモが添付されていた。送り主はウルキ・カンガス。40年前にポリ・ジャズ祭を創設して、この町に年々莫大な経済効果をもたらしてきた功労者だ。彼は開店の日に来てくれたのだが、待ちきれずに帰ってしまった一人だ。

二つの大きな丸テーブルには8名ずつ、計16名が座れる。満席なら売り上げはほぼ5割アップする寸法だ。実は私も当初から、多くのレストランがやっているように、店の前にテーブルを置く事は考えていた。しかし、換気窓の大きさすら厳しくチェックするこの国では、道路に店を張り出す為には、よほど高いハードルをクリアせねばならないだろうと私は考えていた。許可なしに店頭でテーブルを出せば、下手をすると、刑法の往来妨害罪で現行犯逮捕もされかねないと恐れていたのだ。

町の有力者に背中を押される形で、その日から2つのテーブルを出した。もし、当局の監視に引っかかれば、その時は「知らなかった」と逃げればよいと、腹をくくった。しかし、以後一度もクレームを受ける事はなかった。北欧では「夏は太陽の下で」が全てに優先する伝統があるようだ。二つのテーブルは私にとって、ありがたい大きなプレゼントとなった。

私の店には解決せねばならない一つの悩みがあった。夜のパブ営業に無理が生じていたことだ。酒の免許を取得するのは大変だったが、パブの商売自体は楽なものだ。ビール樽の下にあるレバーを引いて、大きなジョッキに生ビールを注げば、それだけで利益が生まれる。まさに打ち出の小槌だ。しかし、私一人で出来る仕事ではない。順番でスタッフの一人を遅くまで残業させていたのだ。若い娘を夜中に帰宅させるのは大いに気が引けていた。だからといって、経済的責任を重く背負っている北欧の男性を、始めたばかりの店で雇用する気にはなれなかった。

この日の夕方、料理学校の校長が、『良い人を紹介しましょう』と言って、エミリーと言う名の女子学生を連れてきた。娘は『私は将来、プロのバーテンダーになることを希望しています』と言う。身長は185センチ、胸板の厚い堂々たる体躯の持ち主だ。彼女は『男に生まれていたら、きっと格闘家になっていたでしょう。お店で雇って頂ければ、酔っぱらいは、任せて下さい。私がつまみ出します』と言いながら、腕を曲げてカコブを見せてくれた。私はすぐに彼女を“ガードマンのエミリー”と命名した。合格を即決した事は、言うまでも無い。

神様は寛大にもこの日、胸突き八丁を超えようとモガいている無神論者同様の私に、大きな2つのプレゼントをお与え下さった。

2014年04月07日

【世界最北の日本レストランーフィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（40）】 悪夢の夏至祭



夏のウーテリ海岸（筆者撮影）

「こんなことがあって良いのか？」と言いながら、私はこの日何度目かのため息をついた。前日まで連日満員が続いていたのに、この日は朝から人っ子一人来ない。そういえば週の初めに、ラーキオから『今週末は、どうするんだい？良かったら私の別荘に遊びに来ないか？』という電話がかかって来た。私は開店して間もないレストランを閉じて、休暇をとろうなどとは夢々考えていなかったのも、その誘いを体よく断っていた。クリスティーナ、シルビア、それに入って間もないエミリーからも『この週末は休ませて下さい』と言われていた。

この6月最終の週末は、夏至祭（フィンランドでは聖ヨハヌス祭と呼ぶ）なのだ。聖ヨハヌスが「愛の神」とされていることからか、別名“愛の日”とも呼ばれている。人々は森や湖で、家族や恋人と過ごすことになっている。

フィンランド最北の町「ロバニエミ」がサンタクロースの生誕の地とされているので、フィンランドはクリスマスの本場である。しかし、雪に埋もれたクリスマス祭より、快適な夏に行われる夏至祭の方が、特に若者たちにとってはより楽しい祭りらしい。

夏至祭に皆が郊外に行く事を私は知らなかったわけではない。私は、「多くの店が閉じているなら、開店している店は繁盛するだろう」と考えたのだ。「人の行く裏に道あり花の山」が私の信念。「逆張り」が私の看板なのだ。東京タワーもスカイツリーも行きたいとは思わないが、ニューヨークのハーレム、香港の九龍城、戦時下のヴェトナム等々、人が「絶対に行くな」と言う処には行かずにはいられなかった。その為、地元の警察、大・公使館、時には軍隊の方々に面倒を掛けてしまったこともある。

夏至祭の初日にあたる土曜日、私の店は上海娘ココ、独楽鼠のチャイと私の3人で運営することになった。ランチタイムが過ぎる2時になっても来客数はゼロのままだった。店の前に出てみると、周囲をバリケードで封鎖されたかのように、車も人の姿も無く、ゴーストタウンと化していた。私は、悪い夢でも見ているのだろうかと思えなかった。皿洗いも盛りつけの仕事も全く無かったチャイは、3時には『私が居ても経費の無駄でしょうから』と言って、帰って行った。

「ミジメ」という言葉は、まるで「客がゼロの日のレストランの店主」のために用意されていたかのように思えた。私の長い仕事人生で、心の痛みや悲しみは何度も味わってきた。しかし、ミジメと感じたのはこれが初めてだ。

店に残ったのは、私と上海娘ココだけになった。普段無口なココは、私の気を紛らわせようと、故郷の話や、両親の話をしてくれた。ココの心遣いは嬉しかったが、痛みや、悲しみと違って、ミジメさは優しくされればされる程、増幅されてしまう。夕食時になっても客は誰も来なかったのだから、ココにも早めに帰宅してもらった。店には私だけが残った。それでも、酒飲みは一人や二人は来るだろうと考えて、パブ用の部分照明に切り替えて、客を待った。しかし、深夜12時になっても、誰もこなかった。

私の逆張りはポリの町では通用しなかったのだ。「明日は休もう」と独り言をいいながら、仕掛かりの生鮮食材を全て廃棄した。満員の日にも生ゴミがほとんど出なかったというのに、一人も客が来ない日に、一番沢山の生ゴミを出さねばならないとは、何たる皮肉か。ミジメさに敗北感まで加わった。

帰り支度をして、店の照明を消そうとした時、突然、ロシアクラブの一員で、バラの花売りをしている女性が飛び込んで来た。『貴男が今日も店をオープンしているってラーキオから聞きました。“さぞやナガイはしょげているだろうから、ユーテリ海岸に連れて行ってあげてくれ”と頼まれました』と彼女は言った。

ポリ郊外のユーテリ海岸は北欧一の砂浜と言われ、かつてはロシアの将校達の避暑地だった。極東のウラジウオストクから出発するシベリア横断鉄道の終着駅がポリであるのはそのためだ。

この海岸沿いにある大きな松林は、夏至祭には周囲に金網が張り巡らされて、キャンプ場となる。多くの若いカップルたちが楽器やテント持参でやってくる。バーベキューを食べ、酒を飲み、大声で歌い、深夜まで大騒ぎする。若者以外は入場を断られる。ラーキオはかつて、このキャンプ内に仮設のレストランを出していた。そこで、ここの模様をつぶさに知っていた。花売りの助っ人としてならば、このキ

キャンプに潜入出来ることも。

普通では行けない処に行ける。これは、面白い。日頃おとなしいフィンランドの若者達の赤裸々な姿を見てみよう。花売り娘から大きな予備の花籠を渡された私は、彼女の後ろに付いてキャンプ場に入った。私が千円程の入場料を払おうとすると、受付の男性が、『貴男は只です。ラーキオから連絡がありました』と言って、意味有りげに私の肩をポンと叩いた。

キャンプでは深夜、男性がバラの花を買って、パートナーにプレゼントするのが習慣となっている。東の空が明るくなる、深夜の2時頃、1カップル、1カップルとテントに消えて行く。バラ売りが近づくと、テントの中から男性の声がして、バラの花を一本買う。まだニキビ面の少年や、そのテントの奥に幼な顔の少女も混じっていた。

「北欧には4月生まれが多い」と聞いたことが何回かあった。4月は小の月だし、日本と違って年度始めというわけでもない。きっと、統計上の誤差だと思っていたが、どうやら噂の元は夏至祭に由来していたことが分かった。そして、若過ぎて誕生する夏至カップルが、この国の離婚率を高めているに違いないと思えた。

ひどい一日であったが、2つの謎が解けた事で、この日一日も「良し」としよう。

2014年05月06日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（41）】 背水の陣



北欧の根性松（筆者撮影）

レストランを開店してから3ヶ月が経過する7月の末、私はたった一日の夏期休暇をとった。せっかく北欧一の砂浜を持つウーテリ海岸がポリ郊外にあるのに、そこを訪ねない手はない。

ボスニア湾を渡って来る風は、塩分が少ないためにサラサラして心地よい。高緯度に位置するので、真夏でも陽光は斜から入り、直射日光を浴びてもメラニン色素を多く持つ私達日本人には日焼けの心配はない。娘達の水着姿を肴に、寝転んで飲むビールはこの上なくおいしい。

ほどよく酔いが回り、うたた寝を試みたが、悲しいかな頭の中は仕事のことで一杯だ。夏至祭の2日間は売り上げゼロを記録してしまったが、その翌日からは又満席の日が続いた。特に7月中旬に開かれたポリジャズ祭の10日間は、夜中まで大盛況だった。よって、最初の3ヶ月間の売り上げは予想の倍程になった。

一方、開店工事にかかわった業者達からも続々と請求書が届いていた。大型空調機器、壁裏を調べるX線探査、屋上までレンガを積み上げた排気工事、お役人の指示に従って行った度重なる設計変更等々のために、総工費は当初予算の3倍を超えた。レストランの開店は、銀行からの支援を受けながら、3～5年で設備を減価償却するのが普通だ。しかし、何の実績も担保も無い外国人の私に、資金を貸す銀行はない。日本なら手形で払う手も有るが、欧米に手形は存在しない。そこで、自己資金を工面する以外に方法は無い。

どう思案しても、私に出来ることは一つしかなかった。本業を営んでいる私の会社を売却することだ。幸い、日本の得意先の中で、携帯電話メーカー最大手のノキア社との取引を拡大しようと、フィンランドに支社を持ちたいと希望する会社が数社あった。私は、その中の一社に持ち株の全てを売却することにした。

我が秘書殿も継続して働けることになり、売却自体はスムーズに行われた。会社を売り払った翌月からは、当然のことだが、それまで毎月もらっていた社長としての給料はゼロになってしまった。結果的に、己が退路を断って必死で前面の敵と戦う、背水の陣を敷くことになってしまった。道楽で始めたレストランが命がけの仕事になってしまったのだ。

決まった収入が無くなること程、心細いものはない。しかも、私の場合は、それが外国で起こってしまったのだ。旅人が異国の地で財布を失くしたようなものだ。

そして、日を迫る毎に、フィンランドでの企業経営は日本より遥かに厳しいことが分かってきた。例えば、開店に掛かった費用の請求書のうち、一件の支払いを先延ばしにしていた。納品された家具の中に色違いがあり、その交換品が来るのに2ヶ月ほど掛かったので、その分支払いも遅らせていた。すると、家具屋から2度目の請求書が公営の代金取り立て機関を通じて送られてきた。私はあわててその支払いをしたが、遅れた分の金利と、金利より大きな取立代行手数料も支払わされたのだ。総額が小さいので、苦情の申し立てはしなかったが、民間の取引に、公営機関が介入してきた事にショックを受けた。日本ではとても考えられないこのやり口について、その是非をラーキオに問うてみた。理由は2つあると言う。第一は「債権者の保護」、第二は「不払い金額を小額のうちに解決して、将来起き得た、大きな負債を抱えての倒産を回避するため」と言うものだった。筋は通っているが、公営機関からの代行請求は不愉快極まりなく、以後、支払い漏れに大きな注意を払わねばならなくなった。そしてラーキオは続けた『そんなことで驚いてはいけません。もし3期赤字が続いたら、会社を解散するよう、お上から勧告書が届きますよ』

折角とった夏期休暇も、厳しい現実を思い出すことに終始してしまった。この日の夕方、海浜での日光浴を終えて、駐車場に向かう小道を歩きながら、私は驚くべき北欧の自然の真実の姿（写真）を道路脇に見てしまった。この道は夏至祭にあわせて窪地を縫うようにして作られたものだが、工事で削りとられた地表の断面があちらこちらに現れていたのだ。友人から、「氷河が後退したとき、岩盤上に堆積した全ての土砂を削り取って行ってしまった。現在の表土はその後に生育した草花や広葉樹の葉によって作られたものだから、極めて薄い」と聞かされていた。しかし、これほどとは思ってもみなかった。樹々は深く根を張る事が出来ないため、己を支えようと水平に大きく根を伸ばさねばならない。だから国は、間伐を計画的かつ全国的に行い、樹々の共倒れを防いで、森を守っているのだ。

北欧の人々は「自然から万事を学ぶ」とか、「子供達の教育は森で遊ぶことから始まる」と言う。この厳しい自然環境を目の当たりにして、人は勤勉に働かなくては生きて行くてはいけないことを実感させられるのだ。

翌年の春には還暦を迎えようとしている私が、こんな厳しい土地で、レストラン経営一本に我と家族の生活を託してしまったのだ。

幸い私は、年齢に関して心の支えを持っている。生涯現役で会社経営をした亡き父から、よく聞かさ

れた話を忘れることは無い。

「京都は大徳寺が塔頭曰く“五十六花なら蕾、七十八働き盛り、九十になって迎えが来たら、百まで待てと追い返せ”と言う一節だ。

2014年06月02日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（42）】 正直者



北欧、初秋の兎

北欧は八月に入るとすぐに秋風が吹き始める。季節の移ろいは庭の住（獣）人達の体毛や羽の色の変化でも分かる。冬、ふさふさとした真っ白な毛に覆われて大きく見えた兎は、夏は茶褐色に変わり、体も半分程にしぼんで見える。秋になると又、体の下の方から少しずつ白い毛が増えていく。かく言う私も人生の秋を迎えて、頭髪も下の方から容赦なく白くなってきた。

八月も後半になると、街から観光客は消え、学生達が戻ってくる。言い換えれば、金を使う人たちが去り、金の無い人たちが戻ってくる。学生だけではなく、一般市民も長いヴァカンスを終えて戻ってくるが、ポリ市民はポリジャズの10日間とその後のヴァカンスで、この時期の財布は空っぽだ。

北欧の人は貯金する意識に乏しい。それには4つの大きな理由がある。第一に、老後が保証されているからだ。退職後の年金の額は、現役時代の収入より、もちろん少ないのだが、税率が大幅に低くなるので、手取り額はさして変わらないのだ。第二は、相続税が非常に高いからだ。北欧では「子孫に美田を残さず」である。古今東西、金持ちの子息等にろくでもない者が多いことをよく知っている。特に昨今の欧米では、子供が余分な金を持てば、薬にハマるのが落ちだ。第三の理由は、教育費と医療費が只であるからだ。莫大な金を子供の教育費にあてている中国、韓国、日本とは大違いだ。第四の理由は住宅が安いからだ。人口が少ないので土地が安い。木材が豊富だから建設費も安い。当然、その賃貸料も安い。

老後の心配が無く、財産を残さず、医療・教育費も只で、住宅費も安ければ、所得の全てを使い切って人生を楽しむのだ。多分国民は「税金は高いけれど、十分な見返りがある。税金は国への貯金だ」と考えているのだろう。

夏が終わると、外食する人は激減して、レストラン・オーナーの「悩める季節」が始まる。街で出会う多くの人が、私に『ご免なさい。お寿司は食べたいけれど、旅行の後だから……』と詫びてくる。

この際私も、売り上げに見合うように、経費の節減をしようと考えて、先ず予想される経費項目を全てコンピュータに書き出して見た。そして、見落としがないかどうかを、ベテランのラーキオに見てもらった。彼から『一つ抜け落ちているものがあります。音楽の著作権料です。開店してから半年内に、著作権協会の人に来て、年会費の請求書を置いていきます。小さなレストランでは結構な重荷になるでしょう』と、言われた。

どうやら、著作権料は店の規模に関係なく、一軒いくらかと決まっているようだ。ダンスのスペースを持ち、ガンガン、ロック音楽を流す大きな店と、琴の音か、懐メロしか流さない小さな私の店が、同じ金額の著作権料を払わされてはたまらない。私はその対応策を模索した。

しばらくするとラーキオが言ったように、TEOSTO(音楽著作権協会)から背が高く、目つきのするどい調査員がやってきた。私は、使用する CD の多くをテーブルの上に並べて『ご覧のように全て日本製です』と言った。彼は『日本も国際著作権協会に加盟しているので、支払いの義務がある』とピシヤリと言いついてきた。『どれも 50 年前の歌ばかりです』と言うと、『最近、音楽の著作権は 70 年間に延びました』と言って、請求書の綴りを鞆から出した。

そこで私は、CD アルバムの一枚を指さしながら、『私が払うお金はどこに行くのですか？』と質問した。彼は指先の石原裕次郎の顔を見ながら『ボーカル曲ならば、歌手に行く』と返事をした。この返答を私は待っていたのだ。著作権料は歌手だけではなく、作曲家、作詞家、編集担当者等にも分配されるが、彼は不用意にも歌手と言いついてしまった。私は一枚ずつ手にしながら『水原弘、松尾和子、越路吹雪、江利チエミ……皆死んでしまった。現在生きているのはフランク永井（かれもこのすぐ後に逝去する）だけです。でも、この人は今や意識不明の状態で病床にあり、禁治産者……』と長々と説明をした。彼はついに『分かりました。貴方の店は“フリー音楽だけを使用している”と協会に報告しましょう』と言って帰っていった。

自分で言ってしまった言葉にキチンと責任をとって、店を出て行く彼の背中に、『フィンランド人は正直者だ』と、私は小さな声を掛けた。

世の中では、数多くの統計が発表されているが、ちなみに、フィンランドは教育、通信、福祉、医療、女性の地位等、多くの分野でトップグループにランクされている。最近では、「幸福」のような抽象的な事象さえ、数値化され、統計が作られている。もし「正直者」の統計があったら、フィンランドは日本を押さえ一位にランクされるであろう。私のこの物語の中によく登場するフィンランド人も実に正直だ。

彼と仕事の話をした帰り、自宅に酒が切れているのを思い出して、リカー・ショップでウォッカとワ

インを買った時の事である。ワインの銘柄を彼と相談しようとする、店内に彼が居ない。仕方なく私はいつもの銘柄を買って外に出ると、彼はドアの外で直立不動で私を待っていた。その訳を聞いて見ると『先日、大酒をのんで、チョット失敗をしたんだ。その時女房から、今後一年間、酒場とリカー・ショップに入店してはいけない、と約束させられているのだ』と言う。

彼以上にあきれほどの正直者が私の近くにいる。彼はある朝、『学生時代に付き合っていた女性の夢を見たよ』と正直に妻に話してしまう。不機嫌になった彼女から、『あなたは、私の夢を見た事がありますか?』と問いつめられた。彼は正直にも『そういえば……一度もありません』と答えてしまった。

彼のバツイチの履歴は、『その時が始点だった』と正直に話してくれた。

2014年06月30日

【世界最北の日本レストランーフィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（43）】 透明人間



北欧、湖の初秋

北欧の秋は、京都の秋に比べても引けを取らぬ程に美しい。日本に比べて、広葉樹の種の数が少ない分、赤・黄・緑・茶色によって描かれる錦模様は大柄だが、それを補うように無数の湖が秋景色を引き立てる。

日本では名所でしか観られないような光景が、ポリでは街の中央を横切るコケマキ河の両岸や、郊外に点在する湖畔に繰り広げられている。決してお金持ちとは言えない人たちまでもが、北欧では湖畔や川岸に別荘を持ちたがる理由がよくわかる。

私の日本レストランも秋の深まりと共に、木の葉が落ちるように、客数が減っていく。ポリの街の多くのレストランは翌春迄、長い休業に入る。ホテル内のレストランも夜だけの営業に移り、経費とのバランスを計っている。

長い休業が出来るのは、春から夏に掛けて1年分の収益を上げているからだ。しかし、これが可能なのは、席数を沢山持つ大型店舗か、経費を合理化出来るチェーン店に限られる。それ以外で生き残れるのは、固定人件費はゼロ、毎日の食事は店の余りもので賄っている家族経営のレストランだけだ。どち

らにも属さない私の店が、休業せずにやっていける理由は、昼はレストラン、夜はパブと言う、欲張った経営を選んだ結果である。

全ての商売に共通だが、企業の安定経営は固定客を持つ事だ。私の店に一番足しげく通ってくれる客は、店の階上に住む足の不自由な老女である。中学生と思える三人の男子が交代で、彼女の車椅子を押して、日替わりランチを食べに来るのだ。私は彼女に『良いお孫さんたちですね!』と話しかけると、『この子達は学校の奉仕カリキュラムにそって私の面倒を看てくれているのです。嫁や孫たちは滅多に家に寄り付きません』という。

嫁と姑の仲が悪いのは、世界共通なのだ。「スープが冷めない距離に住む」と言って核家族化し、仕事の都合で遠隔地に移住する。政府はその社会動向を見抜いて、「残されていく老人の面倒」を教育プログラムの中に織り込んでいるのだ。

私は夜9時にレストランをパブに変えて、カウンターの中で仕事をするようになり、だんだんと北欧人の素顔を知ることになった。日本で純喫茶が沢山あった頃、よく言われた言葉「喫茶店では、三組に一組は別れ話をしている」はまんざら作り話ではないことが分かってきた。タクシーの中で、つい運転手の存在を忘れ、大事な秘密の話をしてしまう事がある。客にとって、タクシーの運転手は透明人間なのだ。同様にカウンターの中で、ワイングラスを拭いている私も透明人間になっている。カップルの話題の多くは他人には聞かれたくない、別れ話や姑の悪口だ。夫はもっぱら母親の弁護をする。すると妻は『いつになったら貴方たち親子は、親離れ子離れが出来るの?』『それは君の誤解だよ!』『あなた、私をとるか母親をとるか、はっきり決めて下さい』という具合だ。夫は結局妻に従い、親から遠いところに移り住んでいく。私はこの車椅子の老女の話聞いて、自分の失敗談を思い出してしまった。

私の甥の一人に大手の不動産会社に入社し、現在は子会社の住宅販売会社に出向している男がいる。彼の会社は不況の中でも好成績を上げている。二世帯住宅に力点を置いているからだという。親子一つ屋根の下に住めるし、子育ても楽だし、何よりも割賦支払い期限が長く設定出来るため、銀行への月々の返済額が少なく済む。良い事づくめではないか。

私は海外を旅する時はいつも、「日本で普及しているもので、その国には無いもの」を見つけて、その販路を開拓しようとする習性が身についてしまっている。フィンランドに定住してすぐ、フィンランドには二世帯住宅が無い事に気付いた。私は、「スープが熱いうちに飲む」「赤ん坊の面倒を両親が看てくれる」「親が現役の間は、親にローンを支払ってもらえる」という二世帯住宅は、夫婦総共稼ぎのこの国にはうってつけではないか、と考えた。

私の周りには、日本へログハウスを輸出したい住宅メーカーが沢山集まってくる。私はその内の最大手に、二世帯住宅のコンセプトを売り込むことにした。電話を入れるとすぐに、営業部長の名刺を持った美人が駆けつけて来た。

彼女は私の話を聞き終わると、しばらく間を置いてから「…全然ダメです。孔子様の教えは、北欧では通用しません。親の面倒は子供ではなく、社会が看るのです」と言って、帰って行ってしまった。

グローバル化が叫ばれている日本も、同じようになるのであろうか？さすれば、二世帯住宅販売が立ちいかなくなるばかりか、買った方の親達は、孫のオムツが取れる頃、子供家族が去って行き、ローンの支払いだけが残されてしまう。わずかな年金ではローンの残金を払うことにはままならない。売ろうとしても、中古住宅の価値は買ったときに比べて大幅に下がっている。結局は、子供達から見放され、同時に家を失って、路頭に迷う。将来、日本に必要なのは、二世帯住宅ではなく、社会が老人を看るシステムではないか。

この予感、私が日本に帰って来るころには、現実の事になり始めていた。最近ではテレビでも「家を失った老夫婦」として、しばしば紹介される。

私は今考える。海外で透明人間を経験した者が持ち帰る、「負の予感」を高く買う企業が現れても良いのではないかと。

2014年07月28日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（44）】 ポリ気質



ポリ郊外の原子力発電所

我がポリの町には、サンクト・ペテルスブルグを発する横断鉄道の終着駅があり、その駅裏にはポリ空港がある。ポリはまさに交通の要所であり、近隣の自治体を含めて、ポリ文化圏を形成している。私はこの一帯の住人をポリ人と呼んでいる。

この圏内にエウラヨキと言う小さな自治体がある。町の中心は内陸に位置するが、地理的には東西に長く、西の端はボスニア湾に達している。その海岸と地続きと思えるほど近い岸辺にオルキオルト島がある。今そこで、世界の有識者を驚かす、ある出来事が起ころうとしていた。

レストラン・パブを始めて以来、私の一日は、魚河岸での朝の買出しに始まって、店の後片付けまで続く。閉店後の掃除は辛い。町には掃除会社はあるのだが、日を跨いでしまうと請け負ってはもらえない。掃除が終わると、しばらくバーのカウンタにすわり、地元のウオッカを2、3杯飲んでから店を出る。出がけに、その日に出たゴミの袋を裏庭の片隅に設置されているゴミ箱に運ぶ。

酒酔い運転は北欧でも御法度だ。そこで、自宅との往復はもっぱらタクシーを使う。ポリ市には99台のタクシーが走っている。過当競争による事故を防止する為、タクシーの台数は規制されているのだ。連日複数のタクシーに乗るので、ほとんどの運転手は私の顔をよく知っている。北欧ではチップの習慣はないが、私はタクシーに乗るとおつりはもらわない事にしている。そこで、どの運転手も私にはことのほか親切で、いろいろな事を話してくれる。たいていは、意味の無い町内の噂話だが、中には貴重な情報もある。

新聞に載る情報などは、使い古されたものばかりで、既に価値は無い。真の情報は、報道されていな

い、巷の噂の中に潜んでいる。

先夜、一人の運転手が『ここ数日、ポリの飛行場からエウラヨキに行く日本人をよく乗せます』と何気なく話してくれた。私の脳内でカチリと小さな音がした。

数年前、出張でポリの町を訪れていた時、タクシーの運転手から『妙ですね今日は。この辺りで滅多に見ることのない日本人を乗せるのは、貴男で二人目ですよ。一人目をエウラヨキにつれていったばかりです。その方の測量器械をトランクに乗せるのに苦労しました』と話してもらった。その時も脳内でカチリと同じ音がしていた。

大きなプロジェクト工事には1) 立案 2) 調査 3) 地元民からの承諾 4) 入札 5) 工事開始のステップがある。絶対的な鍵は、地元住民の受諾にある。

今回乗せた日本人客は、紺のスーツを着た中年の男だったという。プロジェクトが3)の段階に入った事を意味していた。私は親交を続けているスウェーデンの掘削機械メーカーに務める友人に電話を入れた。今回も又、その情報は大いに喜ばれた。

数日後に、「高レベル放射性廃棄物の地下処理場を地元が受け入れ」「世界最初の岩盤内・地下水貯蔵庫」「オルキオルト島に巨大オンカロ（洞窟の意）」とのニュースが世界中を駆け巡った。

このオルキオルト島には原発が2基あり、3基目を建造中である。そして、原発から出る使用済み高レベル核廃棄物（燃料棒）を地下に掘られる巨大な洞窟（オンカロ）に水を張り、そこに貯蔵するというのだ。

観光地ポリの目玉であるウーテリ海岸からさして遠く無いこの島に、誰もが嫌がる核廃棄物最終処理場を地元が受け入れるとは、ポリ人以外の誰もが予想していなかった。

海外のメディアには『狂気か!!! 原発（3号基）だけではなく、処理施設までも受け入れ』『経済発展を優先させた地元民!』『世界の潮流に逆行!』等々と書きたてられた。フィンランドの新聞でさえも『国民の6割が反対しているのに!』と、抗議デモの写真入りで報道した。地元の新聞だけは「静かなる受入れ」と言う表現を使って対応した。

ウーテリ海岸を訪れた観光客も『清潔な調理場の隣に、何故トイレを作らねばならないんだ!』と揶揄した。

ポリ人は、他とは違う独特の気質を持っている。一言で表現すれば「超保守的」なのだ。世界中で「チェンジ、チェンジ」と騒ぐ中、「ノー・チェンジ」を貫く。いつでも「わが町が一番良い。今のままが一番幸せ。何故チェンジせねばならないのだ」と思っている。私が親しくしている副市長は都市工学の権

威で、拜命されてから 28 年になる。彼を指名した市長は 30 年も前の選挙で選ばれたという。自分で「辞める」と言い出さなければ、リコールでもおこらない限り、職務を続ける事ができる。市長は中央との折衝に傾注し、副市長は専門知識をもって町の発展に尽力する。チェンジの必要などは無いのだ。この保守的な市民を他の地方の人は「ポリの頑固者」と呼ぶ。

私はかつて、原子炉メーカーを傘下に持つスウェーデンの大手重電企業に深く関わっていた事がある。よってポリが原発を受け入れた経緯をよく知っている。

最初の 2 基の原発を受諾した 1960 年代は、スリーマイル島 (1979 年) やチェルノブイリ (1986 年) の事故が起こる以前で、原発は安全かつ無公害な「夢のエネルギー源」と言われていたのだ。過疎地であり、かつこの国で最も頑強な岩盤の上に立地するオルキオルト島が選ばれた事は、当然の経緯だった。それ以前に建設が進んでいたロビーサには、ソ連製の 1、2 号原発が設置されたが、この島にはスウェーデンのアセア・アトム社製の最新鋭機が選ばれた事も、地元の受け入れを円滑にさせた。その後、工事も稼働も順調に運んだ。結果として町の人口は増え、経済は潤った。エウラヨキの自治体は、国から保証金や補助金のたぐいは一切もらってはいない。それでもポリ人は、言い訳などはしない。

私は、オンカロに対する他人の酷評を見聞きすると、腹が立ってしょうがなかった。原発で出す廃棄物は、誰かが処理しなくてはならない。ポリ人は決して「金目」で動いたわけではない。

『自分から出たゴミは、自分で処分するしかないだろう』と、己に言い聞かせながら、店の裏庭のゴミ箱に、ゴミ袋を投げ入れて、今日も一日の仕事を終わらせた。

2014年08月25日

【世界最北の日本レストランーフィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（45）】 「ラウマ織り」と"シス"



ラウマ織り 写真提供：Kyoko Honda

『日本人が来ました！』と上海娘ココが、調理場でエビの皮を剥いている私に告げにきた。思わず『中国人の間違いでは？』と聞いてしまうと、『中国人と日本人を間違える私ではありません』とピシヤリと言われてしまった。私は不覚にも緊張した。開店して半年、日本人の客は初めてだ。寿司、天ぷら、トンカツなら自信は有るが、もし、ややこしいものを注文されたら…。

『何人？』 『一人だけ』 『どんな人？』 『…オバサン』

少し安心した。日本のオジサンの多くはどのような訳か海外に出ると、むずかしい事を言いだす。「三ツ星ホテルなのに、なぜバスタブが無いんだ！」と言って、ツアー・コンダクターを困らせる。北欧をはじめ多くのヨーロッパの国々では、星の数に関係なく、サウナはあってもバスタブが無いホテルが多いのだ。それに比べると、オバサンたちの方が現地への順応が早い。

その初めての日本人客は、オバサンと呼ぶには上品過ぎる中年のご夫人だった。私が『何に致しましょう？お口に合うものが作れば、宜しいのですが』と問うてみた。すると彼女は『え、ポリに本当の日本人！それなら、貴方にお任せしますわ。日本の方が作られるものなら、何でも美味しいはずですか

ら』と言った。昨今、海外の日本料理屋で働く調理人のほとんどは、現地人か他のアジア人なのだ。

それではと、真っ白な長方形の大皿に、地中海産黒マグロ、ノルウエー産キングサーモン、そして当地の平目とスズキ等、築地にも負けない新鮮な魚を使って、刺身と寿司を盛り合わせた。それに、玉ねぎに旬のキノコ、甘エビと帆立を加えたカキ揚げ天ぷらを作り、四角い和紙を敷いた円形の中皿に、真っ赤な楓と黄色の銀杏の季節の葉を添えて盛りつけた。

結果、『海外で頂いた日本料理で、一番美味しかった』と喜んでもらった。日本人客に褒めてもらって、思わず涙がこぼれそうになった。

幸い昼の混雑時は過ぎていて、彼女と話を交わす事ができた。『どちらからお越しに？』『東京からです』『東京はどちらから？』『白金台です』『…なるほど、シロガネーゼ！』と言ってしまった。『いやですわ、その言い方』と彼女は顔をしかめた。私は「芦屋夫人」とか「武蔵野夫人」などと同じように、高級住宅地に住むご夫人を表す、褒め言葉として使ってみたのだ。しかし後に知るのだが、若い人たちは「金持ちと結婚して、白金台に住み、昼間はオシャレなランチとお茶をして、夜な夜な麻布・六本木のクラブに繰り出す、お馬鹿な成金セレブ」のニュアンスを込めて使っているそうだ。私は、知ったかぶりで流行語を口にするのは止めにしよう、と反省した。

彼女にフィンランドに来た目的を聞いてみると、『お隣のラウマ市で、ラウマ織りの勉強をしています』と言った。「ラウマ織り」の言葉を聞いて、私は一度に半世紀前にタイムスリップしてしまった。1965年、初めての欧州旅行から帰宅した時のことだった。私が家族に旅先の土産話を披露すると、繊維会社を営んでいた父が『ほお、フィンランドにまで足を延ばしたんだ！ヘルシンキ・オリンピック（1958）が開かれる迄は、フィンランドといたら“ラウマ織り”しか、私は知らなかったよ』と、言ったのを思い出したのだ。

言葉が途切れてしまった私に、彼女は『ラウマ織りを知っているのですか？』と問うてきた。『待ち針を沢山使うレース網みですよ。父から聞かされました』『いろいろ勉強してみましたが、ラウマ織りほど根気のいるレース編みは、他にありません。フィンランド語の“シス”と言う言葉が身にしみました』

今度は私が『シスの意味をご存知でしたか！？』と聞いた。彼女は『分かったつもりです』と答えた。

私は依然として、シスと言う言葉を漠然としか理解していなかった。この言葉に初めて接したのは、英国の人気作家が書いたフィンランドへの案内書の表紙だった。「サウナ、シベリウス、そしてシス(sisu)」と大きな文字でタイトルが書かれ、その下に「フィンランドで生き残る為の3つのS」との副題が添えられていた。

サウナの章には「どこに行っても食事の前にサウナに招かれる。サウナが苦手では、フィンランドでは生きてはいけない」

シベリウスについては、「どこのパーティに出ても、バック・ミュージックにシベリウスが流れている。“ベートーベンの曲ですか？”などと言ったら、教養を疑われて、ビジネスはまとまらない」と、簡単に説明されていた。

作者は残りの全てのページを割いて、フィンランド人の“シス振り”を、茶化していた。読み終わっても、私にはシスを表現する適切な訳語が浮かんでこなかったし、シスの本当の意味もはっきりとは分からなかった。

そこで、何人もの現地人にシスの意味を聞いてみた。人々は笑いながら『しばらく住めば分かりますよ』と言って答えてくれなかった。ある老人だけが胸を張って、『第二次世界大戦の初期、ロシアの大戦車部隊が東の国境から侵入してきた。かみさん達はウオッカの瓶に揮発油を入れて、布切れで栓をして、せっせと火炎瓶を作った。俺たちは雪に紛れて戦車に近づき、その布栓に火をつけて、戦車にぶつけたんだ。昼夜なくその攻撃を続けたら、ついにロシア軍は退散したんだ。これが、俺たちのシスだよ』と話してくれた。

しかし、それにしても妙だ。老若男女を問わず、フィンランド人の会話にはシスが頻繁に出てくる。たしかに、どこの国にも外国人には分かりにくい言葉がある。例えば日本にも、京都女性の良き風情を表現する、“ほんなり”と言う言葉があるが、外国語に訳すのは難しい。しかし、「ほんなり」のような使用頻度の少ない言葉とは違って、「シス」はフィンランドで生き抜く為に、知っておかねばならない三つの大事の一つに選ばれているのだ。早くその本当の意味を見つけねばならない。

初の日本人客から日本料理を褒めてもらい、調理人として有頂天になっていた私は、すぐそこまで、自分の寿司（スシ）店にも、その「シス」が大きな暗い陰を落とす日がやって来るとは、夢にも想像してはいなかった。

2014年09月22日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（46）】 氷のクリス



世界遺産 ラウマ市の木造旧市街

店の前に大きなワンボックスカーが止まった。後部座席から降りてきたのは半月前に来店した、初めての日本人客、“白金夫人”だった。昼食の時間が終わり、テーブルの片付けをしていた私は、店のドアを開けて彼女を迎え入れた。

『出発前にもう一度だけ、貴男のお寿司と天ぷらが食べたくて』と腕時計を見ながら私に言った。ポリ空港はポリ駅のすぐ裏にあるので、離陸時間ぎりぎりまで街中で過ごせるのだ。

彼女の食事が終わった頃、私は店に出て彼女に話しかけた。『日本へご帰国ですか？』『いいえ、これからイタリアのミラノに移ります』『シロガネーゼからミラネーゼですか！』と、思わず又流行語を使ってしまった。ネットによると、シロガネーゼは元々、ミラノっ子をミラネーゼと呼称するのを振ったらしい。ミラネーゼは、「江戸っ子」や「ニューヨーカー」のように、由緒ある言葉のようだ。

『どうしてまた、ミラノへ』『しばらく住まわせていただいたラウマの旧市街（街ごと世界遺産）を離れ難いのですが、ラウマ織りを一通り習い終えましたので。…ラウマ織りの原点とされる、金糸・銀糸を使った古代レース織りが、今でもミラノに行けば習えると聞いたものですから』『いよいよ、病膏盲に入る、（名医でも治せない重篤な病状に陥った、の意）ですね』『その通りですわ。レース編みに夢中になって、気がついてみたら夫に逃げられていました』と彼女は言った。私は、そのセリフを聞いて、又々タイムスリップしてしまった。

バブル経済絶頂期、私は海外の飲み屋で、酔客と小金を賭けて、よくダーツをやった。いつも負けてばかりいたので、日本に帰国した時、基本から習得しようと考えて、当時の世界チャンピオン小山陽子さんが主催する、「ダーツの会」の門戸を叩いた。出迎えてくれた彼女は、見覚えのある、とびきりの美女だった。

さもありません、兄弟子達によれば、彼女は美人画の岩田専太郎画伯（1901～1974）の晩年時のモデルをしていた。見覚えがあったのは、カラオケの静止画時代、もっぱら岩専が描く小山さんの姿態を見ながら、私達は歌っていたのだ。その彼女が私に言った。『ダーツに夢中になって、気がついてみたら夫に逃げられていました』と。

白金夫人は私に『前回は気になっていたのですが、あの壁際に立っている金髪の娘さんは、どうしても悲しそうな顔をしているのですか？』と、店の看板娘の一人、クリスティーナについてコメントした。

『実は、私も困っているのです。今カウンター席にすわって、チビチビ、ウオッカを飲んでいるあの男が彼女を付け回しているのです。噂によると、彼の家は代々美容院を経営していて、店は嫁任せで、気に入った娘を街で見付けては、昼からこうやって暇をつぶしているんです。“髪結いの亭主”は古今東西、同じ様です』

海外では、日本語は便利だ！本人達を目の前にして、平気で悪口を言える。白金夫人が再度私の店にやって来てくれたのも、日本食だけではなく、日本語が楽しめるからなのだろう。

クリスティーナは、身長が 175 センチ、金髪、碧眼、人口の 7% を占めるスウェーデン系（父親がスウェーデン人）の少女だ。母親がフィンランド人のためフィンランド語が話せる。もし、逆であると、まず子供はフィンランド語が話せない。子供は母親から言葉を教わるのだ。母国語を英語で、**mother tongue**（母の舌）とはよく言ったものだ。フィンランドがスウェーデンから独立してから、220 年経つのに、いまだにこの国の公用語はフィンランド語とスウェーデン語の 2 カ国語なのだ。それほど、フィンランド語は難しいということである。

クリスティーナは市営料理学校から一押しで派遣された少女だけに、美しさは際立っている。料理の腕はあまり上がらず、客あしらいも上手くはないが、「ショーウインドのマネキン」と考えて、それなりに評価していた。しかし、最近は“氷のクリス”と客達から陰で呼ばれるようになってしまっていた。

白金夫人は『フィンランド男のシスも困ったものね！荒っぽいストーカーなら、警察に突き出せるのに』と言った。すると、カウンターの男がクルリと振り向いた。シスもストーカーも日本語ではないから、私達の話の一部がバレてしまったのだ。彼は大急ぎで、ポケットから 30 ユーロを出して、カウンターの上に置いて、つりも取らずに出て行った。そして、壁際のクリスも、頭髪の分け目が見える程にうつむいてしまった。彼女は容姿だけではなく、気心も父親ゆずりなのだろうか。世界最強のフィンランド女性の母親に似ていたら、シス男などは一蹴で退散させられたはずだ。この店を始めて半年しか経っていないというのに、店内で女性から殴られた男は 3 人もいた。その逆はただの一人もいない。

あまり知られていない統計だが、フィンランド人のライフルの所有率はアメリカに次いで 2 番目に高

い。町は深い森に囲まれていて、いつ熊が現れるか分からないからだ。男が女性にしつこくつきまとった結果、大腿にライフル弾を見舞われた男は何人もいるのだ。

一方その逆、男性が女性に付きまとわれた時は、悲劇そのものだ。「会社を辞めました」位ではとても間に合わない。解決方法は4つしか無いと言う。1) 志願して、軍隊に逃げ込む。2) 誰にも行き先を告げず、海外に逃亡する。3) カソリックに改宗して、牧師になる。4) 諦めて、一生を彼女に捧げる。

白金夫人は『ご免なさい、私のミスで常連客を無くしてしまったみたい』と言って、法外な額の食事代をテーブルに置いて、店前に待たしていた車に戻っていった。以後、髪結いの亭主と白金夫人は2度と来店することはなかった。

ロシア戦車部隊を退散させたシスと髪結いの亭主のシスでは、同じシスでも全く趣が異なる。この一件は、私にとって、シスとの交わりの序曲に過ぎなかった。

思えば、クリスティーナを追い回す髪結いの亭主がシスであるなら、レース編みに凝った白金夫人も、ダーツにハマった小山さんも、そして家族を顧みず最北の地で日本レストランを始めてしまった私も、『シス』と陰口を叩かれても仕方の無い人種なのだろうか。

2014年10月20日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（47）】 ところ変われば！



雪上を遊び回る北欧の猫

白金夫人や髪結いの亭主が去った数日後の10月末日、クリスティーナは市営料理学校の教頭に付き添われて店にやってきた。「辞めさせて欲しい」と伝えに来たのだ。彼女が入店してほぼ半年が経過していたので、実習期限はクリアしていた。

クリスティーナは客から“氷のクリス”と呼ばれていたことを知っていたらしく、店にこれ以上の迷惑を掛けたくはないと判断したようだ。付き添いの教頭が鞆から通信簿をテーブルの上に出して、彼女の半年間の実習成果を評価して欲しいと言う。評価方法は簡単で、1から5までのいずれかに丸を付けるだけで良い。教頭は時々来店し、クリスティーナに「スマイル」「スマイル」と声を掛けていたので、彼女の日頃の暗い顔を熟知していた。そこで本人も教頭も、良い評価点は期待していなかった。

私はクリスティーナの暗い顔の原因が、髪結いの亭主のシスであることを知っていたけれど、ことによると二人の間は「訳有り、かも知れない」と勘ぐっていたので、あえて私の方から彼女の悩みを聞こうとはしなかった。彼女からの辞表をもらって、何もしてあげられなかった事が悔やまれた。

私は通信簿の1に丸を付けるか、2に丸を付けるかで迷った。1にしたら、今後の彼女の就職活動に響くであろう。2以上を与えたら、世の中を甘く見るようになってしまうかも知れない。

教頭先生と世間話をして、選択時間を稼いでみたが、その答えは出なかった。判決を待つクリスティーナはピクリともせず、私の握るペンの先を凝視していた。決断を迫られた私の心臓は、鼓動が自覚できる程に激しく伸縮を繰り返していた。その息苦しさに堪え兼ねて、私はペン先を丸く動かした。

気がついてみると、私は5に丸を付けていた。教頭はビックリした。私も自分にビックリした。一瞬後、氷のクリスの顔から大輪のバラのような笑顔が浮かび上がった。本当に美しい少女だと私は思った。

ミゾレ混じりの小雪が降る中、教頭はクリスティーナの肩を抱きながら帰って行った。それを見送りながら、大嘘をついてしまった私は自己嫌悪に陥ってしまった。

しかし、クリスティーナが店から居なくなってみると、いつも壁際に置かれていたミロのビーナスの立像が忽然と消えてしまったかのように、店の景色は大きく劣化してしまっていた。私が愛読するフランスの女流作家、カトリーヌ・アルレーの本の中に「夫の真の価値は、彼を失ってから初めて知りました」とある。私もクリスティーナの価値を、彼女が店を辞めてから知った思いがして、まんざら私の採点は間違っていなかったかも知れない、と自分を慰めた。

この頃は既に、我が家の庭から全ての獣人が南の地に去ってしまっていた。店が終わって深夜に帰宅しても、私を待つものなどは居ない。ところが、本格的な雪が降った翌日の万聖節（11月1日）の晩は違った。玄関を開けて、革のジャケットを脱ぎながら電灯をつけると、空間をごく小さな物体が飛来して、私の肩に停まった。セータの上で目をキョロキョロ動かしていたのは、この時期では見ることはない一匹のハエだった。日本でなら当然払い落とすはずなのに、どういう訳か胸が熱くなって、『本当に生きていたのか？おチビさん』と声をかけた。神仏に縁の薄い私にも、万の神の誰かがお恵みを与えて下さったように思えた。

そういえば、最初に大西洋を飛行機で横断したリンドバークが、長時間眠らずに巴里に到着出来たのは、ダッシュボードの上にいる、一匹のハエと会話をしながら操縦したからだ、と言われている。

私はキッチン・テーブルの上に、ジャムを塗ったクラッカーを一枚置いて、チビの餌とした。その夜から、帰宅すると、毎晩チビは玄関で私を迎えてくれた。ハエの寿命を私は知らないが、チビは翌春、庭に獣人家族が戻ってくるまで生きながらえて私を慰めてくれた。以後私はハエを殺したことは無い。

私はチビのことを家内へのメールに書いた。その返事は「鬱病にならないうちに、ペットでもお飼いなさい」と言うものだった。

ペットと言えば犬か猫である。私はどちらも大好きだが、留守がちな私にとって、犬は情が深過ぎる。猫にしよう！と決めて、次の休みにペットショップに行くことにした。しかし考えてみると、犬の祖先は狼、猫の祖先はライオンである。当然、犬は寒さに強いが、アフリカ由来の猫はこの寒い北欧で生きていけるのであろうか？いつも室内にいるのであれば、可哀想だ。大きな疑問が湧いてしまった。

猫は不思議な生物だ。種は普通、大きく成長することによって、生存競争に勝ち抜く進化の道を進むのだが、猫は逆に小型化することによって繁栄した。一説によれば、文明の勃興により、人は穀物を蓄える術を知った。ところが、それをネズミが食べてしまう。エジプトでは、ライオンがやってくるとネズミは逃げってしまう事に人は気がついた。そこで、やさしそうで小さめなライオンを見つけては手なずけて、交配させる事を繰り返した。段々とライオンは小さく大人しくなって、猫になったという。

次の休日、とにかくペットショップに行ってみた。ショップオーナーの案内で裏庭に行ってみると、その日の朝に積もった雪の上で猫達が駆け回っていた。

前述の進化論が正しければ、北欧では同様に、雪をあまり苦しめない猫を見つけては交配させ、雪の好きな猫を造り出した、ということになる。雪が降ったら、猫は炬燵で丸くなる、とは限らないのだ。

私には「これが真理だ」とか「これは定理だから証明する必要は無い」などと言う、断言癖がある。雪上を遊び回る北欧の猫を見て、軽率に断言などすべきではない、と反省した。

ところ変われば、品は変わるのだ。だから、人は旅に魅せられる。

2014年11月17日

【世界最北の日本レストランーフィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（48）】 心の遺産



手動の紡毛機

雪の上を楽しそうに駆け回る猫たちを見て、私は猫を飼うことに決めた。ペットショップの店長にその旨を伝えると、奥の部屋に通された。沢山の犬小屋がずらりと並び、その先に小さめの猫小屋が数個重ねられていた。

やはり寒さに強い犬の方が圧倒的に多く売られている。他にも理由があった。店長は「猫を飼うためには玄関又は台所の扉の下部に両側から開閉出来る小さな猫用の出入り口を作らねばなりません」と言った。極寒の地であるから、優れた断熱が住宅の絶対条件だ。開閉扉もそれ相応のものでなくてはならない。日曜大工ではとても出来そうにない。私の事務所兼自宅は元々幼稚園として建てられたものなので、玄関や台所の扉は厚く頑丈にできている。部屋数も非常に多く、猫のために常時ドアを空けておく訳にはいかない。

さてどうしたものかと考えていると、私のレストランに時々訪れる老女がやって来た。彼女は猫小屋の扉を慣れた手つきで開けて、猫を取り出し、胸に抱き寄せた。彼女は私に『猫の寿命は15歳ほどですが、私はあと何年生きられましょうか。私が死んだら、猫はどうなるでしょう。それを想うと猫を飼うことは出来ません。だから日に一度はこのお店に来て、猫と過ごすのです』と言う。私も、いつまでフィンランドに居られるか分からない身だ。「犬は人に添い、猫は家に懐く」と言う。猫を日本に連れて帰るのは可哀想だ。

私は彼女に『犬はお嫌いなのですか？』と問うてみた。『いいえ、大好きです。でも、この年になると犬は抱けません。温もりをもらえるのは猫からだけです』といいながら、彼女は大きめのハンドバッグからミトンの手袋を取り出した。『これは5年前まで飼っていた犬の毛で編みました』と言う。

よく聞いてみると、フィンランドでは、どこの町にも毛糸を紡ぐ店があって、そこへ犬の毛を持って

行くと、適量の羊毛と混紡されて、毛糸の束になって戻ってくる。その毛糸で手袋や靴下に編むと、格好なオリジナル・ギフトとなって、友人達から喜ばれるそう。そういえば私も10年程前、トウミネン教授の奥様より『飼い犬の毛で編みました』と言って靴下をもらった事がある。今でも冬場はそのソックスを毎日のように履いているが、穴も空いておらず、まだ当分使えそう。普通の靴下より遥かに丈夫で暖かい。

私は猫を飼うかどうかより、その商売の方に興味を持ってしまった。日本でも犬はブームだ。トリミングショップや動物病院と組めば、犬の毛はいくらでも集まるだろう。出来上がった毛糸で編まれた靴下や手袋は、並の物では満足しない日本人同士での、最高の贈り物になるに違いない。町の数だけフランチャイズ店が出来れば、スタバやマックに負けない一大チェーンが造れるではないか。(実はその翌年、この計画を実行すべく日本に一時帰国して、東京農工大学の小金井キャンパスを訪ねて手動機による紡毛方法を教わった。その後、何件かのペットショップのオーナーを訪ねて、ビジネス化を真剣に検討してみた。しかしその結果は、「温暖期の長い日本で、商売が成立するのはクリスマスとバレンタインの前後だけで、ビジネスとしては成立しない」という結論が出てしまった。)

私は、この老女がいつまでも猫を抱き、猫の方も気持ち良さそうに抱かれ続け、そして、決して買い手になることのないこの老女を、店長はいつも優しく見守っている。日本ではまず見られないこの光景を見て、フィンランド人が持つ一大特徴である“シス”の正体を見破った思いがした。

フィンランドの面積は日本とほぼ同じで、人口は約二十分の一だ。日本と違い平坦な地が多い為、人口は拡散している。二三の都市部を除けば、国中が過疎地である。そして冬は、全ての土壤が氷結する。生き抜ける植物も昆虫も限られてしまう。従って、それらに依存する動物の種も少ない。即ち、生態系全体での個の数が、温暖な国と比べると、著しく少ないのだ。その結果、個と個の距離が離れてしまった。

私がボリの町に事務所を開いて、最初に驚いたのは、私がコンピュータで仕事をしていると、秘書や友人がその画面を覗き込む事だ。手紙を書いていると、「誰に書いているの?」と聞かれる。アメリカや日本なら「アンタには関係ないよ!」と怒りだすところだ。フィンランドに定住して分かったのだが、彼らの覗き見行為は、相手に対して「親しみを示そうとする」行為、もしくは「私はあなたに興味を持っています」という一種の愛情表現なのである。

個と個の距離が離れていると、「かまって欲しい」、「かまってあげたい」という相互心理が生じるのだ。日本でも登山をしていると、たまにすれ違う赤の他人に“こんにちは!”と声を掛けるが、その心理状況に似ている。

個と個の距離が近い温暖地の住人は、少しでも長い距離を個と個の間に保とうとする。その行為を正当化するために「プライバシーの侵害」というもっともらしい言葉や法規を編み出したのだ。

ある日私はトウミネン教授に「シスを英文で簡明に著して下さい」と頼んだ。彼は「少し考えさせてくれ」と言って、その翌日に「誰もが不可能と思える事でも、根気よく何回も繰り返し挑戦して、最後には目的を達成してしまうこと」と書かれた小さなメモをくれた。私は「雨だれ石をも穿つ」という日本の格言を思い出した。

又私は、フィンランドが日本と自殺率の高さを競っている事も、シスに関係があると気づき始めていた。この国では老後の心配がなく、誰もが快適な暮らしを保証されている。自殺が禁じられているキリスト教の下に暮らす事も、暗くて寒い冬が長く続く事も、他の北欧諸国と変わりがない。それなのになぜフィンランド人だけが…？

とどのつまりは、シスに行き着く。文字によって明らかにされたフィンランドの歴史の長さを千年とすると、この国はその3分の2以上の720余年を隣国スウェーデンとロシアの統治下におかれた。にもかかわらずその間、民族の文化と誇り、そしてアイデンティティーを失わなかった。シスはその世界史上稀有なる歴史が残した「心の遺産」であろう。

このように、より熱い心身の温もりと、濃厚な人間関係をもたらしたシスであるが、その一方、もしその対象となる相手に裏切られた場合、当然、その反動も深く大きいものになる。

私が集めたシスに関する知識を良い方から悪い方に並べると次のようになる。

「思いやりがある」「お人好し」「代償を求めない」「世話好き」「辛抱強い」「諦めない」「しつこい」「相手を束縛する」「執念深い」「嫉妬深い」「命がけ・・・鬱・・・自殺」

江戸末期から流行った都々逸の中で、今でも愛唱される唄に、

人の女房と枯れ木の枝は、登り詰めたら命がけ

というのがある。「人の女房」を「スオミ（フィンランド人の意）の女性」と置き換えても、何ら違和感を覚えない。

2014年12月15日

【世界最北の日本レストランーフィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（49）】 野性のなごり



我家の庭もモノクロームの世界

11月も末ともなると、まだ午後4時というのに、町外れにあるペットショップの外は真っ暗になっていた。それでも、前夜に積った雪のお陰で、数メートル間隔に並んだ街灯の下には、淡い黄色の円が描かれていた。この時期、北欧ではミゾレから雪に変わり、暗さは多少和らぐのだが、電灯のつかぬ昼間は、色が消えてモノクロームの世界に変わる。

この頃降った雪は、遅い春の到来迄、根雪となってしまう。日本なら「雪見酒」と洒落てもいられようが、来る日も来る日も暗い雪の日が続くと、本気で酒の力を借りざるをえず、つつい酒浸りの日が続いてしまう。統計によると、北欧の北極圏に住む遊牧民「サーメ」の一人当たりのアルコール消費量が世界一の事だが、それを非難することは出来ない。（それに準じて私の深酒も許して欲しいものだ）

夜、寝る前に飲む酒をナイトキャップと呼ぶ。私はこれが無いと眠る事は出来ない。ナイトキャップはビールやワインではなく、アルコール度の強いウォッカかブランデーでなくてはならない。滅多には起こらない事だが、この日そのどちらの酒も切らしてしまっていた。老女に諭されて、買うつもりの猫を諦めて、手ぶらで帰って来たこの日の晩は、寂しさもひとしおだった。

フィンランドの酒屋は夜7時で閉店してしまう。酒を飲みたければ、パブに行くしかない。しかし、夕食でワインを飲んだ後だけに、車を運転する訳にもいかず、かといって街まで歩くのも億劫だ。

私の家のそばにプーバリ（木の酒場）と言う名のパブがある。話は遡るが、私がこの自宅兼事務所をオーナーのキモさんから借り受けた時、キモさんから『ポリはおおむね安全な町だが、貴男の家のそばに在るプーバリだけには行ってはいけません。それだけは約束して下さい』と言われて、私は『Kulla (Yesの意)』と答えた。他の人ならともかく、大恩人のキモさんとの約束だけは簡単に反古にするわけにはいかない。

「そうだ、私には酒類取扱い免許がある。プーバリの入り口でオーナーを呼び出し、ウォッカを一瓶分けてもらえば良い」と勝手な理屈を編み出して、プーバリの扉を開けてしまった。店は想像していた丸太作りの暗い酒場とは全く違っていた。壁も天井も、ターコイス・ブルーの漆喰調のペイントで塗られ、黄色のカーテンやベイジュのカーペットとよく調和して、パブというよりはサロンと呼ばれるに相応しい店だった。調度品や野暮な装飾も無い事が店を一層美しくしていた。客達の風体をクリカラモンモンのお兄さん達と想像していたが、他の店の客達と何の変わりもなく、ほとんどがカップルであった。レジに座っていた男を見て私は驚いた。週に一度は私の店に来て、寿司と豚カツを食べて行く常連客で、皆からトニーと呼ばれる中年男だった。私が酒を切らしてしまった事を話すと、『私の個人用のウォッカがあるので、一本お持ちなさい』と言って、私からの支払いを断った。市の条例で、客に只で酒を出す事は禁じられているので、「私の個人用」と言ってくれたのだ。しかし、私の店の常連客から逆に施しを受けては、只で帰る訳には行かなくなった。

そこで私は上物のブランデーを一杯だけ、店内で飲んで行く事にした。カウンターは生憎と満席だったので、仕方なく4人掛けのテーブルに座った。テーブルを一人で占拠するのは居心地が良いものではなかったが、すぐにほろ酔いの背の高い女性がテーブル越しにやってきて、『貴男のこと知っている。新聞で読んだ』といいながら私の前に座った。酔って話しかけてくる女性はあばずれが相場だ。ましてや、ここはプーバリだ。緩みかかった気分を引き締め直した。しかし、彼女をよく見ると品のある顔立ちで、なかなかの美人だ。年の頃は40と見た。白のセーターに、刺繍を施した薄水色のジーンズのヴェストを羽織って、センスも悪くなかった。上手くはないが、一所懸命英語で新聞記事の感想や日本についての知識を披露した。『新幹線は世界一速い。東京タワーはエッフェル塔より高い。地下鉄は便利・・・いつか東京に行ってみよう』と少女のように語ってくれた。

話は盛り上がり、私は彼女にブランデーを振る舞った。「こんな店だったら、もっと早くから来ればよかった」と思うようになった。

30分程経ったであろうか、カウンターに座って飲んでいた若者が彼女の後ろにやって来て、早口で彼女に何かを言った。おそらく、すぐに席に戻って来ると思っていた彼女が、私と長話になったので、連れ戻しに来たのだろう。

すると、彼女は腰を浮かせ、振り向きざまに、するどいパンチを放った。回転力の加わった彼女のフックは若者の顔面を見事にとらえた。青年はモンドリ打って、後方のカウンター席に倒れ込んだ。腰高

のスツールに座っていた男女が、音を立てて将棋倒しになった。ひっくり返った男が、そばに立っていた男の足を払った。スツールから落ちた女は、空になってしまったジョッキーを天井に向かって投げた。さっきまで静かだったプーバリが一瞬にして西部劇の乱闘場面と化した。私はウォッカの瓶を抱えて一目散に店の外に出ようとした。

しかし、入り口のそばで争っていた女性が放った逆手打ちが、私の右頬を激しく叩いた。ブランデーのせいかな、興奮していたためか、痛みは覚えなかった。しかし、口内でギリッと嫌な音がした。

翌朝、母譲りの丈夫な歯の一本がぐらぐらになっていた。滅多に行かない歯医者に行くはめになった。歯医者さんは大柄な中年男だった。私がプーバリの話をすると、『あの店は乱闘騒ぎが売りなんですよ。あそこで前歯を折った客がしょっちゅううちにやってきます』

なるほど、プーバリには調度品や装飾品が一切置かれていなかった理由が分かった。

欧州人は元来狩猟民族だ。生きるために毎日、獣と戦ったのだ。紳士の国といわれる英国は、今もフーリガンの本場である。隣国のスウェーデンやノルウェー人は、戦を生業としたバイキングの末裔だ。いまだ欧米人には、野性のなごりが潜んでいるのだ。

恩人のキモさんとの約束を破った報いを、直ちに受けてしまった私は、診察台の上で大きく口を開けながら、「天罰覲面」「天網恢々粗にして漏らさず（神様が張った監視の網は、大雑把に見えるが、小さな罪も決して見逃さない、の意）」といった古い戒めの諺ばかりを想いだしていた。

2015年01月19日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（50）】
蜘蛛の糸



皆が作ってくれたクリスマスツリー

パブでの乱闘に巻き込まれた結果、ぐらぐらになってしまった一本の奥歯は、お医者様の治療のききも無く、数日後の夜更けに抜け落ちてしまった。日本から送られて来た、大好物のゲンコツ煎餅を寝酒の肴にしたのが致命的だった。

「下の歯が抜けたら屋根に投げろ」と日本では言われるが、雪の降る深夜にいったいどうしたら良いものか、と私はいつもテーブル代りに使う、キッチンの出窓の前で思案していた。その時、出窓に沿って吊るされている白いカーテンの最下部をゆっくりと動く、黒っぽい小さな点が見えた。目を近づけると、ネズミ色をした小さな一匹の蜘蛛であった。

日本では夜の蜘蛛は泥棒を呼ぶと言われ、不吉なものとされている。ましてや、歯が抜けてしまった直後である。本来の私なら、ティッシュで潰して、ゴミ箱に投げ捨てるどころだ。しかし極寒の夜、この大きな家の中で生きているものは、自分と一匹のハエだけだと思っていた私は、その他にも生命体が存在していた事に驚かされた。そして同時に、芥川の「蜘蛛の糸」を思い出した。

生涯に一度だけ「一匹の蜘蛛を助けた」という極悪人の善行をお思い出したお釈迦様は、蜘蛛の糸で彼を地獄池から天国に引き揚げようとした逸話だ。

冬になり人通りの絶えたポリの街で、私のレストランへ来る客は固定客のみに激減し、経営は夜のパブに来る酔客で辛くもなりたっている。いろいろ言い繕ってはみても、今の私はオーナーシェフではなく、呑兵衛の居酒屋のおやじでしかない。到底天国には行けそうにない。しかし、この蜘蛛さえ助ければ、天国に行けるかもしれない、と考えた。

私は、そっと右手の中指を蜘蛛の前に近づけてみた。数秒後、蜘蛛は私の指に乗り移ってきた。私を味方だと判断したのだろう。そして、ゆっくりと手の平に向かって這い寄ってきた。手の平の窪みでしばらく散歩した後、又ゆっくりと中指を伝ってカーテンに向かった。去って行く蜘蛛に小さな声で『ありがとう、又来いよ』と話しかけた。私の言葉を受けてか、蜘蛛は中指の先端でしばらく佇み、そしてゆっくりとカーテンに戻って行った。その間私は、蜘蛛と人間は心が通じ合うのだ、と確信した。だからこそお釈迦様は数多の生物の中から蜘蛛をもって人を救おうとしたのだ。

私は家内に、この蜘蛛の話メールで伝えた。すると、「ハエの次は蜘蛛ですか！猫も飼えないのなら、クリスマスツリーでも飾って、鬱を晴らしてはいかがですか？」との返事が戻ってきた。

なるほど…。私はまず縦の木の入手方法を考えてみた。置く場所はリビングが良い。しかしそこは、かつて幼稚園の集会場であっただけに、非常に広く天井も高い。よってクリスマスツリーは小さくなくてはならない。しかし、私の車では大きな木は運べない。

翌日、建築会社を経営するアンティ君に電話をした。すぐに、彼はピックアップ・トラックにノコギリを積んでやってきた。森の多くは国有林で、無断で木を切ることは禁じられているのだが、小さな間伐材を切るのは、森の繁茂を防ぐ効果があるので、大目に見られている。

次の問題は飾り付けだ。翌日常連客の女性に相談してみた。彼女は『私に任せて』と言って、携帯でメールを打ち始めた。

店が休みの翌月曜日、大勢の女性達がいろいろな飾りを持って家にやってきて、アッと言う間に立派なクリスマスツリーが出来上がった。私の子供の時代のクリスマスツリーといえば、金や銀紙で出来た星、赤と緑のセロファンから作られたモール、それにピンポン球の大きさのガラス玉だった。しかし今では、夏みかんほどの大きさの色とりどりのガラスボールやLED電球がファンダンに使われている。

リビングは一度に明るくなり、私の心も華やかできた。北欧人にとって、クリスマスツリーは、寒くて暗い冬をやりすごす重要な手段である事を改めて知らされた。

深夜に店から帰ると、玄関でいつものように一匹のハエが出迎えてくれて、そしてリビングではタイマーでセットされたクリスマスツリーが私の帰りを待っていてくれる。グラスにブランデーを満たしてから、半時程ツリーの前のソファに座る。数色のLEDが放つ光が、色とりどりのガラスボールに反射されて、光のシャワーとなって私を包んでくれる。それ迄とは全く違う幸せな夜を過ごせるようになって

た。ブランデーグラスを揺らすと琥珀色の水面がキラキラと光を放つ。その光の一粒一粒からポリの人たちの友愛や、イエス様の慈悲が感じられる。

お釈迦様がイエス様に依頼して、あの小さな蜘蛛を差し向けられて、北欧の厳寒を乗り切れるように私を励まされたに違いなかった。

2015年02月16日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（51）】 歴史の生き証人として



2月下旬、霧氷に凍てつく白樺

一年で一番寒いとされる1月20日を、日本では24節気の一つ「大寒」と呼んでいるが、ここポリの街が一番寒くなるのは、2月の下旬である。日照時間が延び、モノトーンの世界を脱して青空が戻ってくるのだが、この時期に街を横切るコケマキ川に張る氷が、最も厚くなるからだ。北海道の網走町で、オホーツク海からくる流氷が大量に接岸する2月下旬が、一番寒くなるのと同様だ。

この最寒期には、霧氷が葉を落とした庭の白樺の小枝を被覆する。蔵王などの山岳地で見られる樹氷も、霧氷と同様の寒冷現象であるが、樹氷はポッチャリと膨らんで、見る者に暖かさすら感じさせるが、霧氷は痩せていて、見るからに寒々しい。

この頃ポリでは、かなりの数のレストランが廃業し、売りに出される。もう少し待つて春になれば、レストランの売上げは急速に回復するのだが、資金繰りに窮してしまったのか、もしくは前秋に閉店した店舗を再開する為の、人事の目処が立たなかったのであろう。

だからといって、真冬のポリの客商売が全滅してしまうわけではない。夜半、店頭で長蛇の列ができる店が何軒かある。それらは皆、ディスコ（日本では、昔ダンスホール、今クラブ）である。日本のクラブと違う点は、客のほとんどがカップルでは無い事。そして、若者が集まるディスコの他に、中高年専門のディスコがある事だ。どちらも、来店目的はその夜、又は生涯の伴侶を見つけることだ。

私の店ではこの時期、昼のレストランの売上げより、夜のパブの売上げの方が遥かに勝る。己を顧みればすぐに分かることだが、飲酒欲は食欲よりも遥かに強いということだ。しかし、そのパブもディスコには脱帽だ。子孫を残そうとする本能は、何にもまして強いということなのか。そういえば、マグロやウナギなど多くの海洋生物は、子孫を残すために太平洋を周回すると言われる。

しからば、レストランからディスコに転業すれば良いではないか、と思うかも知れないが、そうは行かない。新規にディスコをオープンする事はポリの街では不可能である。それには歴史の経緯がある。

1960年代の後半、ベトナム戦争が泥沼化したころから、若者達を中心に厭戦気分が台頭し、Love & Peace を御旗に自然回帰運動が旋風して、その結果ヒッピー文化が先進諸国を席卷した。中でも隣国のスウェーデンはフリー・セックスとポルノグラフィのメッカとされて、ヌーディスト村やヌーディスト・ビーチが各地に出現した。それを規制する法の制定や発布にも手間取り、客商売においては「何でもあり」の時代に突入した。

その十数年後、ポルノ文化にも飽きてきた世間の風潮に呼応して、監督官庁は法律・条例を整備し、徐々に厳格化していった。先ずは、過激な性風俗店から手をつけて、次第に穏当な風俗店をも閉店に追い込んでいった。その中で、最も巧みに法と妥協したディスコだけが、今の世まで生き延びることが出来たのだ。よって、この歴史に逆行してディスコの新店を開業することは、ポリの街では、針の穴にラクダを通すほどに難しい、と言われている。

たまたまスウェーデンで青春時代を過ごし、その後も日欧間を行き来している私は、その歴史の生き証人としてこの文章を書いている。今から思えばヒッピー文化は途方もなくワイルドなカルチャーで、当時の欧米のヒッピー団は「過激な性のカルト集団」と呼ぶに相応しかった。しかしその頃は、自他ともに当たり前だと思っていたのだから、人間の判断力や価値観、観念といったものは、移ろい易く、信頼に値するものではない。

さて、話をポリの中老年向けディスコに戻そう。客は日頃はおとなしく楚々とした熟男熟女である。しかしここに来ると、目をギラつかせたハンター達に変身する。大多数の客はバツイチかそれ以上のキャリアであろう。伴侶がいたら、これらの店に来ることは許されないはずだ。

北欧には見合結婚の慣習は無いし、上限無しの累進課税の為、金づくでハントする金持ちも居ない。自力、実力、押しの一手で、獲物を捕らえるしか術が無いのである。

清少納言の枕草子・25段に「すさまじきもの」がある。すさまじき、は現代とはニュアンスを異にし、「興ざめ」とか「鼻白む思い」と言う感じだ。

不敬千万ではあるが、私は少納言の名文の末尾に、北欧における「すさまじきもの」を加筆してみた。

すさまじきもの ひる吠える犬。春の網代。三、四月の紅梅の衣… “真夏の白ウサギ。湖上に舞うスズメ。ディスコで踊る分別盛り（中老年の意）”

2015年03月16日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（52）】 黄色いマフラー



スノーモービルで遊ぶ筆者

3月に入ると高緯度にある北欧では、日照時間が加速度的に長くなる。「昼の目ほど」日が延びると言われる日本とは、大いに趣を異にする。冬至は真っ暗、夏至は白夜と言う極端から極端への移行によって生じる、天体メカニズムである。地球の自転軸が太陽を周回する公転面に対して、約23.4度傾いている事が主たる原因だが、地球の公転軌道が円ではなくて楕円である事から、私たちが習った2次元数学では、正確な日照時間の伸縮を算出することはむずかしい。とにかく春分が近づくにつれて、北欧の春は大股でやってくるのだ。

この時期、人々は青空の下、最後の冬スポーツを楽しむ。丘陵地ではノルディック・スキーを履いてクロスカントリーを、凍った湖上ではスノーモービルを疾走させる。私もポリ郊外の湖畔にあるキモさんの別荘に招かれて、彼の子や孫達とウインタースポーツを楽しんだ。

この年の北欧の冬は暖冬と言われ、特にここ数日はボスニア湾を超えて来る南西の暖かい風が心地よかった。いよいよ私の店にも客が戻って来る。“春や春、春南方のローマンス”というサイレント映画の活弁士の名文句が思わず口をつく。

しかし、このポカポカ陽気に騙されてはいけない。私は危うく大事に遭遇しそうになった。それは、ポリの市営アリーナでシーズン最後のアイスホッケー戦が行われた晩のことである。この試合に勝ったポリチームの主力である友人のファンドル選手が、仲間と大勢のファンを引き連れて店に来てくれた。店頭の照明を消し、閉店したことにして、私も祝いのパーティーに参加して大いに飲んだ。店のかたづけをして、帰宅しようとタクシー・センターに電話をしたが、何回かけても話し中だった。無理はない。99台しか無いこの町のタクシーに、多くのサッカーファンが乗り込もうとしているのだ。それではと、数ブロック先のタクシー乗り場に行ってみたが、そこにもタクシー待ちの長い列ができていた。

丁度この時、南西風が北風が変わって、街は一挙に北極気候に飲み込まれてしまった。一度に酔いが醒めて、私は帽子と手袋を探したが、ポケットにもバッグにも入っていなかった。店まではさして遠く

はないのだが、取りに戻ったら、列の一番後ろに並びかえさねばならない。

耳たぶが痛くなりはじめた。まずい、下手をすると霜焼け程度では済まなくなる。重い凍傷を負えば、耳を切除しなければ……。この国で「耳無し芳一」にはなりたくない。耳を無くしたら、眼鏡はどう掛けたら良いのか…？そこで、手で耳を覆うことにした。するとたちまち指が猛烈に痛くなってきた。耳を無くすか、指を無くすかの選択に迫られた。

もし指を無くしたら、明日の寿司が握れない。私は、両手をポケットに戻した。その時、すぐ後ろに並んでいた背の高い女性が、地面に置いていた小型の旅行鞆を開けて、黄色いマフラーを取り出して、私に手渡してくれた。

ファッションは繰り返される。かつて大流行した丈の非常に長いマフラーが又戻って来たのだ。お陰で、私は顔全体をぐるぐる巻きに出来た。この長いマフラーは当地では“イサドラのマフラー”と呼ばれている。娘がこの長いマフラーをして外出しようとする、母親は“気をつけるのよ、イサドラみたいににならないように！”と注意する。イサドラとは、スパイのマタハリと並んで、ヨーロッパが20世紀に生んだ女性レジェンドの第一人者である。簡単に彼女を紹介しよう。

彼女の名はイサドラ・ダンカン。1877年にサンフランシスコで生まれ、1927年に没する。死後、その数奇な運命から「悲劇の舞姫」「美の化身」「バレ界の革命児」等多くの形容詞が冠せられた。彼女は米国から欧州に移り住み、バレ界の本場であったパリ、ウイーンやサンクトペテルブルクで異色のバレ界を披露して大人気を博した。多くの有名人、ロシアの詩人セルゲイ・エセーニンやドイツの作曲家ジークフリート・ワグナー（祖父はフランツ・リスト、父はリヤハルト・ワグナー）等と多くの浮き名も流した。ニースでの舞台の後、沢山のファンに見送られながらイタリアの名車ブガッティに乗って演舞場を後にした。発車直後、長いマフラーの先がタイヤのスポークに絡まってしまい、停車した時には、イサドラの千切れた首が、50メートルも後ろで見送るファン達の前に転がった。一世紀近く前の話だが、北欧では今でもよく、言の葉にのぼる。

日本人は忘れ上手だ。「いやな話は忘れましょう！」「昔の事は水に流して、前に進みましょう！」が日本人の正論であり、徳でもある。北欧人はそうでは無い。私が、『フィンランドでも、中世には魔女狩りが行われましたよね！』と言うと、彼らは顔を曇らせて、『ご免なさい』と自分が犯した罪のように謝る。

ロシアン・クラブの会合で、『ロシアの多くの地は13世紀の中頃から15世紀の終盤までの250年余、タタール（モンゴルの一派）に占領されて、残忍な扱いを受けましたね！』と話すと、『“タタールの軛（くびき）”は、決して忘れない恥辱です』と、まるで自分の身に起こった事のように悔しがらる。

これは外交上、日本人が心せねばならぬ重要ポイントである。私の耳と指を守ってくれた黄色いマフラーの顛末は次号に譲るとして、この章は次の言葉で結びたい。

70年程度しか経っていない話は、決して忘れてはもらえない。それが、残念ながら現時点でのグローバル・スタンダードなのだ。

2015年04月13日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（53）】 反発力と方向性



長尺の黄色いマフラー

「待ち人来たらず」という言葉がある。私が見たどの辞書にも、「待つ相手が来ない意」と簡単にしか記されていない。しかし、私の人生観からすると、この言葉は「待っている時は、得てして人や返事は来ないものだ。諦めてしまったり、忘れた時にやってくるのだ」という意味に思えてならない。

あのアイスホッケーの試合が行われた晩、私の耳と指を凍傷から救ってくれた黄色いマフラーは、いい香りがして、タクシー待ちをする私の心まで甘く暖かくしてくれた。マフラーの持ち主の背の高い女性は、フード付きのダウンジャケットを着て、毛足の長いイヤーマフもしていたので顔はさだかには見えなかったが、小さな旅行バッグを持っていた事や、美しく尖った顎の型からして、スウェーデン女性だと見当をつけた。

タクシーが来て、マフラーを彼女に返そうとして、うろ覚えのスウェーデン語で礼を述べたが、返事はなかった。その代わりに、右手の5本の指をいっばいに開いて、そのまま持っていなさい、という仕草をした。私は胸のポケットから、レストランの住所が入った名刺を彼女に渡して『いつか来て下さい。日本食をご馳走します』と今度は英語で礼を述べた。やはり返事はなかったが、名刺は受け取ってくれた。

数日後、私は調度品の買い物でヘルシンキに行った時、デパートの一階で、あのいい香りを嗅いだ。その香りはまぎれも無く、スウェーデン製の香水「イサドラ」の売り場からのものだった。イサドラは香水だけではなく、アパレルやバッグのブランドにもなっている。バッグ売り場に行ってみると、真っ白い地に ISADORA の名が大きく入ったスポーツバッグが売られていた。迷わず私はそれを購入した。ビニール製なので価格はそれほど高くは無かった。これなら、気軽にあの女性も受け取ってくれるだろう。

私はポリに戻ると早速、店のクローク・ルームの帽子掛けに黄色いマフラーを吊り下げて、その上の棚にイサドラのバッグを置いて、彼女の来店を待った。映画「幸福の黄色いハンカチ」の主人公になった気分だ。しかし、待ち人来たらず。本格的な春が訪れた5月の初旬に、マフラーをバッグに入れて、私のロッカーに移した。

5月に入ると、期待通りに客の数は急に増えた。しかも日本人客も徐々に来るようになった。(当連載の44号で書いた)世界初の高レベル放射性廃棄物の地下処理場“オンカロ”プロジェクトが本格的に動き始めたからだ。日本人客の殆どは、紺のスーツを来た、政・官や電力会社の人達であった。この頃にはもう、日本人客だからといって、緊張することは無くなっていた。

彼らはポリ空港が中央駅のすぐ裏にあり、しかもチェックインに時間がかからない事を知って、私の店に来て、寿司や天ぷらを食べながら時間をつぶすのだ。世間話の後、彼らの多くが『お寿司屋さんに質問する事ではないけれど、何故フィンランドの教育レベルは世界のトップなのかね?』と聞いて来る。

職業で相手を値踏みする人を好きにはなれない。私は『教育は手品じゃないんですから、種や仕掛などはありませんよ。知りたければ先ず、この国の歴史をしっかりと学んで下さい』とすげなく答える事している。

しかしこの日の客は違っていた。『私はフリーのルポライターです。出版社の依頼でフィンランドの教育都市と言われる、ユヴァスキュラとオウルで取材をしてきましたが、別段の違いを見つける事ができませんでした。この国の歴史は帰国してから勉強しますが、もう少し教えてくれませんか。手ぶらで帰ったら次の仕事がもらえません』と言う。

私は『フィンランドの歴史を勉強するなら、ついでにユダヤ民族の歴史も勉強して下さい。ユダヤ人の世界の総人口はたった1350万人です。世界の人口を50億人とすると3%にも満たません。そのユダヤ人がもらったノーベル賞の数は、全体の4分の1を占めています。アインシュタインやサミュエルソンをはじめ、多くの優秀な科学者や経済学者が排出されている事はあなたもご存知でしょう』

『フィンランド人やユダヤ人は優秀な民族ということですか?』

『民族の持つDNAの差で、体型の違いや、病理疾患などの発症率に差は出ています。しかし、“脳の持つ潜在能力の数%しか、人間は使っていない”と言われることから考えると、民族の優秀性は遺伝によるものではないと思います』

『それでは、一体何が両民族の教育レベルを高めたのですか?』

『“モーゼのエジプト脱出”以来、三千余年、ユダヤ民族は世界中で迫害を受け続けました。フィンラ

ンドも歴史のほとんどを隣国のロシアやスウェーデンからいじめられました。要は反発力だと思います。強く叩かれたボールは遠くに飛びます』

『ジプシーやアーミッシュ等、長い間差別を受けた民族や宗派もありますよね。その人たちとはどう違うのですか？』

『長い視点では、親から子、子から孫への家庭教育の差からだと思いますが、現代のフィンランドに焦点を絞れば、ボールの飛ぶ方向は、国の予算配分の仕方によって決められてしまうように思えます。アメリカでは国際安全保障に、中国では国内の治安と軍事拡大に、新興国ではインフラに重点が置かれています。日本ではバラマキ型の予算配分をしています。それに比べて北欧は、社会福祉に多くの予算を配分し、中でもフィンランドは教育に最大の投資をしています。幼稚園から大学院まで学費も教材も全て只。高等教育においては、職業大学、総合大学、大学院、大学院大学などがあって、自分に適した選択ができ、かつ、途中でコースの変更も自由です。クラスは全て少人数制ですから、学級崩壊などは起こらないし、落ちこぼれも出ません。その結果、偏差値は当然高くなります』

『教授の質はどうですか？』

『この国の先生はよく勉強しますよ。私の学生時代の日本では、一つのノートで一生やり通す大学教授がいたものです』

私は段々熱くなって来て『この国では受験の為の勉強はしません。ましてや塾などはありません。猛烈な受験戦争をしている、韓国や中国から、サイエンス分野でノーベル賞をもらった人はいないでしょう。受験勉強は身に付かないのですよ』とまで言った。

話に夢中になっている時、店のドアが開いて、あの背の高いご夫人が入って来た。待ち人は、忘れた頃にやって来るのだ。

2015年05月11日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（54）】 臆病で意気地なし



狩猟に成功、自慢の写真。（ヨハンソンさん提供）

心待ちにしていた背の高いご夫人を、一番奥のテーブルに通して、私はロッカーにしまっていた ISADORA のバッグを彼女に渡しながら、今度はフィンランド語で礼を述べた。すると、彼女は『フィンランド語は話せません。母国語はスウェーデン語です』と英語で答えた。私がスウェーデン語で礼を言い直すと、彼女は驚きの声をあげた。

変だ！あの晩、私はタクシーに乗った時に、スウェーデン語と英語で礼を述べたのに、彼女は何の反応も示さなかった。私は彼女にその訳を聞くと『ヘッドフォンで音楽を聞いていたので、失礼しました。私の名はヨハンソン、ストックホルムの高校で歴史を教えています』と答えた。

私は数日前に音楽協会から送られて来た小雑誌の見出しに、「北欧人はヘビメタがお好き！ヘビメタの聴視率はフィンランドが世界一！！」と書かれていたのを思い出して、『ことによるとヘビメタを聞いていたのですか？』と問うた。『よく分かりましたね』と、彼女はクスッと笑った。

ヘビメタとはヘビー・メタルの略で、過激なハード・ロックの一ジャンルだ。

『私はシナトラやジュリー・ロンドンで育ったので、デビュー当時のビートルズですら騒がしいと感じました。今でも、ヘビメタはご免です』

『私も始めは違和感を覚えました。でも一度ハード・ロックに慣れてしまうと…』

『なるほど。ウオッカをロックで飲むようになると、水割りでは物足りないのと同じですね』と言うと、英語の駄洒落が通じたのか、大笑いしてくれた。冷たそうに見えた彼女の整った顔が急に和らいだ。

ヨハンソン女史の妹君はフィンランド人の開業医と結婚し、ポリ郊外に住んでいて、この日は10才になる甥を見舞った帰りだと言う。

『貴女の甥御さんをご病気なのですか？』

『…実は義弟の趣味が狩猟で、一昨日、狩りの後に自室でライフル銃の手入れをしていた時、急患が入ったのです。義弟はライフルを机に置いたまま部屋を出てしまいました。甥はその部屋に忍び込み、見まねで覚えた通りに弾を銃に装填して、裏庭で試し撃ちをしたのです。発射の反動でライフル銃の台尻が甥の顎の一部と右肩を強打したのです。父親が医者なので、最悪の事態にはなりませんでしたが、当分学校には行けないでしょう。北欧、特にフィンランドは銃の所有率が高いのです。ですから、甥のような事故が起こってしまいます』

『女性の大半は、銃の所有に反対していると聞いていますが』

『その通りです。昔から男性は“周囲の森に棲む熊から家族を守る為だ”と言って、銃を持ち続けています。でも、熊が家に入り込み、人を襲った話など聞いた事はありません』

『米国では銃の乱射事件が茶飯事です、やはりアメリカ人も銃を放棄しませんね』

『欧米人は元々が狩猟民族です。と言っても、狩りに出たのはもっぱら男性で、女性は家を守っていました。ですから、銃への執着はありません』

『大統領が女性になるほど、フィンランドでは女性が強いのに、なぜ銃を規制する法律をつくれないうのですか？』

『立法府である議会は、数の勝負です。女性は出産や育児などのハンディを負っていて、議員の数では男性に勝てません。銃の放棄を決めるには、どうしても男性からの賛成票が必要です』

『アメリカでは全米ライフル協会が強過ぎて、銃規制が進まないと言われてますね』

『一つの団体がいくら強くても、過半数の国民を説得する力があるとは到底思えません。本当の理由は、国民自身の心の中にあると思います』

私はそこで、日本の侍が刀を捨てられた経緯、日本において発砲事件が少ない理由について『日本では戦国時代が終わった時、秀吉が「刀狩り」を、江戸時代が終わった時、維新政府が「廃刀令」を、第二次対戦が終わった時、「銃刀法規制強化」がなされて、日本では銃刀による事件が激減しました。時代の節目でしか、武器の禁止は成功しないようです』と持論を披露した。

『その通りかも知れません。アメリカでは“南北戦争”、フィンランドでは“白赤の戦い”の直後に、市民に銃器の放棄を呼びかければ良かったかも知れませんね。現在、アメリカでも北欧でも、銃規制が実現しないのは、政治家達が銃規制を本音で議論出来ないところにあると思います』

『本音って何ですか？』

『多くの政治家が、もう“手遅れだ”と思っているのです。でも、それを言ったら、“やる気の無い人に政治は任せられない”と賛否両陣営から非難されてしまい、本音を語った議員の政治生命は終わってしまうのです』

『本音が言えないとなると、別の理由にすり替えて議論している訳ですか？』

『その通りです。男性議員はいろいろな理屈を付けるんです。禁止されたらバイアスロンの選手が育た

ない。軍隊に入った時、銃が下手では困る。森の中で熊と遭遇した時はどうすれば良いのか？等々些末な話でお茶を濁してしまうんです。こんなに銃の入手が簡単では、北欧でもきっとアメリカのような銃乱射事件が起きますよ』と、ヨハンソン女史は顔を曇らせた。

彼女の予言通り、後年（2009年）、ヘルシンキ郊外のショッピングセンターで、銃乱射事件が起きて、多くの死傷者がでた。そして2012年には世界の一大ニュースとなったノルウェーのウトヤ島での、たった一人の青年による77人の大虐殺事件が起こってしまった。

『とどのつまりは、男性は銃が無いと心細いのです。夫は私に“もし銃の所有を禁止する法律ができれば、善良な市民は銃を所轄に差し出すだろうが、悪人達は隠し持ち続けるに違いないよ。そうなったら、社会はどうなっちゃうんだい？”と言うのです』

『善人は全て丸腰。悪人だけが銃を持つ社会を私も想像出来ませんね』と夫君の説に同意してみせた。

『そうですか、貴男も！…私の次男は、痛いのが怖くて歯医者に行けません。長男は初恋の相手にデートも誘えません。夫に至っては、結果を知るのが怖くて健康診断にも行けません。銃規制が行われない最大の理由は、いまどきの男は皆、臆病で意気地なしだからです。理想を追えないどころか、現実をも直視出来ないからです』と、以前の厳しい顔に戻ってヨハンソン女史は断言した。見透かされてしまった私は、反論する勇気が失せ、頭を深く垂れるしかなかった。

2015年06月08日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（55）】
言葉は本心を隠すため！



現存するオリンピック競技場

6月の花嫁（June Bride）という言葉は、梅雨の日本にはそぐわないが、北欧ではまさに、美しく着飾った花嫁に相応しい祝辞である。Juneの語源は美の女神Junoから来ていると言われ、6月は花嫁にとって、この上ない結婚月なのだ。その爽やかな6月の中旬、ヨハンソン女史から次のようなメールが届いた。

ISADORAのバッグを頂きありがとうございました。私の使う香水の銘柄を東洋人の貴男に言い当てられたのにはビックリしました。

私はこの春、従姉妹の住むロスアンゼルスに招かれ、その折にラスベガスに行きました。私が泊まったホテルの1階で、いかにも金持ちらしい一団が特別室で美女達をはべらせて、お酒をのみながらバカラ賭博をやっているのを見ました。カジノの従業員にその人達の素性を聞くと、『武器を売って大儲けしている連中ですよ』と、そっと教えてくれました。銃火器による多数の犠牲者を弔うどころか、カジノで博打に興じていたのです。本当に腹立たしく思っていた矢先に、私の甥が銃の被害者になってしまったのです。

貴男が銃所持禁止論者である事を知らず、一方的にきつい事を言っしまい申し訳なく思っています。

甥は、フィンランドで生まれ育ちながら、母親がスウェーデン人である為にフィンランド語がまだまだ上手に話せません。近所の小学校に通わせたのですが、言葉の問題でいじめられる事が多く、結局はスウェーデン・スクールに通っています。父親はフィンランド人ですが、子供にフィンランド語を教える事は出来ませんでした。フィンランド語はそれほど難しいのです。そのせいか、甥は私の訪問をいつも待ちわびていて、私も甥が別段に可愛く思えます。それだけに、銃による怪我はとてもショックな出来事でした。

私は、貴男が言った「歴史の節目は武器を放棄するチャンス」と言う説にとっても興味をもちました。フィンランドでは、1952年にヘルシンキ・オリンピックを開催して、世界の人達を招きましたが、その時に銃の放棄を宣言すれば良かったように思えます。最近では、ベルリンの壁が崩壊してEU（欧州共同体）に参加した時とか、第10代大統領アハティサーリがコソボとセルビアの仲介に成功した時など、チャンスは何回かあったように思えます。

アメリカでは、法律の多くが州レベルで制定されるので、今となつては、全面的銃規制は至難でしょう。私は歴史を教えていますから、これを機会にアメリカの歴史書を読み直してみました。すると、アメリカの音楽史の章の中で、「ヨーロッパからの移民の数が少なかった頃、現地人（インディアン）からの攻撃を防ぐ為に、山岳地に住んだそうです。そこで歌われたのがカントリーミュージックの“マウンテン”でした。そしてヨーロッパ人が増えるにしたがって、彼らは丘陵地帯に下りてきました。その時に歌われたのが“ヒルビリー”、そしてさらに人口が増えて安全度が増した時、平地に移りました。この時流行した歌が“ブルーグラス”でした。平和を得たその頃に、軍人や保安官以外には銃を持たせないようにしたら良かったと思います。それが実現していたら、武器をもった悪徳商人達が、アフリカから奴隷を連れてはこなかったでしょうし、それに起因する南北戦争も、又人種問題も起きなかったに違いありません。

次回にポリに行った時、又貴男を尋ねます。日本の歴史を教えてください。と書かれていた。

私は手紙を読み終えて、受験戦争の無い北欧では、高校教師でも自分なりの歴史観や世界観を持つ余裕がある事が、大変羨ましく思えた。

又、今更ながらフィンランド語の難しさも認識させられた。現在でもフィンランドの公用語はフィンランド語とスウェーデン語の二つだ。かつて600年間フィンランドを統治したスウェーデン人も、現在フィンランドに住むスウェーデン人の末裔も、いまだにフィンランド語をマスター出来ていないのだ。その為、フィンランドは公用語を二つ維持して、全ての公文書や交通標識等を両国語で併記しなければ、社会が上手く廻っていかないのだ。

フィンランド人のお年寄りにはスウェーデン語を理解するが、フィンランドの若者達は、スウェーデン語を習おうとはしない。これは、韓国と日本の関係によく似ている。韓国のお年寄りには日本語を理解するが、若者は日本語を習おうとはしない。

フランスの女流作家、カトリーヌ・アルレーは著書の中で、「言葉は人の本心を隠す為につくられた」と言っている。フィンランド人は長年の統治者であるスウェーデン人やロシア人から、本音を隠す為に、極めて難解な言語を作り上げてきたように見え、アルレーの説は、あながち奇をてらただけのものでは無いように思えてきた。

そんなに難しい言葉を毎日使っていれば、自然と脳は発達するに違いない。フィンランド人の教育レ

ベルが高い最大の秘密は、そこにあるのかも知れない。

2015年07月06日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（56）】 親の因果



夏至祭の湖上で行われるコッコ

前年の6月末に行われた3日間の夏至際には、ポリの街から人影が失せ、私のレストランは開店休業の憂き目にあった。

この年は悪あがきせず、ラーキオの招きに応じて、ポリ郊外の湖畔にある彼の別荘で過ごすことにした。別荘は、元レストラン協会・会長の肩書きに相応しい豪華なものだった。フィンランドには金持ちはいず、全員が中産階級と言う印象を持っていたが、資産家はまだいたのだ。ラーキオの母親がまだ存命である事が、その主たる理由であった。『もし母が亡くなれば、莫大な相続税が課せられるので、社員の保養所としてどこかの企業に売却せねばならないでしょう』とラーキオは言う。

恒例の白夜の中で行われる、湖上の薪火祭はコッコ（Kokko）と呼ばれる。悪霊を払い、豊穰を祈願するものだが、ゾロアスター教に代表された拝火の思想は、古代より多くの宗教や民族により、綿々と現代に引き継がれているのだ。私は雑踏の中で見た、奈良の大文字焼や、東山を背景に平安神宮で行われる薪能を思い出していた。それらの幽玄な様を、プライベートビーチで見られる事は、湖水の多い北欧ならではの贅沢である。開店以来はじめて3日間ののんびりした休暇を過ごし、2週間後に迫った“ポリジャズ祭”への良い休息となった。

ヨハンソン女史と知り合ってから以来、私もヘビメタを理解しようと考え、ある日、ケーブルテレビでヘビメタ専門チャンネルを選んでみた。すると、メタリックな黒や銀の大柄な市松模様の衣装を纏い、顔を白、赤、黒、緑の極彩色で塗りつぶしたサタン達が、大音量で楽器をかき鳴らしていた。「段々良くなる法華の太鼓」を期待して視聴を続けたが、10分程が我慢の限界であった。聴覚的にも視覚的にも、私には受け入れる度量がなかった。

翌日、私の店に頻繁に来る妖精のように可憐な女学生が、ヘッドフォンをしながらカウンターで、私の握った寿司を食べていた。シベリウスかモーツァルトを聞いているかのように見えたのだが、耳をすませると、ヘッドフォンからシャカシャカというヘビメタのリズムが漏れ聞こえてきた。

人は見かけによらぬものだ。“あの声でトカゲ喰うかやホトトギス”という川柳を思い出さずにはいられなかった。(辛辣な句であるが、「顔」ではなく「声」と控えたところに、詠み手のセンスの良さが伺われる)

そんな事を考えている時、店のドアが開いて背の高いカップルが入って来た。ヨハンソン女史が義弟のニッカネン医師と連れ立って来てくれたのだ。

自己紹介の後、ヨハンソン女史は『義弟は狩猟の趣味を止めて、ライフルを廃棄しました』と嬉しそうに話した。

ニッカネン医師は『家の中に銃があるのは良くない事だと、やっと気がつきました』と行って、頭をペコリと下げた。私は酷と思ったが、『日本には“親の因果が子に報い”という古い諺があります。昔は現代のように、親と子供が別々の人格を持つという感覚が希薄でした。親が罪を犯すと子供に罰が当たると考えていたのです』と言った。

ニッカネン医師は『その諺通りの事が起きてしまった訳ですね。人が悪事を働けば、その人だけではなく、可愛い子供も罰を受けてしまう、と言う思考は日本人の道徳の向上に役に立ったでしょうね。私もその言葉を知っていれば、狩猟を趣味にはしませんでした』と言った後、それ以上は銃の事故の話は続けたくないようで、『ところで、日本人は世界一長寿と聞いています。食材のバランスも良く、医療も発達しているからと察しています。そういう環境では、国民病は無いのですか？』と急に話題を変えてきた。

気の利いた答えをしなければならない。私は『チョット待って下さい。お茶を用意して参ります』と言って時間稼ぎをした。

『元来、日本人の食は野菜と魚に、飲は緑茶に頼っていました。ところが戦後、食生活の西欧化が進み、肉食が増えました。その為、消化器系の癌が増えたように思います。ところで、北欧でも国民病はあるのですか？』質問には質問で答えるのが常套手段だ。

『北欧は太陽光が少ないので、子供達の背骨の上部が湾曲する“くる病”にかかり易いのです。』

この時、ヨハンソン女史が口を挟んだ。『そうなんです、そこで子供は日が照ると裸にされて、庭に追い出されます。私は5歳下の妹につきあわされましたから、かなり大きくなるまで裸で日光浴をしていました。子供を二人産んで体形が崩れるまでは、裸になることを恥ずかしいとは思いませんでした』

(今でも十分美しいプロポーションですから、是非ご披露下さい) と言う冗談を私はぐっと飲み込んで、ニッカネン医師に質問を続けた。

『太陽光が少ないと、どうしてくる病になるのですか？』

『紫外線は皮膚直下の、ある種のコレステロールをビタミン D に変える働きを持っています。ビタミン D が不足すると、せっかく食べたものからカルシウムやリンが腸壁を通して吸収されず、児童はくる病に、成人は骨粗しょう症に…』

ヨハンソン姉弟の話聞きながら、私は「風が吹けば桶屋がもうかる」と言う古典落語を思い出していた。紙面の無駄かも知れないが、その話の道中は「風が吹くと、埃が舞い、眼病が増え、盲人も増えて、三味線の需要が増大する。よって猫の皮が余計必要となり、その分ネズミが増えて、桶が沢山かじられる」という一見馬鹿馬鹿しい話だ。

北欧では、太陽光が少ないので、コレステロールがビタミン D に変化せず、カルシウムが吸収されない。それを回避する為に、子供は裸で庭に出される。よって裸に羞恥心を持たなくなり、その結果、北欧がポルノ・グラフィのメッカとなった。私の脳に刺さっていた棘が、又一本取れた。

2015年08月03日

【世界最北の日本レストランーフィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（57）】 ジョークと格言



ポリ最北端、レポサリ魚市場

ポリ市最大の年中行事、ポリジャズ祭が近づいた。前年私はイベント会場で10日間、日本料理の模擬店を出した。早朝から真夜中迄の激務であった。疲労と寝不足により朦朧としていたので、客達にどう対応したのか思い出す事も出来ない。私の留守の間、市内にある私の店舗も、連日観光客で満席が続いていた。ココとチャイの二人の中国娘が私の書き置きを無視して、見よう見まねで、寿司も天ぷらも作ったと言う。幸い、いちげんの観光客がほとんどであったから、クレームは無かったようだが、想像するだけでも冷や汗が出る。

それらの反省から、「今年は、イベント会場での出店を辞退します」と事務局にメールした。すると数日後、ランチタイムが終わろうとする頃、実行委員長代理を名乗る中年の女性が訪ねて来た。『2つお願いがあります。一つは貴男の事務所兼自宅を、臨時の宿泊所に使わせてはくれませんか？屋内に15組、庭にテントを張って10組、計25組の若いカップルに宿泊してもらおうと思います。準備と運営はオーナーであるキモさんから“全てホテル・ランタカルタノが請け負う”との約束を取り付けてあります。その間、貴男は当方で用意するホテルの一室を使って下さい』

町のためにもなるし、利益も見込まれるので、即座に快諾した。2番目の依頼は大問題であった。委員長代理は『実行委員長のウルキ・カンガスが“今年はVIPの客をクルザーに乗せ、ポリ市を河と海側から見せたい。その折、船内で寿司と天ぷらでもてなしたい。予算は十分に付けるので、是非引き受けてもらいたい”との言付けを受けました』（例年、VIPには外国の元首や王族も含まれているのだ）

ポリは人口的には10万に満たない小地方都市であるが、面積は1053km²と東京23区の総面積623km²よりも遥かに大きい。しかもその地形は東南にある中心部より、北西に細長く伸びている。よって市の最北端にある観光スポットのレポサリ魚市場との往復はかなりの距離になる。コケマキ河を8キロ程北上するとボスニア湾に出る。湾といっても北海に直結する外洋に等しい。天候が崩れれば荒海と化す。

私は『寿司はナマモノですから、衛生上の観点から、船上では差し上げられません。天ぷらは 185 度に保った大量の植物油を使いますから、天候次第では大変危険です。依頼されたのは光栄ですが、応じかねます』

『……先日、“日本料理紹介”という小雑誌を読みましたが、日本料理のバリエーションの豊富さに驚かされました。なにか、適当なものをみつろって下さい。ポリで日本食を出せる事が、市の誇りなのです』 『私は町の料理人です。宮廷料理は作れません』 『VIP といっても、プライベートのお忍び旅行ですから、そう固く考えなくても結構です。日本料理には KAISEKI がありますね。あの中から、ナマモノと油を使わない料理を選んで頂ければ十分です』

私が自信を持てる料理は寿司と揚げ物しかない。懐石などほとんどない。キツパリと断るしかない。生半可な断り方をすると、実行委員長のウルキ・カンガスが直接頼みに来るかも知れない。彼からは開店祝いとして、店頭に出す大きなテーブルをプレゼントされている。このテーブルは、晩春から早秋までの売り上げに大いに貢献している。彼にノーは言えない。

私は彼女と世間話をしながら、禍根を残さずに断る方法を思案した。こんな時は、真面目に話すよりユーモアで逃げるのが上手い手だ。日本のユーモアは古今和歌集以来、駄洒落が主流である。江戸時代には町人たちの知恵の発露でもあった。

安倍内閣が誕生して、アベノミクス（枕はレーガノミクス）が提唱されたすぐ後、あるお菓子屋さんが売れ残った飴を数種類袋詰めにして「アメノミックス」として販売すると、この駄洒落が受けてテレビ・ニュースにもなった。パクリの上前をはねたところが気持ちいい。

しかし、日本語の駄洒落は異国では通用しない。それに代わるものを見つける必要がある。欧米にも駄洒落はあるが、ユーモアの主流はジョークである。言葉数が多い分だけ、意味深く、世相も詠み込める。ここ数年では、次の2つのジョークが傑作である。

一つは、前回のアメリカ大統領選で、前半優位だったオバマ候補が、資金力豊富なロムニー候補に終盤追い上げられて、接戦となった。ニューヨークでの演説会でオバマ氏は『マンハッタンに家族と来ると、どのレストランで食事をしようかと迷います。他方、ロムニーさんは、どのレストランを買い取ろうかと迷っています』とジョークを言った。これが受けて、オバマ候補は再びリードを取り戻した。

もう一つ、タイガー・ウッズの浮気が奥方（北欧系のブロンド美人）にバレて、大げんかとなった。タイガーは車で逃走を計ったが、奥方は走り出した車のフロントガラスを5番アイアンで叩き、ひび割れさせた。視界を失った車は街路樹にぶつかり、タイガーは軽症を負った。このニュースの後、タイガーの愛人達が続々と名乗りをあげて、紙面を沸かせた。以後タイガーは大スランプに陥った。一方、加害者の奥方の立場も、法律的に微妙になった。その時、夫妻の共通の友人であるゴルファーが、奥方に『今度タイガーが浮気したら、5番アイアンではなく、ドライバーを使いなさい』と言った。このジョークが大いに受けて、以後、奥方の起訴を云々する野暮な人は居なくなった。（おまけ。古い人向け、

最近の自作：今の安倍さん、山本リンダ。♪どうにも止まらない♪ お粗末、ご免)

駄洒落と違い、ジョークは即座に作れるものではない。何と断れば良いのか困り果てた。その時、委員長代理は、『一つだけ、ご注意頂きたい事があります。VIPの中には、奥様以外の方を同伴する事もままありますので、このクルーズに関しては、店の宣伝に使ったり、他言は決してしないで下さい』と言った。

しめた、と私は思った。『私は宣伝も他言もしません。しかし、日本には“人の口に戸は立てられぬ”と言う格言があります。私をアシストしてくれるウエイトレスたちは、おしゃべりと携帯が3度の飯より好きな10代の娘たちです。彼女たちに秘密を守れと言うのは、無理な相談です』と言った。格言は、ジョークのように面白くはないけれど、時代を経た重みがあり、定説（セオリー）のように、相手に「正しい事」と錯覚させる力がある。

丁度その時、昼食後に長話をしていた中年カップルが、支払いを済ませて店を出て行った。すると、レジを担当していた、この春入店した研修生が私に声を掛けてきた。『マスター、気がつきましたか？あの中年男、又違う女を連れて来たんですよ！』 委員長代理は『・・・分かりました』と言って、すぐと帰っていった。

2015年08月31日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（58）】 北欧、自転車考



自転車専用道

ポリジャズ祭も終わり、街は平静を取り戻した。カモメたちはコバルトブルーの空を舞い、事務所兼自宅も25組の観光客から解放されて、以前のように我家の先住民、リスやキジや針ネズミの家族と大兔も戻ってきた。

祭りの期間中、イベント会場での模擬店は開かず、市内店舗での平常業務に絞ったが、連日超満員で売り上げは上々だった。惜しむべくは大型店のように来客の全てを収容して、年の収益の何割かをこの10日間で稼ぎ出すことが出来ない事だ。私の店で対応出来たのは、おそらく足を運んでくれた人の3割にもみたなかったであろう。



北欧の夏用自転車

よく働いてくれた店員達を労うため、翌日からの週末の土日を臨時休業としたので、定休日の月曜日を含めると3連休が取れることになった。

金曜日の夜半過ぎ、「久方ぶりの3連休をどう過ごそうか？」と、ワクワクした気分で帰宅すると、日本から一通の封書が届いていた。「君の大酒も年貢を納める時がきたようだ」からはじまったその手紙は、父の友人であり、私を小説研究会にひっぱりこんだ、作家で元参議院議員の八木大介からであった。私は彼から、「君の下手な文章は、情報量で補えば良い。七つの海を越えて遊び歩いている君には、真の海

外情報を日本人に伝える義務が有る」と迫られたのだ。

彼には、父の葬式で、葬儀委員長を引き受けてもらった借りがある。月に一度、霞ヶ関のプレスセンターで行われる例会に、いやいや出席するはめになった。毎回宿題も出されるので、海外出張の多い私には結構な負担であった。

しかし、2次会での馬鹿話は楽しいもので、2008年に八木大介が脳梗塞で倒れるまで、この会は長く続いた。八木大介という八方広がりペンネームは、文豪・城山三郎から贈られたものだ。ちなみに、私のペンネームは私の口癖「昔、吉祥寺は静かだった」から、八木大介が「吉祥寺静」と命名した。私は“永遠の美少女”夏目雅子を独り占めにした、につつき伊集院静が思い出されて、好きにはなれなかった。さりとて、無視するわけにもいかず、川柳や狂歌など、ふざけたものを詠んだ時だけ、そのペンネームを使うことにした。

さて、八木大介からの手紙の内容だが、「昨今多発している自転車事故を減らす為に、政府は自転車にも自動車に準ずる法の網を被せようとしている。酒気帯運転は最重要危険項目に入っているようだから、君がよく言う『飲んだ後、最寄り駅から自宅迄、風に吹かれながらの自転車はこの上なく心地よい』などとは言っていられなくなった」というものだった。前年、飲酒をドクターストップされた八木大介が嬉しそうに書いてきたのだ。

3連休が始まる土曜の朝、寝坊を決め込んでいたが、事務所の方から電話のベルの音が聞こえた。トウミネン教授から『明け方から電話して済まない。今から家族と一緒にベルギーに行って、自転車旅行をする。荷物を軽くする為にパソコンは持っていかないの、しばらくメール交換は出来ない』と言ってきた。初老の私達には携帯電話を親指で操作するのは苦手なのだ。ベルギーは自転車の先進国。行く先々で好みの自転車が借りられるのだ。

それでは私も、この連休を使って日頃行く事の無いポリ郊外を自転車で探索してみよう、と思いついた。折角、美しいポリに居て、他国に足を延ばす理由は私には無かった。

北欧の自転車の最大の特徴はハンドブレーキではなく、フットブレーキが多いことだ。止まるには、ペダルを踏んで、クランクを静止させるか、もしくは逆回転させなければならない。慣れるまでには時間がかかる。このスタイルは日本では競輪以外では禁止されていると聞いている。ハンドブレーキが北欧で敬遠される理由は定かではないが、一説には、氷上で転んだ時、ハンドブレーキのトリガー（引き手）で怪我をする人が多いから、と言われている。今でこそトリガーの先は、ゴムに覆われて丸い形をしているが、昔は金属むき出しで尖っていた。

北欧では、夏と冬では自転車が異なる。冬はタイヤが太く雪道に強い、マウンテンバイクが好まれ、夏はタイヤの細い軽快車が主流だ。私は時々、自転車で買出しに行くので、一年中冬用のマウンテンバイクを使用している。久しく乗っていなかった夏用の軽快車をガレージの奥から引っ張り出すと、後ろ

のタイヤがパンクしていた。

しかたがない、街はずれの自転車屋に修理に行くことにした。私は自転車屋のオヤジに、『どうして後ろのタイヤばかりがパンクするのかね?』と問うた。『貴男は自分の脚力で自転車を走らせていると思っているのでしょうか。それは勘違いです。脚力はクランクを回しているだけです。チェーンがその力を後輪に伝え、後ろのタイヤの低面が、道路をガッチリと掴んで、前進する力を生み出しているのです。前輪は進行方向を決めるだけで、空回りしているのと同じです。働き者の後ろのタイヤが早く痛むのは当然です』と言った。

このオヤジ、できるな!と感じて、パンクを修理している背後から、八木大介が伝えてきた、自転車新法の話をしてみた。すると即座に、『それはおかしい。自転車は自動車よりもずっと人間に近い。自動車並に扱うのは間違っている』と言って、その理由を並べた。

- 1) 車高は1メートルほどで、大人より低い。
- 2) 自重は20キロほどで、大人より軽い。
- 3) 速度はせいぜい30キロほどで、カール・ルイスより遅い。
- 4) 化石燃料は使わない。
- 5) 運転者の健康に寄与する。
- 6) 排気ガスは出さない。

と言った後、『あそこの踏切を見て下さい。平日の朝なら、通勤・通学のため大勢の人達が自転車で通過します。もし、自動車同様、前の自転車が踏切を渡り終える迄、次の自転車が踏切内に入れないとしたら、サラリーマンも学生もみな遅刻してしまいますよ』

そしてオヤジは最後に『自動車の酒酔い運転が禁止されて以来、ポリの呑兵衛どもは、住宅地にあるパブへ自転車で飲みに行くようになった。もし、その自転車新法がポリに来たら、パブもウチも倒産ですよ』

たしかに、踏切の例でも判るように、「都合の良い事だけを罰し、都合の悪い事は大目に見る」では法律ではない。ましてや日本では、欧米のように自転車専用道路は整備されていない。それなのに、法規だけが先行するのは納得がいかない。

修理された夏用の自転車で帰宅する頃には、日は高く、気温もかなり上昇していたので、ビールを飲んで、昼寝をすることにした。しかし、八木大介と自転車屋のオヤジの言う、「もし自転車新法が出来たら」が頭から離れず、眠る事が出来なかった。

もし、私がいつものように酒を飲んだ後、自転車を時速20キロのスピードで走らせたとする。巡査に怪しまれて、1キロほど尾行されたとしよう。私は近道の一方通行を逆走し、車道の右側を走り、帰宅

を告げようと携帯を使い、電池切れに気づかず無灯火で走り、T字路では信号を無視し、遅い自転車を追い越し、時雨れて傘をさし、交差点での一時停止を怠ったとしよう。3分間で10件の違反をしてしまった事になる。

グローバル・スタンダードでは、罪を重ねると罰は倍々に累進される。その結果、死刑が廃止されている国では、禁固1000年を超す判決も珍しくはない。八木大介は「規則違反の罰金は5万円」と予想している。暗算してみると、5・10・20・40・80・160・・・！！ 私には2,560万円の罰金が課せられる事になる。八木大介が「我が意を得たり」と、ウキウキして手紙を書いてきた理由が判った。

2015年09月28日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（59）】 別れの秋



秋のコケマキ河畔

「フィンランドの夏はどれほど暑いのですか？」と問うメールがしばしば日本からくる。それに対して私は、常用しているフィンランド語の教科書に載っている「電話」という章の一節を直訳して、返事としている。“今年の夏、この村はととても暑いんだ。そっちの町はどうかね？”“こっちも暑いんだ。摂氏26度もある。まるで地獄だよ！”

これを読んだ多くの人たちから、「その著者を夏の東京に招きたいものだ。いったい何て言うのだろう？」との、メールが返って来る。その快適なフィンランドの夏が過ぎると、8月末には肌寒い秋が足早にやって来て、ポリの中央を流れるコケマキ河畔の銀杏や白樺の葉を黄や茶色に染めてしまう。

秋と言えば日本では、「食欲の秋」「読書の秋」「芸術の秋」である。フィンランドでは前述したように「キノコ狩りの秋」である。しかし私にとって、この年は「別れの秋」になってしまった。

忘れもしない9月末日の朝、出勤してきた上海娘ココから『家庭の事情で、帰国する事になりました。もっと早くお伝えすべきでしたが、言い出せなくて…』と、突然の申し出があった。

私は研修生達に「レストランは流れるプールのようなもので、料理人がいくら上手くても、その前工程の食材や調味料の手当、後工程の配膳や皿洗い等、全てが上手くいかないと、流れは止まってしまう」と教えている。

研修生達は、個々の作業は料理学校で習ってきてはいるものの、作業の順序を体得したり、複数の作業を同時にこなすまでには至っていない。ココは私の店に来る前に、中華料理店で働いた経験もあり、自分の役割だけではなく、全体への目配りが出来るセンスも持っていた。私がやろうとしていることも、先廻りしてその段取りも組んでくれる。

そのココが突然居なくなってしまうのは、右手右足を同時に失う事にひとしい。そして、有能な店員

とか、可愛い上海娘としてではなく、何者にも代え難い心の拠り処だった。

世に「性同一性障害」と言われる人達がいる。幸いにして日本は、この障害を「粋の道」として是認した、誇るべき歴史をもっている。私の持つ障害は、「年齢同一性障害」である。体は初老だが、心はいまだ学生のままだ。ココは私を日本のお父さんと思っていただろうが、私は彼女を一人の女性として、好きになっていたのかも知れない。そうでなければ、これほど迄に、大きな衝撃を受けはしなかったに違いない。

もっと良くしてあげればよかった。将来バーテンダーを志望していた、通称ガードマンのエミリーが1年間のパブ研修を終えて私の店を去った後、夜の部のパブをフォローしてくれたのは、ココだけだった。私は何度も彼女を、アルバイト学生には縁遠い、町で唯一の三ツ星レストランに連れて行ってあげようとした。店の客が途絶えた夜、「さあ今から」と思った瞬間にドアが開いたり、雨が降り出して、もう客は来ないだろう、「今こそは」と思った時、「これからそちらに行くよ」という常連からの電話が入ってしまった。まるで、フィンランドにも弁天様が居るように思えた。

蛇足だが、「なぜ弁天様がヤキモチ焼きか？」には諸説がある。その一つを紹介しよう： 京や江戸のお大尽さまは、人目をはばかって、近隣の遊里を避け、遠隔地の色街を選んだ。「商売繁盛を祈願してくる」と言って、弁（財）天様の祭られる「丹後の宮津」や「江ノ島」等に足を延ばした。どちらも景勝地であるから、奥方が同伴を申し出る。そこで、「弁天様はヤキモチ焼きだから、一緒にいくと別れるはめになる」と言って、奥方に留守をさせて、自分たちは弁天様の門前で繁盛する遊郭で大いに羽を伸ばした。

この話を裏付けるように、京近在の人たちが今でも愛唱する唄がある。

♪二度と行くまい 丹後の宮津 縞の財布が空になる…♪ これは、並みの町人が宮津で遊んだら、大層結構ではあったが、相場よりも高く、流行の縦縞（ストライプ）の財布が底を付いてしまった、と嘆いた唄だ。

それにしても、一度でよいから一流のレストランで、ココを給仕する側から、給仕される側に座らせてあげたかった。しかし、その今（いま）は最後まで来なかった。今（いま）と言う、瞬時すら無いほどに、時間は非情に過ぎ去っていく。その様を上手く表した、詠み人知らずの狂歌がある。

今（いま）という いまなる時は無かりけり 「ま」の時来らば 「い」の時は去る

スマトラ沖地震で、多くの北欧の観光客が帰らぬ人となってから、互いの無事を確かめあうハグ（抱き合う）の習慣は、女学生や中高年の女性の間にすっかり根付いてしまった。恋人同士以外の男女間のハグには、阿吽の呼吸が必要で、片方がそれを避けようとしたら、お互い気まずい思いが残ってしまう。私の店で、中高年の女性が食事をして、店を去る時、私は店頭の重いドアを開けてあげる。すると、ご夫人達は『美味しかった。ありがとう』と言って、ごく自然にハグしてくる。私も自然にハグされる。

これが、リピーターを増やすコツでもある。

ココとの別れの日、泣き出したココを思い切りハグしてあげた。一年半前に、この店の開店許可を取るための、最後の障害であった、「マンションの住人全員から同意を取り付ける」を見事に達成した説明会の後、私達は大喜びでハグした。その頃の彼女の体は、ふっくらした感触があった。ところが今回は、まるで違っていた。『痩せたんじゃない？』と聞くと、『マスターだって、すごく痩せましたよ！』と言った。ココは『マスターが一日中、ほとんど食事をしないので、私達もまかない食をいつのまにか食べなくなってしまい、お陰で10キロもダイエット出来ました』と涙を拭きながら笑顔を見せた。この会話のお陰で、私は泣かずに済んだ。

レストランでは、やることが沢山ある。当分の間私は、“そうか、もう君はいないのか”（後年、城山三郎の遺稿となったエッセイ集の題名と偶然に同じ）を何度も口にしては、大きなため息を繰り返した。

秋の別れは、家の庭でも始まっていた。美しい翼を広げて庭に舞い降り、獣人たちが食べ残したパンの耳をついばんでいたカモメたちが、遠い南の国に去ってしまった。次にリスたちが木の実豊かな裏の森に消えて、そしていつの間にか針ネズミの家族も顔を見せなくなった。その後しばらくして、キジの親子も何処へか旅だっていった。

残されたのは、私と庭の白樺の下に穴を掘って棲む大兎だけになった。大兎には、当然のようにミミと言う名が付けられていた。男性がペットの中で一番可愛いと思うのは、犬でもなく、猫でもなく、実は兎だ。特に夜、酒のお酌をしてくれるバニーがいい。

私はこの秋から、パンの耳にレストランから出る、人参の尻尾とへたを添えた。餌場も樅の木の根っこから、白樺の木の下に移した。しばらくたった定休日の朝、平日より遅い時間に、ミミの朝食を持って庭に出ようとする時、キッチンのドア先でミミが短い前足を挙げて、私を待っていた。

扉の前の枯れ草の上に、餌をそっと置くと、おずおずと餌に近づいて来た。私はしばらく立ち止まって、ミミの食事を眺めていた。食べ終わるとミミは私を見上げた。私の手の届くところにミミはいる。目が合うと、3つに割れた唇をモグモグさせた。私に札を述べているように見えて、ハグしてあげたい思いにかられた。

お互いが相手の温もりを覚えてしまったら、ミミは私のペットになってしまうだろう。もし、ペットになってしまったら、日本に帰国する時、ミミを連れて帰れるだろうか？ 野生動物に餌を与えてはダメというこの国で、出国の際、私とミミの関係を何と説明すればよいのか？

抱くか、抱かないか。大昔、私はこの選択を誤って、長いこと苦労したような気がする。その反省と、私の理性「野性の尊厳を守るべきだ」が、抱きたいという感情を押し殺した。

手に取るな やはり野に置け 蓮花草 俳人にして奇人・滝野瓢水の句に思いを馳せながら、キッチン doa を閉めた。

2015年10月26日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（60）】 映画学



ヘルシンキの老舗映画館マキシム

日本の雨はお洒落である。五月雨、梅雨、驟雨、そして晩秋に降る雨は山茶花雨と呼ばれ、四季折々に趣のある冠を被せられている。農耕民族であった日本人にとって、雨は良くも悪しくも大事であり、その名はカレンダーの役目も果たしていたのであろう。欧米の雨は、雨でしかない。

もともと、欧米の方が繊細な例も稀にある。日本のスーパーで、客は目視により欲しい牛肉のパックを簡単に買える。欧米のほとんどのスーパーでは、牛肉はカウンター販売されている。牛の身体は15部位に分かれていて、肉名もサーロイン、ランプ、フィレ…などの名称が付けられている。知識が無いと二の足を踏むことになる。大事に関しては、何処もそれなりにうるさいのだ。

さて、10月も半ばを過ぎると、ポリの街は紅葉から落葉の時期に移り、雨も曇（ミズレ）に変わる。サラリーマンは、昼食は社内食堂で済ませ、仕事が終われば家路を急ぐ。当然、店への客足はめっきり減ってしまう。特に、ココが去って以来、彼女のファンだった若者たちの足が遠のいてしまった。その分、皮肉にもココが居なくても、店の運営に大きな支障は来たさなかった。ココはその事を知っていて、退社時期を選んでくれたようにさえ思えた。

このままではいけない。北欧では寿司は夏向きの料理と思われている。秋冬を乗り切るための新メニューを早急に考えねばならない。街の中では、熱源として電気しか使えないため、鍋物や焼鳥等は対象外である。試しに私は、小さめのスープ皿に豚汁を入れて無償サービスしてみた。すると、「有償で良いから大椀で豚汁が欲しい」と言う客が多く出た。次に、カツ丼、天丼、親子丼等をお茶碗に小さく盛って出したところ、評判が良かった。しかし問題は、大椀もドンブリも北欧ではなかなか入手できないことだ。そこで、一時帰国して、東京の合羽橋での仕入が頭をよぎった。

日本に帰りたい理由はもう一つあった。以前から「ペットの犬の毛と羊毛を混紡して、毛糸の一オン

ス玉を作り、それを使って靴下や手袋に編んで、個性豊かなプレゼントにする、というフィンランド独特のビジネスを日本市場に打診してみたい」と思っていた。

その頃、三十後半と見える見栄えの良い男性客が足繁く来店していた。彼が突然私に『私の名はペトリ。ポリ職業大学で映画学を教えています。撮影の許可を頂けないでしょうか？』と言う。私は『ココはもう居ませんよ。東洋人で残っているのは、私と裏方のチャイだけです。あまり絵にはなりませんよ』と答えた。彼は『ココが居ないのは残念ですが、それでも良いのです。お客様にはご迷惑が掛からないように、開店前と閉店後に撮影させて下さい』と言う。彼の意図がよく判らなかったが、反対する別段の理由も無かったので、取り敢えず許可することにした。以後毎週一回、ペトリはカメラマンを連れて店に来るようになった。そして、私の一挙手一投足を撮影し始めたのだ。『完成には2年程かかるでしょう』と言う。

映画学 (Cinema Study) という言葉を聞くのは始めてだったので、「最近できた薄っぺらな学問に違いない」と私は思った。映画は好きだったが、敢えて彼に論戦を挑んだ。『私は子供の頃から本が好きでした。読んだ本が映画化されると、必ずその映画を見に行きました。ところが、本でイメージしたのとは全く違う世界が映し出されて、いつもガッカリしました。やはり映画は本には勝てませんね』

するとペトリは、『優れた読者は、本を深く深く掘り下げていきます。一方、映画は原作を元に、脚本家、監督、俳優、大・小道具、カメラマン、コンピューター技師達が上へ上へと積みあげていくのです。視聴者の貴方と、映画に携わった方々は、それぞれ違う個性と、違った過去をもっています。ですから、完成した映画と貴方のイメージが違うのは当然です。監督と主演俳優の間ですら、イメージを統一するのに苦労しています』

なるほど。ポーランドの著名な監督の下で実践を積み、大学で週18回も講座を持つ男だけの事はある。私は彼を見直した。

アカデミー (=学術) 賞は1928年に始まったというから、映画自体はかれこれ一世紀の歴史をもつ。その枕となった舞台演劇は、紀元前から続いている。映画学を軽薄な学問と思った私こそが無知であった。

アカデミー賞は、受賞者に渡される銀の像を「オスカー」と呼ぶところから、オスカー賞とも呼ばれる。オスカーの語源に関しては多くの説があり真相は今もって定かではない。このような時、私はいつも「真理は単純である」(哲学者ヘーゲルの言葉)を思い出し、一番やさしい説を自説としている。

それは、1935年に行われた第8回目の受賞式で、女優賞(現在の主演女優賞)を授与されたベティ・デイヴィスが、客席で見守っている(当時の)夫・オスカー・ネルソンにむかって、『オスカー、賞を取ったわ』と叫んだのが始まりだ、という説である。彼女は前年「痴人の愛」で賞を取るはずであったが、どういう訳か落選してしまい、この年の受賞式では彼女に多くの同情と関心が集まっていた経緯が、こ

の説を支えている。

ある晩ペトリから『今、多くの映画館で上映されている、ラスト・サムライを是非見て下さい』と言われた。いまさらハリウッドが作った侍映画などを見る気にはなれなかったが、所用でヘルシンキに行った時、由緒ある映画館「マキシム」の前を通りかかった。日本と同様に北欧でも、映画館はショッピング・モールや多目的ビルの中に入ってしまい、独立館は珍しくなった。上映中の映画はラスト・サムライで、ポリに帰る次の便までの時間つぶしに丁度良かった。

ベルリンの壁が崩壊するまで、フィンランドには日本映画はあまり入ってきていなかったもので、多くの人達はこの映画から、サムライの生き様と滅びの潔さに感動したようだ。私は店で、いつも作務衣を着、従業員にはハッピーを着せていた。この風景が、ペトリに撮影の動機をもたらしたのであろう。

11月の初旬にテレビで、北朝鮮の大統領・金正日が体調を崩した、というニュースが報じられた。隣国のスウェーデンが永世中立国の為、北朝鮮と国交があり、確かな情報が迅速に北欧諸国に伝えられるのだ。そのニュースの中で、元気だった頃の金正日が映し出された。彼は自慢げに『私は映画が大好きで、1万巻収集しました』と話した。私はテレビに向かって『キミが集めたのでは無いだろう。国家予算を使って、役人に集めさせたのでしょ』と思わず言った。

私の家はケーブルテレビだったので、時間さえあったなら、豊富な映画番組が視聴出来た。ハリウッド映画が多かったが、次いで隣国のスウェーデン映画も多く流されていた。映画界はサイレントの創世記からトーキーへの普及期に移行する時、第二次大戦を迎えてしまった。多くの国々が疲弊する中、繁栄を続けられたのはアメリカと中立国のスウェーデンであり、この情勢は映画の歴史に色濃く繁栄された。ハリウッドが中心となり、監督ではジョン・フォード、ウィリアム・ワイラー、女優ではテーラー、モンロー、ヘップバーン等が活躍したが、スウェーデンも巨匠イングリット・ベルイマン監督を輩出し、女優ではグレタ・ガルボー、イングリット・バーグマン、アニタ・エクバーグ等が世の男性を魅了した。

そういえば、私の父は大の映画ファンだった。明治に生まれ、大正、昭和、平成と映画を楽しんだ。子供の頃、そんな父に私は『女優さんでは誰がいいの?』と聞いたことがあった。父は、『(マレーナ)デートリッヒの前にデートリッヒ無く、デートリッヒの後にデートリッヒ無し。彼女は右顔で微笑みながら、左目で涙をこぼせる女優だ。だからこそ、ヒットラーにしつこく言いよられても、肘鉄を喰わせて、米国に逃れることが出来た』と説明してくれた。子供心にも「立派な女性がいたものだ」と感心させられた。(私の人生が難しいものになってしまったのも、以後、気丈な女性ばかりに魅せられてしまった結果、かもしれない)

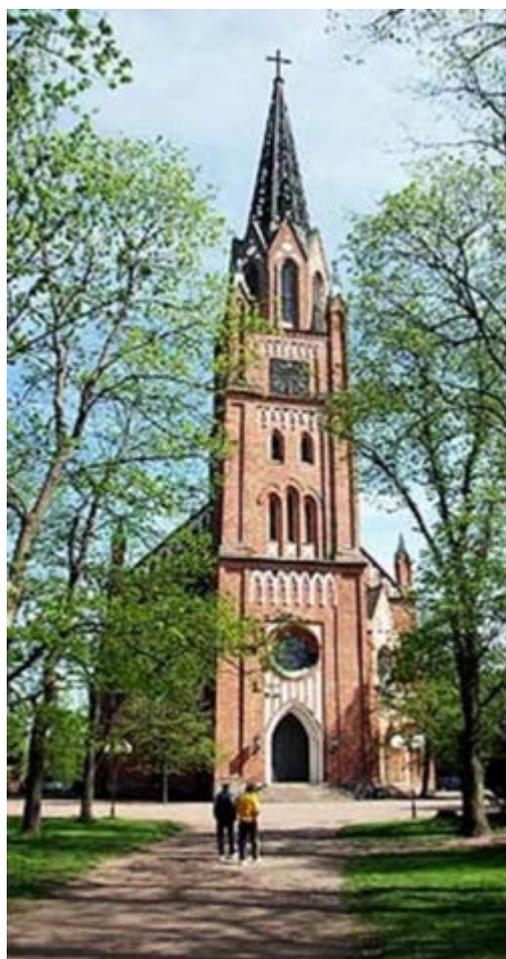
私は映画を録画して、それを普及し始めたブルーレイ・ディスク (BRD) に落とせば、いつの日か金正日の1万巻を超す事が出来るだろう、と考えた。早速、電機屋に行ってブルーレイ・プレイヤーとBRDを購入しようとした。しかし、どちらも予想以上に高かった。BRDは1枚、1万円近くした。1枚に2巻のハイビジョン映画を収録したら、1万本を収録するには5千万円かかってしまう。諦めようかと

思っている私に、電機屋のお兄さんが『ソニーの製品ですから、日本で買えばもっと安く手に入るでしょう』と言った。日本に一時帰国する理由が3つ出来た。

そしてなによりも、日本に帰れば徐々に、防腐剤の入らない美味しい日本酒が、思う存分飲める。私の五臓六腑は早くも成田に向かって飛び発っていた。

2015年11月24日

【世界最北の日本レストランーフィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（61）】 一時帰国、感激の日々



ポリ中央協会

11月第3週の初めに、真っ暗だったフィンランドから、私の目には眩し過ぎるほどの秋天の成田空港に降り立った。

帰宅するまではとても待てない。空港内のコンビニで、「何はともあれ、駆けつけ3杯」とカップ酒を3本と烏賊の薫製を買った。成田エクスプレスの中で、国民歌謡「舟歌」の♪ お酒はぬるめの爛（カン）がいい 魚はあぶったイカでいい ♪ を思い出しながら、久々に見る千葉の田園風景を車窓から楽しんだ。それにしても、日本は便利な国だ。コンビニで酒が買える。北欧のスーパーやコンビニでは5度以下のビールしか買えない。

後ろの席に座っている女子学生達が生きりに「オタク」とか「ニート」と言っていて、意味の判らない会話をしていた。帰宅してから娘達にその意味を教えてもらった。オタクは身に覚えがあるので良しとし

たが、問題はニートだ。北欧では潜在的に労働力が不足していたのだが、地方の製造工場が続々と中国に移ってしまい、又ユーロに加わった東欧諸国から、低賃金の労働者達が、建築業やサービス業を中心に多数流入した。労働組合の強い北欧では、企業はベテランの労働者の首切りをする訳にもいかず、結果的に新卒の採用人数を減らさざるをえなくなった。その結果、地方に住む若者達の失業率が急激に高くなってしまった。

ニートのように、働く場所があっても働く意欲が無いなどとは、とんでもない事だ。俄に日本の将来が心配になってきた。

自宅に戻るのは、4年8ヶ月ぶりだ。太平洋戦争と同じ長きに亘ってフィンランドに居たのだ。この年月は、私にとっても戦争にも似た、苦難の連続であったから、それをもって、家族をほったらかした罪滅ぼしとしよう、等と勝手なことを考えながら玄関の扉を開いた。激怒されるか、涙して喜ばれるか？

さにあらず、青春まっただ中の二人の娘からは『あらまあ、珍しい』、友人達とお食事会で忙しい女房殿からは、『あらまあ、早かったじゃない』と拍子抜けだ。子は母がいれば、母は子がいれば良い、という事のような。よく耳にする「亭主元気で留守が良い」という嫌な言葉は、私への言葉でもあったのだ。

家に戻って最初に驚かされたのは、家中に沢山のゴミ箱がある事だ。私が何かを捨てようとする、「これはコッチ」「それはアッチ」といちいちクレームが入る。訳を聞くと、ゴミの分別収集の為だと言う。ポリでは、庭先の大きなゴミ箱にどんなゴミでも一緒に捨てられる。その事を家内に言うと『ポリって、そんなにだらしのない町だったの！』と言われてしまった。『いくら僕だけが分別したって、誰かが規則を破れば、市は再分別をしなくてはならないじゃないか。2度手間は不合理だよ』と反撃したが、『日本では、日本人がするようにしなさい』で話しは終わってしまった。

日本の社会はかくも性善説の上になりたっているのか！と今更ながら驚かされた。欧米社会は性悪説の土台の上に在る。日本では何処に行っても自動販売機があるが、欧米では、滅多に見る事がない。壊されてお金を盗まれると考えているからだ。そこで最近、携帯電話によって決済する自販機が出始めた。電話会社を通しての、小額の銀行決済が合理的とは到底思えないのだが。

平和憲法を守っていれば、他国は攻めてこない、と思うのは日本人だけかもしれない。永世中立国のスイスもスウェーデンも、軍備には莫大な予算を配分している。中国の古典「大学」にも「小人閑居して不善をなす」と書かれている。小人とは君子以外の全ての人を指す。人はすべからず、教育を受けねば悪い事をする、と言っているのだ。中国社会もやはり、性悪説の上に築かれている。戒律の厳しい宗教を背負っている多くの国々も、性悪説の結果であろう。

日本でも唐から入った密教の、真言宗や天台宗では厳しい戒律が定められていた。その後、平和の島国日本では、親鸞などが寛大な大衆宗教に変えていった。

さて、時差ぼけの到着2日目には、頼まれた事からやっけてしまおうと、蒲田に向かった。ポリで行きつけの床屋さんから頼まれた、ハサミを買いに行ったのだ。どこの物より、日本のハサミが良いという。美容用品のカタログを見せてもらったが、ハサミの頁では、スウェーデン鋼を使用した一流品、ドイツのヘンケルやフィンランドのフィスカールより数倍高い値段が付けられていた。そのリストに、販売店の蒲田の住所が載っていたので、品川から京急に乗り込んだ。運良く座れたソファの心地のよさに感激した。

実は、日本に発つ前日の朝、トウミネン教授が訪ねて来て、『突然だが餞別として受け取ってくれ。今日の午後にこの国を代表するバイオリニスト、ペッカ・クーストがポリの教会でコンサートを開く。使用するバイオリンはストラディヴァリウスだ。私は急用で行けなくなったので、切符を貴男に譲る』

こんな忙しい時に、はた迷惑もいいところだ、と一度は憤慨してみたものの、もし私の飛行機が落ちたら、ストラディヴァリウスの音色を耳にせずして死んで行くのを、さぞ後悔するだろうと考えた。

カソリックの国では、大きな教会を大聖堂と呼ぶが、プロテスタントの北欧では、いくら大きくても教会は教会としか呼ばない。ポリには3つの教会があるが、区別するため、一番大きいこの教会を中央教会と呼んでいる。

私は時間ぎりぎりに教会に入ると、市長のためにでも取っておいたのか、最前列の中央の席が一つだけ空いていた。外人だから許してもらおうと、ずうずうしくその席にすわった。ストラディヴァリウスを鼻先で聞ける事はざらではない。

この名器にはいくつもの逸話があるが、「千住真理子さんが兄弟の援助を受けて、3億円程で購入した」と、日本から送られた新聞で読んだことがある。日本のバイオリニストとしては、4人目というが、世界では現在500丁程の存在が確認されている。その殆どは銀行や財団が所有するもので、今回聴けるものは北欧最大の銀行であるノルディア・バンクから貸し出された一丁だった。

ところが、演奏が始まって数分座っていると、お尻が痛くなった。欧米人は教会のツルツルの板張りのベンチで、子供の頃からお尻を鍛えられていたのだろうか。平日の昼間だったので、大部分の観客は女性であった。若い娘達は、はち切れんばかりのお尻をしている。中年はさらにその厚さを増す。クッションの必要などはないのだ。

私はレストランを始めてから、俄かシェフの悲しさ、揚げ物に使う油が鼻について、食事が激減していた。82キロあった体重が、夢だった60キロ代に突入していて、お尻の肉は薄くなっていたのだ。最前列の中央に座ったバチが当たったのだろう。途中退席するわけにはいかない。1時間半は拷問を受けているようで、ストラディヴァリウスどころでは無かった。

3日目の午前中は、アポを取っていた武蔵小金井にある農工大を訪ね、手続の勉強をして、午後には

3件のペット・ショップに行って、犬の毛と羊毛を混紡して作る、ニュービジネス案を披露した。結果は前述したように、「温暖な日本での需要期はクリスマスとヴァレンタインだけに限られて、ビジネスにはならない」と断わられてしまった。

4日目は合羽橋にいて、大椀とドンブリを仕入れた。店側がそれらを航空便でフィンランドに送ることを承諾してくれて、ホッとした。その足で浅草橋に行き、ブルーレイ・レコーダーとディスクを、フィンランドでの半値で買う事ができた。お蔭で、往復の旅費が浮いたと喜んだ。

ところが、最終の2日間は久々に、かつての部下達が、奈良は法隆寺傍の割烹旅館で、私の帰還を祝って泊まりがけの飲み会を催してくれた。

料理は店のカンパンの「テッサシ」と「霜降りの松坂牛」「伊勢・桑名の海老や貝」「鳴門の渦潮で揉まれた平目やスズキ」等の近在の珍味を肴に、伏見の純米吟醸酒で飲み明かした。女将のはからいで三味線も入った。

飛行機や新幹線で来てくれた人も多かったし、このメンバーだと、飲代は当然のように私もちになる。クレジットカード一枚では払いきれない程、皆よく飲んでくれた。

歌や句の世界では藤原定家以来、他人の作品の一部をパクっても、高等技法の「本歌取り」として、高く評価されている。そこで思わず私も、子規の句をパクってしまった。 酒飲めば 金が減るなり 法隆寺 (赤面)

2015年12月21日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（62）】 聞かなきゃ良かった



クリスマス、ヘルシンキ中央教会

東京からヘルシンキへの帰りの機内で、運悪く隣に座ったのは、太った若い男だった。常々私は、飛行機代は目方で決めるべきだと考えている。そうすれば、多くの人がダイエットに励み、結果として世界の医療費の総額も減るに違いない。

隣に座ったその男は、私が英字新聞を読んでいるのを見て、『私はスウェーデンのウプサラ大学で神学を学んでいます。この一ヶ月間、京都の禅宗の寺々を見て来ました』と英語で自己紹介を始めた。ウプサラ大学といえば北欧最古（1471年創設）の大学であり、18世紀には有名な植物学者リンネを、20世紀にはノーベル賞受賞者を8人も輩出している名門大学である。

彼はいきなり『貴男は仏教徒ですか？』と質問してきたので、『家の宗旨は仏教だが、私自身は俗人だ』と答えた。『それは良かった。俗人ということは、どの宗教に対しても中立ということですね？』『その通りです』

そして、次に彼は『貴男はキリスト教について、何か知っていますか？』と、無礼な質問をしてきた。

私が子供の頃、家のそばにプロテスタントの小さな教会ができた。何をする処かと覗き込むと、牧師の奥様と思える若いブロンドの御夫人が招き入れてくれた。そして、当時では珍しい片面にチョコレートが塗られたビスケットと紅茶をご馳走してくれた。とても美味しかったが、それよりも彼女を見て、「世にこれほど美しい女性がいたのか！」と感動したことを覚えている。後に母から、『家は代々仏教なので、耶蘇教はダメです』と言われて、足が遠のいてしまった。しかし、キリスト教は私の中に、「美しいもの」というイメージが定着した。

隣に座った男に、もし私がその話をしたなら、きっとヘルシンキまでキリスト教の素晴らしさを説教されるだろうと考えて、『中世の魔女狩り、異端者への迫害、聖母マリアの他にも、イシスのマリア、マ

グダラのマリア、黒いマリアが居た』と、キリスト教徒が嫌がる事ばかりを挙げてみた。

すると彼は太い首を前後に揺すりながら、笑顔で『そこまで知っていれば話しは早いのです。現代のキリスト教徒は聖書研究の進歩から、著しく取り残されていて、負の歴史を知っている人は、ほとんど居ません。神父の言うことは全て正しいと思いこむように、プログラムされているのです』と言った。

専門家におだてられて、少し嬉しくなった私は逆に『神学徒の貴男が、キリスト教を信じてはいないのですか？』と突っ込んでみた。『学問は疑う事から始まります。神学者の中に、聖書を肩書き通りに受け取っている者はいません』

さらに私は、『貴男はどうして神学に興味をもったのですか？』と訊ねてみると、『私と母はスウェーデンで生まれましたが、祖父はドイツ人、祖母はイギリス人でした。そこで、家には3カ国語の聖書がありました。私は子供のころから読書が好きでしたし、3カ国語の読み書きもどうにか出来ましたから、それらを何度も読み返しました。どの聖書も章立などは同じでしたが、内容はかなり違っていました。長ずるにつれて、その3つの聖書とも多くの矛盾と不合理な点が多々ある事に気がきました。翻訳のミスもあるでしょうし、グーテンベルグが発明した印刷機が普及するまでは、福音書士達が写経を繰り返したので、写し間違いもあるでしょうし、その人達が都合の良いように書き変えたこともあったに違いありません』

なるほど。そう言えば、たった数十年前に作られた日本国憲法ですら、いろいろに解釈されている。一千年前に書かれた源氏物語は、江戸中期の国文学者本居宣長が「もののあわれ」という新解釈を加えてみると、江戸の娘達に大いに喜ばれた。以後、瀬戸内寂聴や大塚ひかりの現代に至るまで、おびたしい数の源氏物語が世に出された。失われてしまった原本は、写本に次ぐ写本の後、多くの新解釈が作家達によって挿入された。紫式部が平成版を読んだら、大笑いするに違いない。

私は太った聖書学徒に、『聖書のどこがどう間違っているのか、素人の私にも判るように簡単に教えて下さい』と問うてみた。

『例えば、ヨハネの福音書（AC.80年頃書かれた）の有名な序章に、“はじめに言葉ありき。言葉は神と共にあり、言葉は神であった”とありますが、意味がよく判りませんでした。偶然読んだ聖書学者の注釈書に、“新約聖書は元々ヘブライ語で書かれていました。ギリシャ語に翻訳された時、もともとは「女」であった語彙を「言葉」にすり替えられてしまったのです”と説かれていました。その学者の言う通りに文章を読み直してみると、「はじめに女ありき、女は神と共にあり、女は神であった」となって、イエスの境遇に整合しているし、万人が理解出来るようになります。

そして、聖書にはイエスの誕生や成人してからの事は書かれていますが、青少年期をどう過ごしたかが、全く書かれていない事に私は違和感を覚えました。調べてみますと、キリストの「復活」を信じていない学者の多くは、“イエスは青少年時代をエジプトで過ごし、もっぱら魔術（手品）を学んでいまし

た。磔刑に処せられた後、棺の中から復活する奇跡を、習い覚えた手品によって演出したのです”と語っています。

又、聖書には、時の為政者が利用し易いように、曖昧な、時には矛盾する文章が数多く含まれています。「博愛や善行」を奨励する文章があるかと思えば、中世に行われた魔女狩りや、異端者の迫害を是認する「裁き」の文章も併存しているのです。

現代の多くの神学者は「新約聖書はキリスト教を普及するための分厚い宣伝パンフレットです」と言い切っています。

古代の宗教はモーゼのユダヤ教（紀元前 1200 年頃より）を除くと、ほとんどが多神教で、神々の中でも、女神がもっとも崇拝されていました。特に貴男が言った、イシスのマリアはイエスが生まれる前の千年の間、夫であるオシリスと共にエジプトの最高神として崇められていたのです。エジプトに住んでいた黒人の中には、イシス像を黒に塗って、より親近感の持てる黒いマリアに作りかえました。キリスト教が普及される以前は、神の下、女性と男性に上下の差は無かったのです。

新約聖書はイエスを唯一、至上の神とする為に、イエスを産んだマリアを処女受胎者として、神秘性を添加すると共に、聖母マリアを人間の女性より高きに位置づけました。

しかし、当時のキリスト教にとって、大きな二つの不都合が残りました。それは、イエスを洗礼したヨハネと、イエスの死に最後までよりそったマグダラの存在でした。ヨハネは宗教家として非情に有能であり、絶大な人気を博していました。又、マグダラはイエスから最も信頼され、同時に周囲の人からも深く愛されていました。

そこで、新約聖書の中で、ヨハネに“私の後に、もっと偉大な神が来る”と言わせて、その偉大な神こそがイエスである、と思わせるようにしたのです。一方、マグダラに関しては、“出自は売春婦であったが、イエスが彼女を改悛させた”として、彼女の地位をおとしめ、同時に女性全体の地位を暴落させたのです。

男を優位に位置づけるキリスト教は、戦争による領土の拡大を最優先していたローマの王や将軍達には、とても都合の良い宗教でした。その結果、キリスト教はローマ世界に瞬く間に普及したのです。その後、イシスやマグダラを崇拝する人達を徹底的に迫害したのです』

話がそこまで来た時、私は彼に『ところで、貴男はなぜ京都に言って禅宗を勉強したのですか？』と聞いて話題をそらせた。

『禅宗は日本を代表する宗教として、多くの英訳本が出ています。その中に僧侶には僧正、権僧正、大僧正、等々の多くの階級がある、と書かれていました。キリスト教の神父にも司祭、司教、枢機卿、

等々の多くの階級が設けられています。どちらも、上に行けば行く程、事の神髄に迫れる点が共通である、と知りました。一度は禅寺に行って、教会と寺院がどう同じで、どう違っているのかを肌で知りたかったからです』

宗教談義を聞かされているうちに、やっとヘルシンキ空港に到着した。

ストックホルムに向かう彼と別れて、私は入国手続きの長い列に並んだが、機内で聞いた話が頭から離れず、私の脳内にもそれに呼応するかのような、嫌な疑問が湧いてきてしまった。

今や女性は、首相にも大統領にも、ラグビーやボクシングの選手にさえもなれる。しかし宗教界だけは女性を、依然として低い階位に押し止めている。

その理由は、「男女平等をキリスト教が歪曲した」、という極秘事実を知られないようにする為ではないか？ 司祭より高階位の者に妻帯を禁じているのも、枕話にその秘密が妻に漏れてしまうのを防ぐためではないのか？ 神の下では誰もが平等であると言いながら、SGBT(性的少数派)だけは、認めようとしないのも、彼等を男女の中間と考えて、これを認めると秘密を守る外堀が埋まってしまう、と恐れる結果ではないのだろうか？

空港を出たのは夜半近くで、ポリには帰れない。予約したホテルに行く途中で、ヘルシンキ中央教会の前を通ると、すでにクリスマス・ツリーが飾られていた。(このコラムの最上部に常時添付されている写真とほぼ同位置に)

私には、クリスマス・ツリーのLEDの輝きさえ、男におとしめられた女神や、魔女狩りの犠牲になった、女性達がこぼす恨みの涙のように見えた。

聞かなきゃ良かった恋人の過去を、聞いてしまった時の様な、嫌な気分だった。そして、茶人・肖柏夢庵が「茶会での禁句」として詠んだ

「我が仏 隣の宝 嫁姑 いくさの手柄 人の良し悪し」

を思い出して、宗教の話は空の上でも、軽々に口にするものではない、と教えてくれていた様に思えた。

2016年01月25日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（63）】 殺し文句



ポリ、元日を迎える花火

マレーシアで起きた大津波の惨事後、しばらく遠慮していた大晦日の花火は、ブランクを取り戻すかのように、コケマキ河畔の家々から打ち上げられて、ポリの夜空を美しく飾った。

花火を見たあと私は、恒例のロシアクラブでの年越しパーティーに出席した。



オーランド島旗

スピーチ好きなロシア人のパーティーでは出席者は必ず何かを話さねばならない。スピーカー達は日本の連歌師のように、前任者の話題を上手に受けて、話を盛り上げて行く。最初のご夫人のスピーチ『父は娘の私に向かって、口癖のように“男は顔で選ぶな。金持ちか、力持ちを選べ”と言いました』を聞いた私は、日本にも全く同じ事を詠んだ川柳「色男 金と力は 無かりけり」を思い出して、思わず吹き出してしまった。

次に若い女性が『私の父はロシア人ですが、母はスウェーデン人です。その母から、伴侶は“退屈か？ 退屈でないか？”で選びなさいと、教わりました』

次のロシアの中年のご夫人は『ここ北欧ではいくら稼いでも、ほとんどを税金に取られますから、金

持ちより、面白い人を伴侶にした方がよいのでしょう。でも、くたびれた亭主よりハンサムな若者や口説き上手な中年男の方が、退屈しないに決まっています。だから、北欧人の離婚率が高いのだと思います』と反論した。

続くスピーカー達も、若者を口説いた話、中年に口説かれた経験談を次々に披露した。私の番になるまでに、これに沿った面白い話を見つけねばならない。都々逸や川柳、ハリウッド映画やハイネの詩は口説き文句の宝庫なのだが、あせってしまうと適当なものが思い出せない。どうやら読書や映画から得た知識は、実体験や人から直接に聞いた話のように、記憶の溝に深くは刻まれないようだ。

ネットや携帯、そして合コンなど無かった時代は、稀に訪れる異性との交際のチャンスを大事にしなければならなかった。江戸や明治の頃は、相手が答えに窮するようなストレートな表現は御法度で、「月がとても美しい」と言って、「私は貴方が好きだ」の代わりとした。

私の青春時代は、もっと具体的で、かつ意表を突く言葉が評価された。極め付きの口説き文句を、日本では「殺し文句」という。英語の MACK に近い。

私のスピーチの番になって思い出した殺し文句は、男女間ではなくて、私が顧客に対して使ったものだった。

あるクライアントの社長から大変好かれていたのだが、どういう訳か窓口役の総務部長から嫌われて、私の企画書に対して、ことごとくクレームをつけられた。ある日、部長は珍しく上機嫌で、私の企画書にも、“今回は良く出来ているじゃないか”と言った。しめた！私はいつ使おうかと用意していた殺し文句、“貴方に褒められたくて”を言ってみた。以後、彼は私の企画書にクレームを付けなくなったばかりか、食事にも誘ってくれるようになった。（この殺し文句は、高倉健が母親から、“立派な俳優になったわね”と褒められた時に最初に使われた、とされている）

司会者から『それは良い言葉ですね、私もいつか使ってみましょう。でも私は、日本の男性が女性を口説く時の殺し文句を聞きたいのです』と言われてしまった。

とっさに思い出したのは。友達の手柄話だった。『古い友人に詩人がいます。昔、詩人はルンペン（ホームレス）の同意語でありましたが、どういう訳かその彼に美しい娘が嫁いできたのです。私は彼に、“無一文の君に、どうしてあんな美人が来たんだ？”と問うてみました。彼は“何度もふられましたよ。でもある日、多摩川土手のベンチで、君のマツゲを春風が渡っているよ！”と言いました。するとその後、全てが上手く運びましてね”と話してくれました』

すると、司会者は『友人の美しい殺し文句は判りました。あなたご自身は、どんな殺し文句を使った事がありますか？』とさらに攻められて、私は大昔の恥ずかしい話を披露せざるを得なくなった。

『アメリカの大学に留学中、キャンパス一のマドンナと呼ばれた娘と、校内の食堂で隣り合わせました。この機会を逃してはいけません。しかし使い古された殺し文句は聞き飽きたらう。そこで1970年代の初頭に千家和也が発表した“美し過ぎて、君が怖い”という詩（後に、野口五郎のヒット曲になる）を思い出して、彼女にぶつけてみました。すると、日頃もの静かな彼女が、“そんなすごい MACK は初めて！でもここは、ランチ・タイムの学食よ！”と大声で笑い飛ばされてしまいました。そして、この話は翌日にはキャンパス中を駆け巡ってしまったのです。当時私は、父が経営する会社の米国代理店から学費の援助を受けていたので、ゆとりのある学生生活を送っていました。友人との会食はいつも私が持ちましたが、何の代償も求めなかったため、“クール・ボーイ”と呼ばれていたのです。しかしこの時以来、“プレイ・ボーイ”に変わってしまいました。殺し文句は、時と場所をわきまえねばダメだと悟りました』

この話は大いに受けたのだが、この日の注目は私のスピーチが終ってから入室してきた、ステファン君に移った。いつもはロシア人のジェシカ嬢に連れられて来るのだが、この日は頭をかきながら一人でやって来たのだ。彼は両親ともフィンランド人だが、フィンランド語が話せず、外人クラブに出入りしていた。

それには訳がある。彼が生まれたのはフィンランドとスウェーデンの中間に位置するオーランド島だった。ご多分に漏れず、長きに亘って激しい争奪戦が両国間で行われていたが、百年程前、国際連盟の副事務局長であった新渡戸稲造（前の五千円札の肖像＝東京女子大の創設者の一人）が、「島の領有権をフィンランド国に」、「公用語をスウェーデン語に」する提案をした。即ち地理的にはフィンランドに、文化的にはスウェーデンに帰属することを提案したのだ。大義を勝ち得たフィンランドも、実利を得たスウェーデンも、この案をのんだ。島旗（添付写真）は両国をイメージするデザインが選ばれた。以後今日迄、平和な一大観光地として繁栄を続けている。新渡戸稲造のような大思想家が現在いたら、竹島や千島問題はとっくに解決されていたに違いない。

さて話を、ステファン君に戻すと、彼はオーランド島に生まれたが故、フィンランド人でありながら、スウェーデン語しか話せなくなってしまった。その彼が、この数日前、とんだトバッチリでタブロイド紙を賑わしてしまったのだ。

この国、最大手のアパレル会社を所有する老人が、お抱えのモデルを愛人にしていた事が発覚してしまい、記者達はそのモデルを追いかけ廻し、やっとインタビューに漕ぎ着けた。モデル嬢いわく『あの人は、もう別れました。今のボーイフレンドはポリに住む、ステファン君です。若いのに、小さいけれど不動産会社を経営しています。でも、とってもケチで、毎日バナナ一本しかくれません。だから彼とも別れようと思っているところです』と彼の会社名と実名を言ってしまった。

この記事が出て、ステファン君はポリの男達から“ミスター・バナナ”と呼ばれ、女性達からは“ジェシカが可哀想”と言われてしまった。

それでも、大晦日を一人で過ごすのはよほど寂しかったのか、パーティー会場にやってきたのだ。

「よくノコノコやってこられたわね」と、御夫人達は囁いていた。私は彼の勇気を称えようと、彼と握手をしながら、『バナナ1本はたいしたもんだよ。ぼくならブルーベリー1粒しかあげられない』と言ってあげた。この一言で会場の雰囲気も和らぎ、彼は元気をとりもどした。パーティーが終わろうとする頃、私は彼に『スーパー・モデルをどうやって口説いたんだ?』と聞いてみた。

彼は『僕は元カレのように金持ちではないけれど、僕なら君を毎晩天国に連れて行ってやるよ』と、口説いたそうです。すこし野暮だがお国柄、このくらい率直の方が良いのかもしれない。私は、もう一度若くなりたい、と思った。

2016年02月22日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（64）】 神秘なる日本語



氷結したコケマキ河上流

2月も下旬になると、ポリの町は1年で一番寒い日を迎える。明け方零下20度まで冷える日も珍しく無く、昼になって零下5度に上がると暖かくさえ感じられる。人の感覚はすべからく相対的であるらしい。

私の好きな短歌に、江戸末期の歌人・橘曙覧（たちばなあけみ）が詠んだ

“楽しきは たまに魚煮て 子供らが うまいうまると 言ひて食ふとき”
がある。



コケマキ河に合流する支流

この歌からは、人間の二つの感覚について相対的である事が読み取れる。一つは、幸福に関する感覚である。貧しい暮らしをしていると、子供の笑顔だけで幸せを感じられる。二つ目は、味覚である。ハンバーグで育った現代の子供達には、煮魚の美味しさはなかなか分かってもらえない。

北欧の清涼な夏も美しいが、北欧らしい本当の美しさが見られるのはこの時期だ。所用があって、コケマキ河上流に住む友人を訪ねたが、内陸に進むにつれて寒さは厳しさを増し、支流や小川がこの大河に流れ込む地点（添付写真）では、凄まじくも美しい光景と出会った。芭蕉や蕪村がこの光景をみたら、

どんな俳句を詠んだであろうか。

私はルールにうるさい俳句は苦手で、何でもありの川柳しかやらない。俳句はもっぱら自然を、川柳は世間を詠むのだが、この光景を見て俳句を勉強しなかった事が悔やまれた。

熊や鹿たちは、この絶景を毎日楽しんでいるのに、人は美しいところには住まず、ごみごみしたところに集まる。それとも、人間が住むと、美は逃げ出してしまうのか。自然美は明らかに文明と反比例している。美が利便性に負けてしまうのは、悲しい限りだ。

日本へ1週間たらずの一時帰国をしてから2ヶ月が経つと言うのに、いまだに日本を発つ早朝のことが忘れられない。ラジオを聞きながら、帰り支度をしていると、ドナルド・キーンによる新古今和歌集の解説が聞こえてきた。新古今和歌集は日本文学の至宝と言われ、解釈はすこぶる難しい。しかし米国人の彼が、日本の誰よりも判りやすく教えてくれた。

先入観を持たずに、純粹に日本語を勉強した外国人だからこそ、外連味の無い、爽やかな解説が出来たに違いない。

幕末から維新にかけて、日本を訪れた西洋人が、一番驚いたことは、荒ぶるサムライが短歌をたしなみ、裏長屋に住む庶民が、俳句や川柳を詠んだ事だという。西洋人のほとんどは、一生に一度たりとも詩を詠む事がない。

来訪者の中でも、英国人バジル・チェンバレン（1850～1935）は日本の文化、特に日本文学に魅せられ、古事記を英訳して出版までした。かの有名なラフカディオ・ハーン（＝小泉八雲、1850～1904）は、アメリカに留学中の貴族院議員・服部一三からこの本を贈呈され、日本文化に魅せられて来日し、帰化してしまった。

又、維新にまつわる多くの歴史書や映画に登場する、英国の外交官アーネスト・サトー(1843～1929)は通訳官として、日本の文明開化に大いに貢献した。チェンバレン、ハーン、サトーは三大日本学者と呼ばれているが、三人の共通点は、神秘主義者であったことだ。彼等語学の天才たちには、日本語が大いに神秘的に映ったようだ。

そのハーンは、「川柳は言葉の手品である」と述べている。ドイツの哲学者ニーチェは短い文書で、ドキッとするような名言を沢山残している。例えば「真実などは無い。あるのはその解釈だけだ」「人は愛と革命のために生まれた。」「愛の終着は、善悪では計れない」等々。しかし、これらの原文を見て、アルファベットを数えてみると、どれも数十文字を消費している。それに比べると、日本語はすごい。芭蕉の句、「荒海や 佐渡によこたふ 天の川」は、たった17文字で宇宙さえ飲み込んでしまった。

実は、去年の9月に載せた私のコラム（59号 別れの秋）の末尾で書いた、私が兎を抱かなかった理

由を、「手に取るな やはり野に置け 蓮華草」の句にかこつけたが、これに対して古い仲間からクレームが入った。「この句の作者・滝野瓢水を、俳人にして奇人、と紹介している以上は、句の裏の意味も解説すべきではないか」とお叱りをうけた。

句の主演「蓮華草」は、実は瓢水が入れ込んだ女郎の源氏名であった。彼は彼女本人や周囲の人達に“近いうちに蓮華草を水揚げする”と公言してしまった。ところが、懐具合が悪く、水揚げどころではない。そこで、この美しげな句を詠んで、世間を煙にまいてしまったのである。まさに手品に他ならない。

残念ながらフィンランド語をマスターしていない私は、彼等の誇る叙事詩「カレワラ」を読むことが出来ないばかりか、日常交わされる冗談や駄洒落も理解するに至っていない。

英語でなら文章もジョークも多少は理解出来る。英米人も言葉の遊びは好きだ。私は昔、クラスメートから、“CAN CAN CAN CAN.”の意味がわかりますか？と質問されたことがある。子犬が吠えているのではない。その答えは「缶屋さんはブリキを缶に出来る」だそうだ。ブリキは tin であるが、この際は can でも良いようだ。

しかし、言葉の遊びでは日本語は傑出している。日本の狂歌に、うりうりが うりうりにきて うりのこし、うりうりかえる うりうりのこえ（瓜売が、瓜、売りに来て、売り残し、売り売り帰る、瓜売の声）がある。他の言語では到底競えない。

多くの言語に精通するキーンは、著書「日本語の美」の中で、漢字と音標文字を混用する日本語がおそらく世界で一番難しい言語だろう、と述べている。

そして、世界中の主な言葉のほとんどが pre position（前位置）語であるのに対して、フィンランド語と日本語は post position（後位置）語であり、語尾の変化によって状況を伝達している。このことが、外国人に対して難しさを倍加している。

私は何度か、欧米の自治体から頼まれて、市民に日本語を教えた事がある。日本語には、文法等は在って無きが如くで、ほとんどが慣用語にこなれてしまっている。私がやれた事と言えば、日常多用される言葉を丸暗記させることだけだった。これでは教えたことにならない。日本語の難しさに気づいたのは、この時だった。

日本語は難しいだけでなく、美しさも格別である。日本の叙情詩を、解説したり、意味を教える事は出来ても、外国語に言い換える事は不可能である。

平家物語の冒頭 “祇園精舎の鐘の声、諸行無情の響き有り”の美しさを他の言語に直訳する事は出来ようか。日本酒の美味さを、小麦粉で再現する事が出来ないのと同じだ。

他方、ヴェルレーヌの書いた「秋の歌（落葉）」を上田敏は「海潮音」で、

“秋の日のビヨロンのためいき ひたぶるに身にしみて うら悲し”

と原文より遥かに少ない文字数で、情緒を見事に再現している。まさに日本語は神秘である。

今、日本では少子化が加速し、人口の半減もさして遠い日の話ではない。その結果予想される経済の縮小は、生産性の向上で補えるかもしれない。しかし、この美しい言語を使う人の数は、まぎれもなく減ってしまう。これを救うには北欧諸国のように、子供の数により手当を累進的に増す政策を施すしか、術が無かろう。

“台所が苦しいから、もう一人こさえましょうよ”となる。

2016年03月22日

【世界最北の日本レストランーフィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（65）】 江戸の仇を北欧で



春近し、愛馬の試乗

3月も半ばを過ぎると、春の到来を予告するポリ独特の景色がある。郊外の雪道を競争馬のオーナー家族が、来るべきシーズンに備えて、愛馬にのって闊歩する風景だ。知人の馬主家族は、大きな2頭のサラブレッドに夫婦が騎乗し、その後から、小学生の娘が小型の蒙古馬に乗って隊列をなすのは、じつに微笑ましく、羨ましい光景だ。



障害レース

ポリの町は、地方都市でありながらも、競馬場を持ち、観光資源の一つとしている。ポリ競馬場では、かつて平場で活躍したサラブレッドの古馬達による障害競馬と、騎手が二輪車に乗って蒙古馬を速歩させる繋駕競馬（トロット）の二つが行われる。蒙古馬は、体は小さいがタフで牽引力がある。最大の特徴は、サラブレッドは大股で飛ぶ様に走るのに対し、蒙古馬は側対歩（添付写真）で、常に対側の2本の足が地上に接している。その為、馬上の揺れが少なく、子供でも安心して乗れる。



トロット競馬

ジンギスカンが世界一広い領土を得たのも、兵士が蒙古馬に騎乗しながら睡眠出来て、長い距離を短日間で走破したから、と言われている。

ポリ競馬場は、フランスのロンシャンやイギリスのアスコット競馬場のような華やかさは無いが、日本の競馬場と比べると遥かにカップルや家族連れが多く、雰囲気は上々だ。



側対歩とは

それでも日本と同様に、競馬の常習患者は財布が底をつくまで賭ける。競馬ファンは、勝った時には大酒を飲もうと、自動車ではなく電車やバスでやってくる。負け組はいずれも同じで、頭を下げてとぼとぼとポリ駅に向かう。誰がつけたか日本では“おけら街道”と呼ぶ。言い得て妙だ。

私の店に来る客達は皆、その日の勝ち組である。あぶく銭だから、飲みっぷりもよい。勝つ人は、度胸の良い人と決まっている。負けが続くと、穴馬に残金を賭け、逆転を狙う。一方、弱気な人は負けが込むと、掛け金を少なくして本命に張る。よって、逆転のチャンスは無い。言うまでもなく競馬は、胴元である行政がハナから数割を抜いてしまうので、客に勝ち目は薄い。競馬がある日私は、レストランを早めにパブに変身させて、勝者のおこぼれを頂戴する。

どういう訳か私は、競馬と縁が深い。留学生時代に貿易の仕事をした私は、スウェーデン製の赤外線による体表温・測定装置を日本に紹介した。人間の医療に使用するのには、薬事法上ハードルが高いため、まず獣医さん達に当たってみた。その一人が「競走馬の障害診断に使えるかも知れない？」と言って、多くの厩舎を紹介してくれた。以来、私は沢山の牧場のオーナーや馬主と知り合いになった。

ある日、重賞レースに勝った馬主からディナー・パーティーに招かれた。隣席したのは文筆家で、本業のかたわら、競馬新聞に解説記事を載せていた。彼は私より一回り年長であったが、出身大学が同じ

だったこともあって、以後しばらく親しく付き合わせて頂いた。その年の日本ダービーが開催される朝、私は彼から電話をもらった。『今日、一緒にダービーを見に行かないか』『お誘いは嬉しいのですが、海外出張が迫っているので別の機会にお願いします』『実は今朝方、変な夢を見ましてね。5番のゼッケンを付けた2頭の馬が、続けてゴールしたんだ・・・』 私はそれを聞き流して、電話を切った。

私は常々競馬関係者から『競馬で儲けるのは、行政と馬主から馬を預かる牧場主しかいない。馬券を買ったり、馬主になる夢をみていたら、いつかは破産しますよ』と注意を受けていた。しかし、その日の正午近くになっても、先輩から聞いた夢の話が忘れられず、私は立川駅の傍にある場外馬券売り場に行って、特券（当時売られていた1000円馬券）を10枚買った。

まか不思議にも、そのダービーで5枠に入っていたヒカルイマイとハバー・ローヤルの2頭が1、2着に入った。そして、連枠の賞金倍率も55倍だった。世に言う「昭和46年のゴーゴー・ダービー」である。当時の物価は現在の10分の1ほどの時代だから、手にした55万円は大金だった。しかし、それらはビジネスの資金繰りに回され、短期間で雲散霧消してしまい、先輩との交際も途絶えてしまった。

それから30年ほど経ったある作家の出版記念パーティーで、偶然その先輩と再会した。先輩はその後、いろいろあったようで、年齢以上に老いが顔に出ていた。パーティーの後、先輩を赤坂の飲み屋に誘い、彼の話聞いてやった。彼は、『小説を書く以上は、登場する人物の、内蔵を抉り出すように書かねばない、と常々思っていた。そのせいであろうか、描いた人物の家族やその末裔から“名誉毀損”や“プライバシーの侵害”で、何度も裁判沙汰になった。その都度、高い慰謝料を払わされて、なんとか和解した。こんな馬鹿な商売はやっていられない、と悟って筆を折った。その後は、「新人発掘屋」とか「出版周旋屋」等の肩書きで、人の書いた著作を出版会社に売り込む仕事をしてきた。今で言う「出版企画会社」だよ。まあまあこの仕事は上手く行っている』

先輩は文才だけではなく、商才にも恵まれていたのだ。以後、彼との親しい付き合いが再開した。

そして、この3月の下旬に、私の携帯に先輩から突然電話が入った。『今、ストックホルムに来ている。帰り道、フィンランドに寄る。ヘルシンキのホテルに2泊の予約をしているが、君の住むポリは遠いのかね？』『ポリはヘルシンキからかなり離れています。宿をキャンセルして、拙宅に泊まって頂けないでしょうか』と頼んだところ、快諾された。

彼はポリに着くなり、『これだけ広大な地だから、牧場も沢山在るでしょう。一度フィンランドの馬達を見てみたいと思っていたんだ』

その日はすでに夕方になっていたので、知人の獣医が開いた、ニューコンセプト“ペットのデパート”に案内した。倒産したスーパーの建屋を、獣医が買い取って、その広大な店内で、動物病院、ペット美容院、ペットフード、ペットの描かれたアパレル商品等々、ペットに関連するあらゆるビジネスを展開していた。先輩から『よいものを見せてもらった』と感謝された。

翌日、レストランを臨時休業して、先輩をポリの郊外にある障害馬の屋内調教所と、3つの牧場に案内した。

日本で牧場と言えば、主に牛が飼われているが、北欧では馬を飼う牧場が多い。農耕民族であった日本人は、畑を耕し、重い荷物を運ばせようと、力のある牛を大事にしたが、狩猟を糧とした北欧人は、獲物を追って早く移動しようと、牛よりも馬を大事にした。乗り物にしても、日本では牛車が多く使われたが、欧米ではほとんどが馬車であった。

この日の晩、地酒のウオッカを飲みながら彼は、『馬にも北欧にも詳しい君に質問するのは変だが、“有馬記念”の名前の由来を知っているかい？』

有馬記念は年末に行われる重賞レースで、性別や年齢に制限を付けず、人気投票で出走馬を決め、実力日本一を決定するレースである。観衆は10万人を超す一大イベントだ。しかし不覚にも私は、有馬記念の名の由来を知らなかった。

先輩は『戦後まもなく、イギリスで活躍したフィンランド生まれの女優、アリ・マキネンが日本にやってきた。競馬好きの彼女は、日本にヨーロッパの競馬事情を詳しく紹介し、当時、日本を統制していたGHQとの交渉にも大いに尽力してくれた。しかし彼女は1955年、急性白血病で日本滞在中に急逝してしまった。そこで競馬関係者は、彼女の功績を称え、翌年の1956年に彼女の名アリ・マキネンを冠した、有馬記念レースを誕生させたんだよ』私はおのが不明を恥じると同時に、この話に深く感動した。

翌日の朝、ポリ飛行場で先輩は『わずかだが、宿代の足しにしてくれ』と言って、私に封筒をくれた。彼を見送った後、その封筒を開いてみると、550ユーロ（約7万円）が入っていた。

帰国後しばらくして先輩から、「無事帰国した。貴地でいろいろ見せてもらって感謝する」旨のメールが届いた。すぐに私は彼に、宿代としてもらった550ユーロと有馬記念の由来を教授してくれたお礼をメールした。文中で、「女優アリ・マキネンの感動的な話を、ポリ大学の教授や、店に来る常連客に話したところ、皆、私同様に感動してくれました」と書いた。

すると、その日の内に先輩からのメールが戻ってきた。「君はあのお話を真に受けたようだね。誰の創作かは知らないが、競馬仲間ではかなり知られているジョークだよ。本当は、競馬界の重鎮、有馬頼寧の“中山競馬場の改装を機に、日本初の人気投票による競馬を”との提案でレースが始まったから、“有馬記念”と命名されたんだよ。・・・私はあの日ダービーで、ゾロ目が出るはずが無いと、5-5馬券を買わなかったんだ。後に風の便りで、君が『神のお告げで、ゴーゴー・ダービーを制した』と多くの人に自慢していた事を知って、本当に悔しかったよ。私に一円どころか、一言の礼も言わなかった君に、いつか敵討ちをしようと、チャンスの到来を待っていたんだ。江戸の仇を、長崎よりずっと遠い北欧で果たせたとはい、痛快、痛快！」と書かれていた。

チキショウ！ヤラレタ！ 私は先輩の「馬にも、北欧にも詳しい君に・・・」のおだてに、すっかり載せられてしまったのだ。宿代の額、550ユーロも、その当てつけに違いなかった。

「文士を友に持つなかれ、ろくなことはない。持つなら、医者か弁護士にしろ」や「人は借りた事はすぐ忘れるが、貸した事はいつまでも憶えている」などの、先達の教えを思い出しながら、先輩が土産に持ってきてくれたウイスキーを、ストレートで呷った。

2016年04月18日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（66）】 135%のショック



舞い降りるカモメ

ポリの春は、カモメと共にやって来る。ポリは港町であるが、氷河の後退により、その重さから解放された地盤は、今でもゆっくりと隆起を続けている。結果、コケマキ河がボスニア海に流れ込む河口は、450年程前に形造られた現市街から西北に約8キロメートル程、遠ざかってしまった。河口付近に出来た干潟には、沢山の魚貝、ゴカイやイソメ等の海洋生物が繁殖し、渡り鳥達の格好の餌場となっている。しかし、どういう訳かカモメは、ポリの中央広場までやって来て、ベンチに座る老人や旅人の目を楽しませてくれる。



佇むカモメ

フランスの有名なシャンソン「カモメ」によれば、カモメは海で死んだ船乗りの魂だと唄われている。だから、カモメは人恋しさに街場までやって来る、と言われている。

カモメを見ると私は、レストランの開店工事に貢献し、その直後に自殺した船乗りのメリミエスを思い出さずにはいられない。私が引き取った形見である、彼がいつも座っていた椅子は、店の裏庭の軒下に置かれている。わたしは、昼間の混雑が終わって、夕方の仕込みが始まるまでの僅かな時間を、その椅子に座って休息をとる。



飛翔するカモメ

しかし、春が連れてくるのは、カモメだけではない。納税という厳しい現実も、時を同じくしてやって来る。無償の教育や医療、そしてゆとりある老後の年金、これらをもたらしてくれるのは、全て税金である。

北欧では、成人の多くが確定申告をする。ただし、申告手続きは簡単で、収入から、収入を得るために使った経費を差し引いて、証拠となる給料明細や領収書を添付すればよい。

日本の税制の複雑さは、控除にある。基礎控除、扶養控除、医療控除、保険控除、住宅控除……。フィンランドでは、寄付控除しかない。控除が無いかわりに、手当が出る。子供が居れば子ども手当、老人には老齢年金、失業者には長期にわたる失業手当が出る。医療や教育費は只だし、塾などは存在しないので余計な出費は掛らない。

控除制度は一見素晴らしいように見えるが、長期間失業して収入が無い人は、所得税を納めないで、税控除は何の意味も無い。

北欧諸国は福祉国家と呼ばれ、天井の無い累進課税により、資本主義国家で誕生するような大金持ちになることは出来ない。収入の多い経営者でも、税引後の所得額は従業員と大差は無い。

それでは、経営者にとって、名誉以外に何のメリットもと無いか、と言え、そうでも無い。例えば、海外旅行や会食をした時、自分の裁量で、出張費や会議費として会社の経費に計上し得る。

又、経営者は起業の際、多くの支援が自治体から与えられる。私がレストランをオープンした最初の2年間、2名の料理学校の生徒が、通勤費も含めて無償で提供された。

又、慣習として税務署は、起業した最初の2年間は、経営者の申告税額に対して、寛容な扱いをする。私はレストランを経営する以前に、電子部品の貿易会社を2年間経営していたのだが、私個人と会社が提出した税務申告に対して、一切のクレームが付かなかった。

しかし、レストランを開業してから3年目のこの春、状況は大きく変わった。私の申告した個人の納税額が少な過ぎると、税務署から呼び出しが来た。出頭してみると、待っていたのは、毎年ニコニコ顔

で私の申告書を受け取ってくれる男性税務官ではなく、怖い顔のオバサンであった。

『これが、貴男が申告すべき今年の納税額です』と言って、フィンランド語で書かれた納税指示書を私の前に置いた。全部を理解することは出来なかったが、最終行に書かれた数字の大きさにビックリさせられた。納税額が、私のフィンランドにおける年収より大きいのだ。暗算してみると、税率は 135% になる。『そんな、馬鹿な』と私は英語で大声を出した。そのオバサンは英語が苦手らしく、私への説明をフィンランド語でし始めた。

「天井無しで、絞り取られる」という話は聞いたことがあるが、100%を超す税額はあり得るはずがない。私は、『英語で説明してくれる人を出してください』と又大声を出した。結局、翌日に上司の税務課長と面談する事になった。

家に戻って、数字をいろいろはじいてみた。すると敵は、私が日本で得ている副収入（家族の生活費に充当している顧問料や家賃収入）を見抜き、その額を私のポリ市での収入額に加えて、納税額を算出したものと判断出来た。収入額の上昇に対する税額の累進率が、急カーブで跳ね上がる為に、合算による納税額は、ポリでの年収の 100%を上回ってしまったのだ。

私は幾重もの抗弁を考えながら、税務課長と対面した。案の定、課長は若年の別嬪さんだった。税務署でも美人は出世が早いのだ。早速、私は彼女に、『日本での収入がなければ、私の家族は餓死してしまいますよ』と結論から言った。

彼女は『貴男が日本に家族を残してきたのは、あなたの選択です。ポリに連れて来ていたら、子供手当も、只の教育や医療も享受出来たのです』

なるほど、そのとおりだが、私は『こんな寒い所に、家内や娘は来ませんよ』と嫌味を言った。すると、彼女から『日本の家は木と紙で造られているので、冬は寒い、と読んだことがあります』と、逆襲されてしまった。

次に私は『日本での収入に対しては、キチンと日本で納税しています。ポリでも又その分の税金を払えと言うのですか？ 税金の二重取りじゃないですか！』『貴男が日本で払った納税額は、チャンと差し引いた上で計算していますから、2重取りではありません』 たしかに彼女の言うように、私の場合、いろいろの控除が差し引かれている為、日本での納税額は僅かなものでしかなかった。だから彼女の言い分の方が正論であった。

そこで最後に私は『課長さん、よく考えてみて下さい。もし課長が商社に勤めていて、ポリで半年、後に東京で半年、働いたとしましょう。課長の月給を 50 万円だとすると、ポリでの半年の収入は 300 万円で、それに対する税率は 30%程度でしょうから、課長はポリ税務署に 90 万円支払うことになります。

一方、日本での 300 万円の収入に対しては、いろいろの控除が認められますから、税金はわずか 10 万

円程度で済むでしょう。ポリ税務署と同じように計算した場合、課長は日本の税務署に対して“私は本年度、税金を(90+10)100万円納めました”と申告出来ます。すると、日本の税務署は課長に対して、過払い分の90万円を返納する義務が生じます。10万円しか税金を払っていない課長に、日本の税務署は90万円を支払うと思いますか?』

課長は私のしゃべった事をメモしながら、『上手い事を考えましたね。そんな言い訳を聞くのは初めてです。しかし、日本とフィンランドで結ばれた外交条約では、“納税は納税地の法律に従う”とあります。貴男の理屈は判りましたが、海外での所得を合算するのが、北欧税制の大前提です。ポリで事業をやられている以上は、フィンランドの税制に従うしかありません。高福祉社会を実現する為には、徴税は厳しくなくてはならないのです』『・・・ポリで私の生きる道は、庭を畑にして、自給自足をするしかない、という事ですね!』『ポリで納税する日本人は、おそらく貴男が最初でしょう。パイオニアはいつも、苦難に遭遇する宿命を背負っているのです』

私は彼女の美しくも冷徹な顔を見ながら、日本では“泣く子と地頭には勝てぬ”と言うが、北欧では“女性と税務署には勝てぬ”事を、実感していた。

2016年05月16日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（67）】
日欧、写真事情



庭先に春の花

5月も中旬になると、自宅の庭先にもデージーやフリージアが咲き、ホームセンターで購入した小鳥の巣箱も、前秋生まれた好奇心旺盛な子リスたちの、格好な遊び場になっている。

空は青く澄みきっているが、収入の135%を課税されたショックは大きく、一人である時は「これからどうすれば良いのか。もし、毎年こんなに高い税金を払わされたら、遠からず破産してしまう」とばかり考えてしまう。「人は死と税金からは逃れられない」という古今東西、頻繁に使われてきた諺が私を重く押しつぶしていた。

インターネットが発達して以来、どこに居ようと仕事は出来る。多くの日本人が税金の安いシンガポールや香港に移り住み、大金持ちは「節税」と偽って、タックスヘイヴンのケイマン諸島などに会社を設立する。



子リスの戯れ

私はまさにその真逆をやっていたのだ。大した資産も無いのに、よりによって北欧という最も税金の高いところに会社を持ってしまったのだ。こんな当たり前の事に気づかなかった私は“能天気”“経営者失格”と言われても弁解の余地はない。

ワラにもすがる思いで私は、ご無沙汰していた副市長と財務局長の2人を訪ねた。貿易会社・社長の時代は、市の行事には必ず招待されていたが、レストラン・パブのオヤジになってからは、招待状は来なくなり、役所の敷居が高くなって、すっかり足が遠のいていた。

2人とも快く私の話を聞いてくれたが、答えは『所得税務は国政の範疇で、自治体が関与する事は出来ない』だった。しかし、副市長から『今晚、自宅に来ないか。夕飯を一緒にしよう』と、優しい言葉を掛けてもらった。

食後のコーヒーを飲んでいる時、副市長は『たしかに135%の徴税などは、聞いた事が無い。でも、貴君は遠からず年金を受給する年になるのだから、貴君の受け取る年金もその分増えると考えたらどうでしょうか。銀行利息よりずっと良いはずですよ』と励まされた。

私は、『年金をもらう頃には、日本に帰っているでしょうから、その恩恵を受けられないと思いますが』と言うと、『北欧では、海外の収入も徴税の対象にする一方、年金は海外でも受給されます』

失望していた私に一条の光が差した。「今は苦しいが、長い目で見ると、得をするのだ」と考え直す事が出来た。だが一方、「それまで、家族と私はどうやって生活していけば良いのか？」の本題は解決されていなかった。

帰途私は、「日本での支出入はいじれない。変えられるのは当地での支出と給与だけだ」と考えて、帰宅するなりコンピューターに向かった。私は家計もエクセルに入力していたので、変動経費を選択して、数字の大きい方から並び変えてみた。すると、交通費（朝晩のタクシー代）、アルコール代、ホームパーティ経費が上から並んでいた。酒が主食の私には、食費はずっと下の方だった。

金額の大きい順から実行に移す事にした。翌朝は、タクシー会社には電話せず、代わりに物置に行った。そこには、冬用、夏用、そしてココが帰国の際に置いて行ったピンクの自転車の3台が並んでいた。学生のココには冬でもタクシーを使う余裕はなかったので、ピンクの自転車には、雪道でも走れるような思い切り太いタイヤがはめられていた。この自転車なら買出しに行く時也使えそうだ。

ココの自転車に乗って店に向かうと、ココが笑顔で『マスター、頑張ってるよ』と言ってくれる姿が目につく。自転車出勤は苦にならなかった。

次に金額の大きかったアルコール飲料については、高額ブランデーとスコッチ・ウイスキーを止めて、地元ウオッカ「コスケンコルバ」だけにして、フランスワインも東欧のハンガリーやチェコものに変えた。タバコもそうだが、嗜好品とは不思議なもので、慣れた銘柄のものが一番美味しくなり、飽きる事も無い。

もちまわりのロシアンパーティは、どこでも会費制であったが、私の家で行う場合は会費を一切とらなかった。恥ずかしくはあったが、幹事に135%の納税額について話し、我家でのパーティも会費を戴く事にした。その話はすぐにメンバー全員に伝わり、『貴男はそんなに大金持ちだったのですね！』と言われて、軽蔑どころか逆に、尊敬の目で見られるようになった。

結局、この3項目の節約で、変動経費の予算は実に4分の1に縮小した。固定費に関しても、左党の私には無用の長物だった車を売却した。隣国スウェーデンにはボルボとサーブの2つの自動車メーカーがあるが、フィンランドにはポルシェの下請け工場しかない。その為、中古車であっても、新車同様の私のシトロエンは想像より高く売れて、それだけでこの年の135%の税金は一括払い出来ることになり、月々の高額な自動車保険料も以後、只になった。

家賃や水道光熱費は安い。よって、月々の総家計費は、前年比6割減となった。そこで、私の月給も6割減らした。その結果、累進率の高いこの国の税制では、減額率も大幅で、日本の収入を合算しても税率は、フィンランドでの年収の55%と、アッパー・ミドルクラス並になった。

税務署に行き135%を納税したあと、美人税務課長を訪ねて、今期の収支予算書を提示しながら、その説明を口頭で行った。彼女から、『判りました。是非実行して下さい』と言ってもらった。

重税から逃れられたその夜、減多に見る事の無い、撮り貯めたデジタルカメラの映像をコンピューター

一画面に映し出した。写真とは素晴らしいもので、そこにはちゃんと、ココがいた。

かつて、日本人の女性は嫁に行く前に、写真を整理して、不都合な写真は日記と共に焼却したものだ。一番輝いていた頃の映像を燃やしてしまうのは“もったいない”の極みだ。歳取って、アルバムを開けば、そこには容姿が劣化する前の自分と、引き締まった体格の彼に再会出来たはずなのに。

その点フィンランドでは事情が異なる。酒の席で、ある中年男から愚痴を聞かされた。数年前ポリに引っ越して来た日、彼の本の一冊から、ポロリと昔のガール・フレンドの写真が床に落ちた。目ざとい奥方はそれを見逃さず、“こんなもの、そんなに大事なの！”とその場で、破り捨ててしまった。(その後も、事ある毎にその写真のことを蒸し返された)

引っ越し2日目、奥方が大事そうに運んでいた古い段ボール箱を、彼が隠れて開けてみると、中には大量の写真が入っていた。そのほとんどは、元カレや元々カレとの旅先での写真だった。彼は激しい口調で『これはいったい何だ？』と奥方に詰め寄ると、『それが、どうかしたの？』の一言で済まされてしまった。

「男女格差が世界一少ない国」と言われるフィンランドは、私に言わせれば世界一「女尊男卑」の国である。

人は年を重ねるごとに、未来への夢は萎み、その分、過去の思い出が大事になる。写真は過去を思い出させてくれるだけでなく、思い出が事実であった事を証明してくれる。

今や写真は、小指の爪ほどの大きさのメモリーカードに数千枚入ってしまい、婚前に写真を焼却したり、実家の押し入れに隠し持つ必要はなくなった。年長の夫が他界した後、日本女性には長い余生が残る。青春時代の写真を見ながら、甘美な思い出にゆっくり浸る事が出来るのだ。

ただし、それにはチョットした努力が要る。日進月歩する再生機器や記憶媒体に沿って、随時、画像データを移し換えていかねばならない。

“オバサンやオーバーサンにそれが出来るかな？”

2016年06月13日

【世界最北の日本レストランーフィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（68）】 バブルの遺伝子



飛翔する白頭鷲

一年で一番快適な北欧の6月中旬、「ポリの街は大自然のまっただ中にある」を思い知らされるハプニングがあった。

私がレストランの裏庭に置いたメリミエスの形見の椅子に座って、パンの耳をスズメ達にあげていた。すると突然、けたたましい悲鳴をあげてスズメ達が飛散した。椅子の上を覆うひさしの筋交いに、全幅2メートルほどに翼を広げた大鷲が舞い降りたからだ。



白頭鷲の怖い顔

大鷲はアルバトロス（アホウ鳥）、コンドルに次いで地球上で3番目に大きい鳥と言われている。周囲の森に棲んでいる事は知っていたが、まさか街なかに舞い降りて来るとは思っていなかった。鷲は、私があげるパンの耳に集まっていたスズメたちを狙っていたのだ。

前年末に日本へ一時帰国して、合羽橋でドンブリなどを仕入れ、豚汁と共にカツ丼、天井、親子丼をメニューに加えていた。寿司と比べて、顧客には材料原価が透けて見えてしまうので、あまり高い値段は付けられない。その結果、それまで中高年の多かった店に、沢山の若者達が来るようになった。当然、平均客単価は低下したが、夜のパブにも若者達が多く来るようになり、日本でよくある、「昼は宣伝、夜に稼ぐ」のパターンとなった。

昼一番の売れ筋はカツ丼だった。そのため、以前より遥かに多いパンの耳が生じて、自宅の獣人たちでは食べきれない程の量になった。野鳥に餌を上げる事は禁じられていたが、捨てるのはもったいない。そこで毎日のように裏庭でスズメ達に投げ与えていたのだ。スズメ達のコミュニケーション能力は高いようで、沢山のスズメ達が店の裏庭に集った。鷺はスズメの群れを大空から見ているのだ。

その日、久々に来店したニーネン医師（イサドラのマフラーで私の耳と指を救ってくれたヨハンソン女史の義弟。かつて狩猟を趣味としていた）にその話をすると、『それは、大鷺の一種“白頭鷺”です』と教えてくれた。私は恐怖のあまり、胸のポケットに入れていた携帯で、写真を撮る余裕の無かったことを悔やむと、彼は後日添付の写真を送ってきてくれた。

彼は、『しばらく寿司を食べに来なかったのは、アイスランドで遺伝子の勉強をしていたからです。DNAの異常に由来する病気が 5000 種類以上と判明した現在、遺伝子の勉強をしなければ医師は続けられないと感じたからです』と言う。

本来、このコラムの冒頭に書くべきだった「北欧」の定義であるが、ベルリンの壁が崩壊する以前は、普通「北欧3国」と言われ、スウェーデン、ノルウェーとデンマークを指していた。しかし、ロシアの傘から外れた隣国のフィンランド、そして同緯度にあるアイスランドを加えて「北欧5国」と言われるようになった。

アイスランドは、北海道に四国を加えた程の面積だが、人口はわずか 30 万程で、東京の中野区に匹敵する。9世紀よりヴァイキングはこの島をイギリスやフランスに行く中継基地としていた。よって民族のルーツは、男性はヴァイキング（主にノルウェー人）で、女性はアイルランドから略奪してきた 467 名とされている。又、遺伝子の解析からアメリカの原住民（インディアン）の遺伝子を持つ 4 家系 80 名が含まれ、しかもそれは一人の女性（イブ）だけに由来する事も判明していた。ヴァイキングは北米にまで足を伸ばしていたのだ。

極寒の島国である事から、先住民の痕跡も無く、他民族の流入もほとんど無かった為、「血が濃く、遺伝性の疾患が多い」ことも判明した。例えば CF 病（肺に濃い粘液がたまり呼吸困難になる病気）の遺伝子を 25 人に 1 人が保有していて、2500 人に 1 人が若年時に発症するという事も判ってきた。そこで国は、1998 年に新法を發布して、国民の DNA を登録制として、疾患の低減を図った。その結果アイスランドは、家系と病気の研究する通称“遺伝子ハンター”の格好なターゲットになっていた。

私は遺伝子工学には全くの門外漢であったが、「私も知りたい」と、酔狂の虫がうずき出した。この月の末にはポリの町が空っぽになる夏至祭が来る。3泊4日の旅で、遺伝子工学が判る道理はないが、「一見は百聞にしかず」だ。よし、アイスランドに行ってみよう、と決心した。

ところが、簡単だと思っていた飛行機やホテルの予約がネットでは全くもって取れなかった。そこでポリで一番大きな旅行会社を訪ねると、『大分高いのですが』とって飛行切符とホテルのバウチャーを用意してくれた。欧州の最貧国、北欧の辺境と思っていたアイスランドの首府・レイキヤビクのホテル代は、ニューヨークやパリよりも高かった。訳を聞いてみると、アイスランドでは言わば『ゴールド・ラッシュ』が起きている、との事だった。

元来、アイスランドは漁業だけが産業であったが、「世界一大きな温泉露天風呂」を看板に観光産業が急速に伸び、又地熱発電技術の進化で、電力は世界一安くなった。そこに着眼した米国の大手アルミ会社、アルコアがアルミの精錬工場を造ったのだ。GDPは一気に拡大して、景気は加熱した。当然、物価は高騰し、インフレが進んだ。これに対処するために、EU諸国の動向とは逆に、高金利政策が導入され、銀行の年利は2%から瞬く間に15%まで引き上げられた。

一方この国は、小国の生き延びる道として、ルクセンブルグやリヒテンシュタインの様に、金融立国を目指し、銀行業務の完全自由化を進めていた。そこで銀行は、アメリカ同様に多くの金融派生商品（デリバティブ）を生み出した。中には円建ての“サムライ債”まであった。

勤勉な国民性と、透明性の高い政治・経済に裏打ちされたこの小国に、高い利回りを求めて、この国の年間予算（約5000億円）より数十倍多い外貨が流れ込んでいたのだ。

このあり余った金は、当然、海外の株式や不動産投資に向けられた。市民は『このまま行けば、祖先がやったように、世界を丸ごと我が国のものに出来る』と豪語し始めていた。ヴァイキングの遺伝子は脈々と受け継がれていたのだ。

バブルの崩壊を経験している日本人の私には、これはきっとまずい事が起きるとの予感がした。（案の定、2年後の2008年にはリーマンショックが世界の金融機関を襲い、それまで流入してきた外貨はアツと言う間に逆流して、アイスランドは国家破綻寸前に追い込まれた）

ニーミネン医師の計らいで、私はアイスランド大学で3人の遺伝子工学の教授と会うことができた。彼等は私に、DNAはA、T、G、Cの4種の塩基（酸と対になって働く化学物質）からなるという基礎知識から、子宮頸癌を短時間で発見するDNAチップの使用方法等、専門的知識まで教授してくれた。

又、ダウン症等重篤な病気を持った胎児を宿していることが、DNAの簡単な検査により出産前に判定出来ることになり、産むべきか？中絶すべきか？の倫理的問題も発生している事を教えられた。日本では、「それでも産む」という女性が多いのに対し、欧米では中絶を選ぶ女性が多かった。（後に、アンジ

エリーナ・ジョリーが発症前に、乳がんの手術を受けた理由に共通する)

夜は3教授が日替わりで、私を自宅の夕食に招いてくれた。やはりどの家庭でも、奥様方が私の話し相手をして、主人達はキッチンとリビングの間を忙しく往復していた。

食事が始まると、遺伝子の話は出ず、北欧における女性の地位について、多く話された。『役所でも会社でも、美人が出世して、得をしているのだから、美人税を創設すべきではないか』との私の冗談は大いに受けた。奥様方に、職場での男女の賃金格差について聞いてみた。すると答えは概ね、『女性社員は懸命に働き、同一賃金を受けながら、男性同様に部課長まで出世できます。しかし、その分高齢出産が増えて、重役を狙える大事な時期に、出産と育児期を迎えてしまい、その結果、役員ポストの多くは男性に占拠されてしまいます』だった。

やはり古今東西、女性は出産と育児が故に、男性より損をしているのだ。女優・原節子が言った『男児は男性が産めばよいのよ』は、けだし名言である。

2016年07月11日

【世界最北の日本レストランーフィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（69）】 北欧で、有名な日本人は？



青色・環礁温泉露天風呂

夏至祭の休日を利用してやって来た白夜のアイスランドは、国名から真っ白な島をイメージしていた。しかし、着陸前に窓越しに見たのは、火山から噴出された玄武岩に覆われた濃い灰色の島だった。

北欧は森の国と言われるが、アイスランドの森林面積は国土の1%に満たない。それには大きな二つの理由があった。一つ目は、化石燃料が普及するまで、入植者達は暖を取る為に森林を伐採し続けた事。



湖の温泉露天風呂

二つ目は飼羊である。羊は衣食住の衣（羊毛）、食（羊肉）と住（テント布）をもたらす寒冷地には格好な家畜である。しかし、牛が草の葉を食べるのに対して、羊は草の根まで食べてしまう。土壌を生み出す主原料の草を、文字通り根絶やしにしたのだ。このアイスランドの実情を知らずして、北欧は「森と湖の国」などと語ってきた自分が恥ずかしくなった。



沼の温泉露天風呂

アイスランド大学で遺伝子工学の勉強をした後、温泉好きな私は毎晩、レイキャビク近在の白夜の露天風呂を楽しんだ。添付写真の様にラグーン・湖・沼タイプなど大きさも水の色も様々で、飽きることが無い。しかし、残念ながら水着着用が原則で、日本人にとっては温泉プールに来たような違和感も覚えてしまう。

アイスランドの自然は他の北欧諸国と大いに違っていたが、女性が強いという印象は変わらなかった。到着2日目、何か土産物でもと思ってデパートを探したが、アイスランドにはデパートは無く、仕方なくスーパーに行ってみた。重い入り口のドアを開けると、そこは冷気が直接店内に入るのを防ぐ、奥行き深いエントランス・ルームだった。そこには客がつれてきた大きなセントバーナードが主人の帰りを大人しく待っていた。私とその犬に見とれていると、中年のご婦人が私を追い越して行った。奥の扉の前では、初老の男性がそのご婦人のために扉を開けて待っていた。北欧では、よく見る光景だ。

その晩、夕食の席で「北欧では何故、女性上位なのか？」という話になった。教授も御夫人も口を合わせたかのように、「男性が強いのは戦時だけで、平和が長く続くと、女性の方が強くなる」と言った。しかし、私には納得出来ない。平和な国は北欧だけではない。私が訪ねた平和な南の島々では、男たちはひがな一日ぶらぶらしている一方、女たちはタロイモの収穫や胡椒の栽培、そして家事をこなしている。しかし男たちは家長としてやたらと威張っている。

そこで私は北欧に来て以来ずっと考えていた自説『その昔、バイキングが略奪してきた女性たちは、一旦は頭領である船長の元を集められて、手柄に応じて、手下たちに分け与えられた。手下にとって女性は、頭領からの賜りものである故に、ゆめゆめ粗末に扱うことはできない。日本の裏社会でも、女性たちは“姐さん、姐さん”と呼ばれ、大事にされる傾向がある』と述べた。皆には真新しい説のようで、大いに受けた。

夏至祭が終わってアイスランドから戻ると、ポリは本格的な夏を迎えて、学校も企業も夏休みに入っていた。ポリの住民は旅行に出て、外からは沢山の観光客がやって来ていた。いづこも同じで、旅行者は財布の紐がゆるい。お陰で私の店も、書き入れ時となる。

若年の観光客たちは私の着る作務衣を見て、カウンター越しに日本に関するいろいろな質問をしてくる。その中で『日本人はフィンランドの事をどのくらい知っていますか?』という質問が多い。この国の人たちは、日本人に似て、外国の人から自分たちがどのように思われているのか?に強い感心がある。

ここ数年マスコミを通して、多くの日本人はフィンランドが教育大国である事を知った。一方いまだに「フィリピンなら知っている」「スイスの別名」などと言う人もいる。しかし、私はいつも客に「社会福祉や通信が発達していて、教育水準は世界一の国である事を、よく知っていますよ」と、お世辞を言うことにしている。

質問には質問で返すのが私の流儀だ。若者たちに『貴方は日本のことをどれほど知っていますか?』と質問すると「トヨタ、ソニー、ニコン」などの企業名、「侍、忍者、柔道、空手、カラオケ、芸者、フラワーアレンジメント、折り紙」などの文化、「豆腐、寿司、ワサビ、すき焼き」などの日本料理に関する答えが返ってくる。

次に私が、『日本の有名人を知っていますか?』の質問をすると、みな口をつぐんでしまう。たまに出るのが「ヨーコ・オノ」「マダム・バタフライ」などだが、これととも、「ジョン・レノンの女」「プッチーニの曲」としてしか、知られていない。若者たちは全然と言ってよいほど、日本の有名人を知らないのだ。

アイスランドから戻った数日後、私が月一で行く床屋のオヤジ（日本に一時帰国した際、理髪鉋を蒲田で買ってあげた人）が、10人程の友人を連れて、昼過ぎにやって来た。

その友人達はどういう訳か床屋のオヤジを敬い、話は彼を中心に進んでいた。後に知るのだが、床屋のオヤジはこの地区の退役軍人会の地区長だった。地区長は無給だが名誉ある職位である。

日本ではあまり喧伝されていない事だが、北欧では実働をあまり伴わない名誉職は無給である。駅長、消防署長それに市長を含む市議会議員達は無給である。別に自分の収入源をもっているからだ。ヘルシンキ市長は、東京にたとえるなら都知事に匹敵するが、それでも無給である。世界最大都市の一つロンドンの市長も無給であると聞く。

それでは市長になる人などは居なくなるのではないか?と思うのだが、さにあらず、ヘルシンキの市長選では、毎回100名を超す候補者が立つ。必要経費は支給されるが、その用途は市民オンブズマンによって、厳しくチェックされている。日本の知事や議員のように、高級を取り、大名旅行をする人達とは大変な違いだ。スキャンダルが発生すると、彼らは潔く辞職する。給料を貰っていないので、辞めたからといって、妻子を路頭に迷わせる事はないからだろう。

日本では、猫が駅長になったり、アイドルが一日消防所長になったりする。そのような職位や、会議日数の少ない県会・市議会議員は無給で良いはずだ。

私の店には女性グループ客は多いが、この日のように、高年の男性が一度に来ることは珍しい。そこで彼等に、「日本人の有名人を知っていますか？」の質問をぶつけてみた。

すぐに返ってきたのは予想通り「トウゴウ（元帥）」「ヒロヒト（昭和天皇）」だった。そして、意外にも「ミツコ」の名前が出た。一瞬、美智子様と思ったが、そうでは無かった。ミツコは戦前、日本から来たハンガリー大使の奥様で、そのエキゾチックな美貌がヨーロッパの社交界で人気を博し、大手香水メーカー・ゲラン社の一ブランド銘になった。

そして最も驚かされたのは、マダム・サダヤッコ（川上貞奴）の名が出たことだ。知っている訳を聞いてみると、『私の祖父はスウェーデン人で、1900年のパリ万博に招かれて、彼女の日本舞踊を“目の当たりに見た”をいつも自慢していたから』と言った。貞奴は築地小劇場の基をつくった川上音二郎の奥様で、元は名代の芸妓であった。欧州で浮世絵が人気を博し、ジャポニズムが画壇を席卷した後だけに、本物の芸者の舞踊は、パリっ子から大喝采を受けた。そして、当時の大統領エミール・ルペからオフィシェダ・アカデミー勲章を頂戴した。海外における日本女性、初の叙勲者である。私は忘れていた名前を聞いて、思わず涙しそうになった。

その他、リトアニアの日本大使で日本のシンドラーと呼ばれる杉原千畝や、アフリカで急逝した細菌学者、野口英世の名を挙げた人もいた。

残念ながら北欧では、野球はマイナー・スポーツであるため、王もイチローも無名であり、一部の文学マニアを除くと、川端、三島、村上を知っている人はいなかった。他方、ノルディック・スキーの覇者、荻原兄弟を憶えている人は多かった。

翌週、ポリの生き字引と呼ばれる、ポリ大学の金属学教授が『夏休みの旅行の前に、もう一度貴男の寿司を食べたい』と言って店にやって来た。私がポリに日本料理店を開いたのも、彼から「世界最北の日本レストランになる」と言われたからだ。

私は彼にも、日本人の有名人を知っていますか、と問うてみた。彼の辞書には「知りません」という言葉は無いようだ。眉間に縦ジワを刻み、考えこんでしまった。私は彼の答えをじっと待った後、『先生でも答えに窮することがあるのですね！』と追い込んだ。

すると彼は右のコブシを挙げて叫んだ。 “ハチコー”

2016年08月08日

【世界最北の日本レストラン—フィンランドで苦闘した あるビジネスマンの物語（70）】 「有名」「無名」の分かれ道



咲き始めのスズラン

日本では5月、北欧では6月に咲くスズランが、我が家の庭では7月中旬から8月の初旬にかけて咲く。スズランは北欧で最も人気のある花と言われ、スウェーデンでもフィンランドでも国花とされている。特にフィンランドのイメージとピッタリ符合する。スズランは寒さに耐え忍んだ後、葉の中に隠れるようにしながら、しっかりした純白の花を咲かせる。その清楚で可憐な姿は、見る人の心を洗い流してくれる。

八月の終わりにはスズランと見まごう、赤い野苺（写真）が庭の片隅に咲き始める。北欧ではこの野苺を「赤いスズラン」と呼んでいる。

アイヌ伝説（後年、義経伝説と混交？）にも「赤いスズラン」が登場する。正史では、岩手県平泉で処刑されたという源義経が、実は北海道に逃げ延び、美しいアイヌの乙女に匿われる。頼朝の追っ手から義経を隠したが故、彼女は雪の降る中、磔刑に処せられてしまう。雪上に流された乙女の血は、雪解けと共に「赤いスズラン」となって大地に蘇った、と伝えられる悲しい物語である。



満開時のスズラン

純白のスズランが満開になった8月初旬の昼下がり、ポリの外人クラブの一つであるフレンチクラブが、食事会を私の店で催してくれた。白ワインに、見た目も、アルコール度数もよく似た日本酒は、皆から賞賛されながら沢山飲まれた。ランチにワインは付き物だから、フランス人は昼から酒を飲む事に抵抗が無い。



赤いスズラン (実は野イチゴ)

会が終わっても、居残って日本酒を追加所望する若者がいた。彼は『私の祖先はアルメニア人です』と、誇らしげに自己紹介を始めた。現在のアルメニア国は、西はトルコ、北はグルジア、東はアゼルバイジャン、南はイランに囲まれた人口 300 万人程の小さな国である。しかしアルメニア人は、端倪すべからざる民族である。

建国は非情に古く、旧約聖書に「ノアの箱船はアトラス山に漂着した」とあるが、(現在この山はトルコが領有) 当時そこはアルメニア人の居住地であった。それが故、アルメニアはキリスト教を国教とし

た世界最古の国であり、西洋の発祥国とも呼ばれる。

そのアルメニアは12世紀に東ローマ帝国に破れ、民族は世界中に四散した。現在アルメニア人の6割は海外で生活している。日本マクドナルドを創設した藤田田の著『ユダヤの商法』の中に、「ユダヤ人が三人かかっても、アルメニア人一人に敵わない」と記されているほど、格闘技に優れ、商才にも長けた民族である。

しかし20世紀初頭、アルメニア人はオスマントルコから迫害され、100万人を超えるホロコースト（大虐殺）を受けた、悲劇の民族でもある。

私は半世紀程前、巴里に長逗留したことがあり、その時の思い出を、このアルメニアの若者に話した。『当時私は毎日のように、サロンをハシゴしました。昔、サロンといえば宮廷の応接室を指していましたが、当時はもう“お洒落な酒場”を意味していました。そこには多くの有名人が集っていましたが、中でもアルメニア出身者が目立っていました。「剣の舞の作曲家」アラム・ハチャトリアン、「人気のシャンソン歌手」シャルル・アズナブール、「映画界の巨匠」エリア・カザン、そして「アイドルの元祖」シルビー・バルタン等もよく顔を出していました・・・』

若者は私がアルメニアを知っている事に大喜びして、私に握手を求めながら『テニスの四大グランド・スラムの覇者、アンドレ・アガシもアルメニア人です。女優のブルック・シールズを嫁にしたのは失敗だったが・・・』と、お国自慢を始めた。

「ポリの生き字引」と言われる金属学教授が知っていた日本の有名人は“ハチコー”であった事にショックを受けた私は、その翌日に店で働く中国娘やカツ丼を食べにきた中国の学生たちに、『フィンランド人は中国の有名人をどれ程知っていますか？』と聞いてみた。すると『孔子と毛沢東だけ』が答えだった。

そんな事があっただけに、300万人のアルメニア人が、30億の東洋人よりも世界的有名人を輩出するのは、一体どういう事なのか？と自問自答が始まった。第一感は「語学」だった。七つの海を制した英国や、多くの植民地を持ったドイツやフランスが、言語力を持って沢山の有名人を世に出した？しかし、アルメニア人はアルメニア語を話し、アルファベットとは全く似ていないアルメニア文字を使う。

次に皮膚の色を考えた。「白は百難を隠す」という事か？しかしそれでは、有名な黒人の歌手や俳優がアメリカに沢山いる事に矛盾する。いろいろと考えてみたが、答えは一向に出なかった。

例年の夏、私は暇を見つけては、北欧一の砂浜と言われる、ポリ郊外のウーテリ海岸に行き、のんびりと日光浴を楽しむ。しかしこの年は、税金の支払いの為に、愛車を売却してしまっていたので、足が遠のいていた。そこで、レンタ・カーを借りて、久しぶりにウーテリ海岸を訪ねた。

保険が掛っているとはいえ、借りた車だけに、慎重に運転しなくてはならない。特に気を付けねばならないのは駐車場だ。日本でのように、前後の車にピッタリと駐車すると、お年寄りや、「バンパーは押す為に装備されている」と思っている御仁から、車体に傷を負わされてしまう。海岸沿いの松林の中に造られた仮設駐車場で、私は慎重に駐車位置を選んで車を停めた。

ドアを開き、下車しようと足下を見ると、そこにはゴルフボール大の黒く蠢く固まりがあった。よく見ると、先客が捨てたと思われる果肉の残った洋梨の種に、黒アリたちが群がっていたのだ。北欧に来て以来、黒アリを見たのは初めてだ。「アリは世界中に分布する」と読んだことはあったが、表土が凍結する北欧では生存できないと思っていた。しかしそれは、私の間違いだった。我が家の庭と違い、メキシコ暖流が流入するボスニア湾周辺の地中は、冬でも凍結しないようだ。

塩分の薄いボスニア湾を渡る、サラサラした海風に吹かれながら、普段なら、秋にはどんな新メニューを出そうか？キノコ狩りはいつにしようか？などを考えながら午睡を楽しむ。しかし、今回は答えの出していない、「有名」「無名」の分岐点はどこか、を考えながらウトウトした。

すると、さっき駐車場で見た黒アリの群れが脳裏に浮かんだ。同時に子供の頃、夏休みの研究課題として、家の縁の下から這い出すアリの生態を観察した事も思い出した。昆虫図鑑から、アリはハチ目に属する昆虫である事も学んだ。洋梨に群がっていたアリたちは、近くのアリの巣から這い出て来たはずだ。

地上に棲む私たちは、ハチの巣はよく見るが、アリの巣は見たことが無い。私はテキサスの砂漠で大きなアリ塚を見た事があるが、すでにアリはそこには居なかった。アリ塚はアリの巣を造る時に残った土らしい。私たちが見るのは、餌に群がるアリや、餌を運ぶアリの隊列だけだ。

どのハチの巣にも、どのアリの巣にも女王が君臨しているはずだが、地上の女王バチはヒーローとして人間の眼に写る。一方、女王アリは地中から出てこない故、表のヒーローにはなれない。西洋をハチの世界とすれば、東洋はアリの世界ではないか。

これは、文化人類学上、画期的な新定説ではないか？と馬鹿なことを考えながら、心地よい眠りに落ちていった。